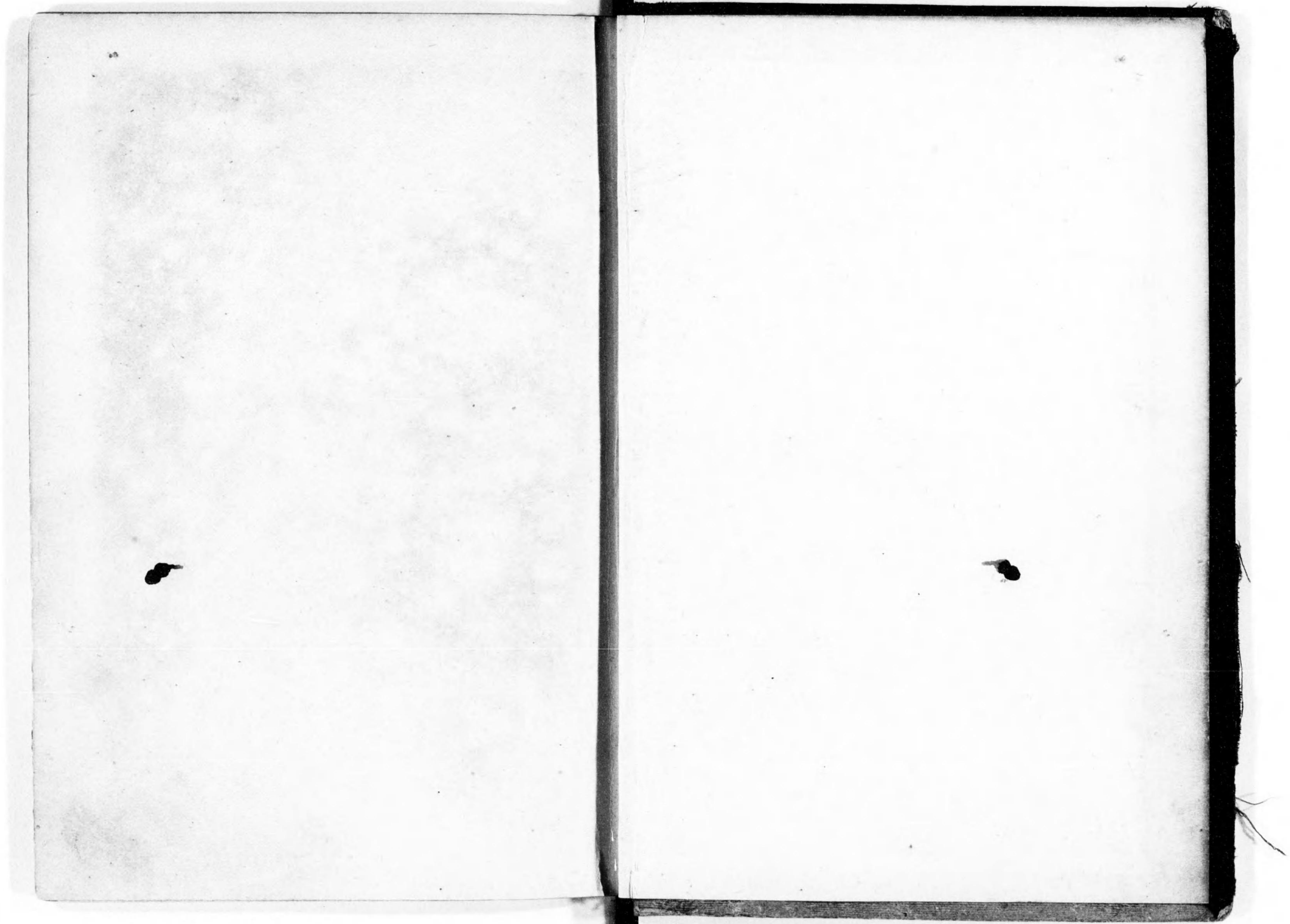


230
24

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5

始





浮田和民講述

西洋上古史

早稻田大學出版部藏版

230
24



15263

西洋上古史目次

緒論

歴史の定義——一 歴史の種類——二 歴史の範圍——四 人類の起原——六 有史以前の時代——七 人類の差別——一〇 歴史的人種——一四 歴史的人類の起原——二〇 アリヤン人種の本土——二四 歴史地理——二七 年曆——三〇 歴史の時期——三四

第一編 東方史

天然地誌——三七 名稱の起原——四〇

第一章 埃及史

土地及び人民——四二 埃及學——四六 埃及史の起原——四八 舊帝國——四九 中帝國——五二 新帝國——五三 埃及の末路——六〇 文明略説——六五

第二章 加耳特亞亞西里亞及び巴比倫

地理及び人種——八〇 亞西里亞學——八三 加耳特亞王國——八五 加耳特亞人の文明——八八 亞西里亞帝國——九四 亞西里亞の文明——九九 巴比倫帝

西洋上古史 目次

國——一〇五 巴比倫の文明——一〇九 以上三王國年表——一四一

第三章 希伯來人及びフィニシヤ人

希伯來人——一一五 猶太の宗教及び文學——一二五 非尼士亞人——一二六

第四章 波斯帝國

馬太人及び波斯人——一三七 波斯帝國の創業——一三九 波斯帝國の組織——
一四四 波斯と希臘との交戦——一四八 波斯帝國の衰亡——一五〇 馬太及
び波斯諸王年表——一五四 文明概略——一五五 波斯帝國の版圖——一七〇

第五章 印度人

印度の名稱——一七一 古代の印度——一七一 文明及び宗教——一七三 政治
上の變遷——一七七

第六章 リデヤ王國

リデヤ王國の起原——一八〇

第七章 東方の國際歴史

國際的關係の起原——一八四 兩文明の接觸——一八七 希伯來人及びフィニ

第二編 希臘史

第一章 土地及び人民

希臘の地形——二〇八 北部希臘——二〇九 中部希臘——二一〇 南部希臘——
二一一——周圍の諸島——二一三 地形の影響——二一四 人種の起原——二一八
人種的一致——二二二 東方文明の西漸——二二六

第二章 ドリヤン人の移住及びスバルタの興起

ホーマーの時代——二二八 當時の社會——二三一 希臘初代の國家——二三
六 ドリヤン人の移住——二三八 小亞細亞殖民の起原——二四二 スバルタ
の興起——二四五 ライカーガスの立法——二四七 スバルタの政體——二五
〇 元老會議——二五三 人民會議——二五四 五人の執政——二五五 人民の
階級——二五六 社會制度——二六〇 メッセニヤ戦争——二六七 戦争の結果
——二七〇

第三章 僭主の時代

アイナニヤの革命——二七四 僭主の起原——二七六——アイオニヤの影響——二

七九 アルゴスの王フアイドン—二八〇 シキオンの僭主—二八三 コリ
ソスの僭主—二八六 メガラの僭主—二八九 僭主制の利害—二九一 殖
民地の建設—二九五

第四章 アセンスの興起

アツチカの地勢—二九九 アセンスの初史—三〇〇 アルコン制度—三〇
三 貴族政治の弊害—三〇六 階級的黨派の競争—三〇七 ドレコーの法
律—三〇八 カイロンの亂—三一〇 賢人ソロンの現出—三一三 負債解
除法—三一八 階級制度—三一九 累進所得税—三二二 議會制度—三二
三 ソロンの法律—三二五 僭主ピシスツレタス—三二七 僭主制の廢滅
—三三一 クリスセニースの改革—三三四 スバルタの干渉—三四〇

第五章 ベルシヤ戦争

リテヤ王國の興亡—三四六 アイオニヤの征服—三五〇 シ、ヤ遠征—三
五三 アイオニヤの反亂—三五八 サルテリスの燒失—三六二 ラデーの
海戦—三六四 第一回の希臘本部征伐—三六八 第二回の征伐—三六九
マラソンの役—三七二 セミストクリリス—三七九 アリストタイデス—三
八二 波斯の戦備三八五 ザークシリスの進軍—三八六 コリンス海峡の
大會—三九〇 ヘルモピリーの戦—三九二 アルテミシオムの海戦—三九

六 アセンスの燒棄—三九九 サラミスの海戦—四〇一 ザークシリスの
歸國—四〇九 プラテーエーの役—四一一 ミカレーの役—四一六 希臘
成功の理由—四一八

第六章 アセンスの盛時

城壁の再建—四一九 アリストタイデスの改革—四二二 アロス同盟の成立
—四二四 セミストクリリスの末路—四三〇 セミストクリリスの遁逃—
四三二 セミストクリリスの最期—四三四 カイモンの政策—四三六ペリ
クリリスの政策—四三七 保守黨の失敗—四四〇 憲法上の改革—四四一
アロス同盟本部の移轉—四四三 コリンス及エーギーナとの開戦—四四
五 スバルタ及びシアースとの開戦—四四六 長壁の落成—四四九 兩政
治家の調和—四五〇 三十年の和約—四五二 貴族黨の瓦解—四五四 ベ
リクリリスの時代—四五六 當時の美術及び文學—四六一 アセンス覇業
の弱點—四六四

第七章 ペロポネネーソス戦争

戦争の原因—四七一 コリンスとコルカイラとの開戦—四七四 アセンス
の干渉—四七五 ボチアイヤの謀叛—四七七 スバルタの同盟會議—四七
八 スバルタの要求—四八二 兩同盟の強弱—四八六 ヘリクリリスの戦

略—四八六 戦争の開始—四八九 疫病の激發—四九五 ヘリクリリスの晩年—四九七 戦争の殘虐—五〇一 戦争の進行—五〇五 キニアスの和約—五〇七 和約破綻の理由—五〇九 アルキビアデス—五一一 戦争の再發—五一三 シ、リ、遠征の由來—五一五 遠征の準備—五一八 遠征艦隊の進發—五二〇 シラクユースの攻圍—五二三 遠征艦隊の全滅—五二六 アセンスの危急—五二九 アルキビアデスの反覆—五三一 アセンスの變動—五三三 ヘリスボンドに於けるアセンスの勝利—五三六 ライサンダー及びサイラス—五三九 アルキビアデスの罷免—五四一 アルギニユセーの大海戰—五四二 エーゴスボタモイの敗軍—五四四 アセンスの落城—五四六 三十人の僭主—五五〇 アルキビアデスの最期—五五二 民政の恢復—五五四 戦争の結果—五五六 詭辯學者(ソフィスト)—五五七 ソクラテス—五五九

第八章 スバルタ及びシープスの盛時

スバルタの擅制—五六三 スバルタと波斯との戦争—五六五 コリンス戦争—五六六 アンタルギタスの和約—五六七 スバルタとシープスとの開戦—五六八 シープスとアセンスとの同盟—五七二 スバルタに於ける列國會議—五七四 リユークトラの戰—五七五 シープスの覇權—五七八 エバミノンダスの人格—五八四 希臘列國の大勢—五八六

第九章 マセドニヤの盛時

マセドニヤの土地及び人民—五八九 フィリッポ二世—五九一—其の外交政畧—五九二 フィリッポの成功—五九六 マセドニヤの兵制—五九九 波斯征伐の計畫—六〇一 アレクサンデル大王—六〇二 歴山大王の遠征—六〇五 大帝國の經營—六一五 大王遠征の結果—六一七 諸將の分争—六一九 第一、マセドニヤ王國—六二三 第二、埃及王國—六三一 第三、シリヤ王國—六三四 自餘の諸小國—六三五 希臘の末路—六四〇

第三編 羅馬史

第一章 伊太利の土地及び人民

地中海の南北兩岸—六四七 伊太利の地理—六四八 伊太利の區分—六五〇 伊太利の人口—六五二 エトルスカン人の文明—六五三 羅馬史の特質—六五五 羅馬史の區分—六五九

第二章 王政時代

第一の問題—六六一 問題に對する解釋—六六三 羅馬の起原—六六六 諸王の傳説—六七一 制度に關する傳説—六七四 サイヴァイアスの憲法—六七八 古代羅馬の社會—六八二

第三章 伊太利征服の時代

共和制の憲法—六八三 共和制初年の困難—六八四 サムナイト戦争—六八五 エバイラス王ピルラスとの戦争—六八六

第四章 海外征服の時代

第一、ピュニク戦争—六八八 第二、ピュニク戦争—六九一 戦争の結果—六九六 東方に於ける戦争—六九八 第三ピュニク戦争—七〇一 羅馬の位置—七〇三

第五章 革命内亂の時代

羅馬の憲法—七〇四 内亂の原因—七〇六 クラツカス兄弟の改革—七〇八 羅馬の悪政—七一〇 ポムпейウスの功業—七一四 第一次の三頭政治—七一五 シーザルの全ヨーロッパ征服—七一七 兩雄の競争—七一八 シーザルの經營—七二〇 シーザルの死後—七二三

第六章 羅馬大帝國

帝國の憲法—七二五 帝國の版圖—七二六 初期の帝政—七二七 帝國の全盛—七三〇 羅馬の衰世—七三二 蠻人の進入、羅馬の滅亡—七三六

西洋上古史目次 完

西洋上古史

講師 浮田和民 講述

緒論

歴史の定義 歴史とは進化の義なり。故に廣義に於ては歴史の語は總て進化する事物に適用するを得べし。天體地球動物植物の類亦た皆な歴史あらざるはなし。然れども通例歴史と言へば必ず狹義に解せらるゝものなり。是を以て單に歴史と云ふときは則ち人間社會の進化を意味す。蓋し人間社會は地球上に於ける萬物進化の極致にして現今進化現象の最も大なるものなればなり。歴史には廣狹の二義あり。然れども史學といふときは單に一個の意義を有す。即ち人間社會の進化を研究するの學といふ意義是なり。故に史學の主題は人間社會の進化なり。其の目的は人間社會の沿革を研究して其の進化の順序及び法則を發見せんとするに在り。人間社會は最も複雑なる現象にして今猶ほ進化の最中にあり。其の科學として成立するは史學の基礎たる他の諸學科の完成した

る後ならざる可からず。現今人間社會の歴史は未だ敘述的の道程に在りて歸納演繹の時代に達せざるものと言ふ可し。故に歴史は今猶ほ話説の状態を爲して十分に史學の形體を爲すものに非ず。然れども其の研究法は正しく科學的にして現今一科の學問を爲すものなりと言ふことを得べし。

歴史の種類

人間社會は單純なる社會に非ず。寧ろ種々なる社會の聚合體なりと言ふ可し。其の組織の最も大なるものを國家とす。國家は現今社會組織の最も有力にして且つ完全なるものなり。他の社會は凡て之れに由りて維持保護せらるゝものなり。最初の人間社會には治者被治者の分類なく、政府と社會との差別なし。是時に當り社會ありて未だ所謂國家あらざるなり。治者、被治者の分業生じ政府と社會との差別ありて始めて國家成立す。方今國家は一切の社會を包括し一切の社會を統轄するものにして所謂社會の社會なるものなり。之を主權的社會と稱す

國家の生活を叙し其の起原、發達、變遷、衰亡及び國家と國家との關係を説くものを政治史と稱す。専ら一國に就て研究するものは各國史なり。之に反して列國

相互の關係に就て研究するものは國際史なり。特に政府と政府との關係に就て記載するものは之を外交史と謂ふ。

國家の成立以前既に人間社會あり。現今と雖ども猶ほ未だ國家を成さざる人間社會あり。之を野蠻社會と稱す。又た國家の既に成立したる社會に於ても社會は獨り政治社會のみに非ず。家族の社會あり、宗教の社會あり、學術の社會あり、産業の社會あり。其の産業社會の中にも又た農業社會、商業社會、工業社會等の區別あり。國家の内外を問はず、又た必しも國家を以て中心となすことなく、各社會の起原、發達、變遷、進化を研究するもの之を文明史と稱す。

世界各國の政治及び文明は單獨孤立せるものに非ず。其の最初こそ單獨孤立なるに似たりと雖も其實は間接直接に親密の關係を有するものなり。若し此の事實なかりせば政治史も文明史も各國政治史若くは各國文明史にて足れり。然れども以上の事實あるが故に更に又た特種の歴史を必要とす。世界史若くは萬國史と稱するもの即ち是れなり。

世界史若くは萬國史は單に各國の歴史を拔萃略述するものに非ず。是の如きは

一個の歴史に非ずして數個の歴史をなすものなり。萬國史は一個の歴史を爲さざる可からず。各國の政治及び各國の文明が如何にして世界の政治及び世界の文明を爲したるかを示さざる可からず。世界史若くは萬國史の特色は實に此に在りて存す。

歴史の範圍 是の如く歴史の範圍は廣濶なり。故に單一の方面のみより觀察すべきものに非ず。トマス、アルノルドの言へるが如く歴史は社會の傳記なり。既に社會の傳記たる以上は社會の一部分のみに注意を傾け、他の部分を忘却するが如きことある可からず。フリーマン曰く歴史は過去の政治なり、政治は現在の歴史なりと。夫れ國家は社會の社會なり、而して政治は國家の活動なれば文明の一大要素にして歴史の一大題目たるべきこと固より論なし。然れども政治に關する事のみを以て一般歴史の眼目とは爲す可からず。政治のみに着眼しては反つて政治の真相を解し得べからざること多し。政治史と文明史との差別も絶對的差別にあらず。歴史研究の便宜上是の如く區別するに過ぎざるのみ。カレライヤ曰く「世界の歴史は單に大人の傳記なるのみ」と。是れ歴史と傳記との

差別を混亂するものにして歴史の定義としては甚だ不可なり。然れども大人は社會進歩の一大動力なり。其の傳記にして社會の變遷進化に關係ある部分は之を歴史の範圍に收めざる可からず。社會を離れて個人なく個人を離れて又た社會なし。個人的方面より歴史を觀察するも亦た一の方法たるを失はず。然れども此方面のみよりして觀察すべきものに非ざるなり。英國の學者ゴルドウキン、スマミスは人間進歩の要素を分解し歴史の題目を大別して道德的、智力的及び生産的の三種となせり。即ち道德上知識上及び産業上より歴史を觀察せんとするものなり。且つ附言して曰く此の三者は差別ありと雖も分離せるに非ずして相互に密接の關係を有すと。道德智識及び産業は人生の三大要件に相違なしと雖ども人生は此の三者のみに因て成立するに非ず。宗教、政治及び法律等の要素なくして道德も智識も産業も成立進歩すべきに非ず。故に獨逸の哲學者ワッテは五個の方面より歴史を觀察したり「ミナ」第二卷。第一智力的、第二産業的、第三美術的、第四宗教的、第五政治的の方面即ち是なり。歴史研究の方法としては成るべく範圍を狭小にして成績を擧るを期せざる可からず。

然れども歴史の眞面目を發揮せんとするときは成るべく多方面より觀察せんとを要す。

人類の起原

人類の起原は書契以前に在りて記録の徴すべきものなし。唯だ人類の遺物によりて其の起原の悠久なることを知るに至りたるは近世科學進歩の結果なりとす。概して古代諸國民の傳説は人類の起原を極端なる太古に置き近世歐米諸國民は妄誕なる近古に置くものなり。支那の歴史家司馬遷四前紀九十一一年は「春秋緯稱自開闢至于獲麟凡三百二十七萬六千歲分爲十紀」と言へり。巴比倫の史家ビロイサス獨逸二百年頃の遺書によるに紀元前三萬七千年以前に大洪水あり其の洪水以前十王四十三萬二千年洪水以後八十六王三萬四千年を経過し、カルデヤの正史時代に達すと爲せり。又た埃及の歴史家マネ獨逸十紀元前二百年頃の傳説によるに始祖ミーニス獨逸より以前に神代準神代及び帝王の時代凡そ二萬五千年ありしと言へり。然るに西洋近世の説は聖書に基き僅々數千年を以て開闢の時代と定めたり。現に英譯の聖書は紀元前四千四年を以て天地開闢人類紀元の年代となせり。近世學術の顯現は寧ろ古代の傳説を以て道理に近

しとなすものなり。地質學者及び天文學者の臆説によれば地球の年代は少なくとも六千萬年以前なりと云ひ或は生物の起原すら一億年以前なりと云ひ、地球の外皮は二億年乃至四億年を経過したりと言ひ、又た人類の遺跡も一萬年乃至十萬年以前に達するものありと言へり。

有史以前の時代

一千八百四十七年暹國の地質學者フアルクハムメル、動物學者ステインスツルツ及び考古學者ウオルサールの三人、北方考古學會の囑托により、遺跡を發掘したる研究の結果爰に新奇なる、有史前古物學の基を開くに至れり。爾後諸國に於て太古未開人種の遺物を發見したるに是等古物は往々既に跡を其地方に絶ちたる象犀、狼熊等の遺骨と共に發見せらるゝの例あり。

考古學者は人類の使用したる器具及び器具の性質によりて其の智識及び開化の程度を察し有史以前の時代を三期に別ち第一期を石器時代(The Stone Age)第二期を青銅器時代(The Bronze Age)第三期を鐵器時代(The Iron Age)と稱す。而して石器時代に前後二期あり。前期を舊石器時代(The Paleolithic Age)と云ひ後期を新石器時代(The Neolithic Age)と言ふ。前後石器時代の名稱は現今英國の人類學者サート

ヨーン、ラボックの發意にして一般學術界に採用せらるゝに至れるなり。舊石器と新石器との區別は僅かに石器を鍊磨したると鍊磨せざるとの差違なりと雖ども、此間には地球上の大變遷を経過し頗ぶる長年月の隔離あり亦た以て人類最初の進歩の如何に遅々たりしかを知るに足れり。舊石器時代は穴居の時代なり。家畜もなく農作物もなく又獸皮の外固より衣服あるとなし。唯た其の進歩したる所に於ては石器に大象、馴鹿、熊等の形像を粗雑に彫刻したるものあり。佛國の西南部にある洞穴の中より發見したる大象(Mammoth)の牙には大象の形を彫りたるものあり。此の大象は過去の動物にして現在地球に存在するものに非ず。其の人間と同居したるは舊石器時代の初期なりと言へば、此の象牙及び之を彫りたる人類の年代の如何に悠遠なるかを察するに餘りあり。當時英國は大陸に連結して未だ島にあらず、且つ氣候今よりも寒冷にして極北地方の動物棲住せりと云ふ。新石器時代に於ては英國は既に島にして氣候亦た寒烈にあらず、動物の種類海陸の形狀現今と異なることなし。器具は鍊磨して精巧に製造せり。家畜あり、陶器あり、又た農産物あり。産業上の程度より言へば、人類は既に漁獵時代より牧業時

代及び農業時代に進みたり。次に金屬の發明起り、青銅器時代に進入す。青銅器時代は銅若くは銅と錫との混合を以て器具を作りし時代なり。最後の鐵器時代となりては人智の開發、社會の進歩、石器時代に比すれば實に霄壤の差ありと言ふ可し。現今は猶ほ鐵器時代なりとす。以上有史以前の三時期は各國に於て其の年代を同ふするものに非ず。伊太利は青銅器時代にして他の歐洲地方は猶ほ石器時代なりし時、希臘は既に鐵器時代に進めり。ホーマーの詩中には青銅の兵器猶ほ多く鐵器の少きを見れば希臘が鐵器時代に進みたるは此の頃にして紀元前第十世紀以前なることを知るべし。而して紀元後第十五世紀に西班牙國人がカナリ、島を發見したるとき島人は猶ほ石器時代に止まれり。且つ石器時代より青銅器及び鐵器時代に至る變遷は内部より漸次に起りて順序を紊さざる場合もあれば又進歩せる他人種の侵入によりて順序を踏まず、急激に起りし場合もあり。又た青銅器時代に進みても石器の使用全たく止むにあらず、往々鐵器時代までも廢せざるの例あり。但し三時代の前後は古今同一にして青銅器時代は石器時代よりも遅く、又た鐵器時代は青銅器時代よりも遅しとす。噠國に泥澤あり。樹木

其中に倒没せり。現今噠の國木とも言ふべきはビーチ(Beech 山毛櫸と譯す)にして古來同國には此木の存せざる時代ありしを知らず。然るに澤中泥層の上部にはビーチありて鐵器之に混じ、中部にはヨーク(Oak 栢の類)ありて青銅器之に混じ下部にはバイン(Pine 松の類)ありて石器之に混じ居れり。是れ明白に泥澤の各層を爲したる時代の前後及び其文明を知るに足るものにして彼の噠國の三學者は之に由りて始めて世は石器時代、青銅器時代、鐵器時代あることを發見したり。彼の瑞西に於ける湖居の遺跡中にも三時代の變遷分明に見ることを得べしといふ。

以上は最近五十年間學術進歩の結果單に遺物によりて有史以前の歴史を知るの一端なり。此外に人類學あり、土俗學あり、頭骨學あり、又た比較言語學等あり。總稱して之を人類學といふ。太古の人間社會及び現今の文明社會以外に於ける人類の状態を詳かにし、以て文明の起原及び發達を説明するの功甚だ大なりとす。

人種の差別 地球上に生息する人類甚だ種々ありと雖ども之を比較して其の異同を觀察するときは大抵三種若くは五種に區別することを得べし。人類學

者が人類の差別を爲すの標準は皮膚の色澤、身軀の長短、四肢の平均、頭骨の形狀、頭髮、顔色、容貌、言語の性質是なり。

第一、高加索人種即ち白哲人種。歐羅巴人種、何ヲ利人、及び土耳其人を除く、西部亞細亞人、北部亞弗利加人、印度人及び歐羅巴より米國に移住したる人民皆な之に屬す。歷史上最も進歩したる人種にして自からは唯一の歴史的人種と稱せり。白色人種中、高加索地方の人民は容貌最も端正なり。北部歐羅巴人は色最も白く、南部歐羅巴人及び印度人は稍々黒色に近し。

第二、蒙古人種即ち黄色人種。東部、中部、及び北部亞細亞の人、及び舊新兩世界の極北地方に住する人民、フエスキモノ、ラ、之に屬す。支那人、日本人等は此人種の代表者にして夙に文明に進み、世界史上に大關係を有するものなり。白色人種中にも歴史に關係の少なき部分あると同じく、此人種中にも同様なるものありと雖も概して蒙古人種は歴史的人種なりと言はざるべからず。羅馬帝國の亡滅及び歐洲近世史上の三大發明(火藥、羅針盤、印刷術)を指すは東洋の歴史に參照せずして説明せらるるものに非ず。

第三 エシヲビヤ人種即ち黒色人種 通例之を亞弗利加人種と稱す。亞非利加の黒人及び奴隸貿易の結果によりて亞米利加に輸入せられたる黒人即ち是なり。黒人種の起原は遠く歴史以前に在れども此の人種は未だ歴史的人種と稱するに足らざるなり。然れども人種としては更に衰亡の徴なく、益々増殖の傾向あり。將來歴史的人種ならずとは斷言すべからず。

以上は佛國の學者クローウエーの人種別にして方今最も廣く採用せらるゝものなり。之に左の中間に屬する二人種を加へ、五大人種と爲す者もあり。

第四 馬來人種即ち濠斯太刺利亞人種 濠斯太刺利亞、南部印度、新ジラント、及び太平洋諸島の土人之に屬す。此人種は高加索人種なり、黒色人種に經過せんとする中間の種族なり。

第五 亞米利加人種即ち赤色人種 南北亞米利加の土人之に屬す。皮膚の色澤銅黑色なり。此人種は白色人種と黄色人種との中間に在り。文明歴史の潮流に孤立して新世界發見の時に及び、其中獨り北米のメキシコ、南米のビルーには頗ぶる文明發達し、古代埃及の開化に類似せり。中央亞米利加地方にも土人の開

化に進みたる痕跡あり。

近時、第四、第五は特別の人種と爲さずして一般に黄色人種の一派となすもあり。但し馬泰種中、濠斯太刺利亞及南部印度の土人は黒人種の中に入るゝ者あり。

人種に關する學者の説には異論甚だ多く或は一種となす者あり、甚しきは六十三種となす者あり。又た以上の三大人種中何れか最も古くして原人種なるべきかと久しく人種學上の問題なりしが人種上、言語上及び歴史上の諸點より觀察して今は何れも原人種にあらず、原人種は已に消滅し、方今現存する所の人種は互に姉妹の關係を有する者なるべしと云ふに至れり。

人種の差別に就て學者中一元説モノセニスムを主張する者あり。又た多元説ポリセニスムを唱道する者あり。一元説は單一の原種より人種の差別を生じたりと主張す。ダルウイン及び進化論者は概して一元説を持つる者なり。多元説は處々に人種の中心地ありて特別に人種を生じたりと唱道す。アガシーは其の最も有名なる大家にして極力ダルウインの進化説に反對したり。前世紀の哲學者カントは一元説を主張したりと雖ども、又た或る時は最初の人間は最初の池を見て之に溺死したるならんと言ひ、一元説の危険を説き多元説に傾きたり。又た折衷説を唱道して人種一元説を否定するも人類としては差別なしとて人類一致説を唱ふる者あり。一元説も多元説も何れも假定説にして確證あるに非ず。唯だ一元説は現在人類の特質を説明するに當りて能く事實に適合し、事實の説明上困難少な

しと云ふに外ならず。タイロルは最黒の人種より最白の人種に至るまで肉體の構造の作用同一なること及び如何なる異人種と雖ども結婚して雜種を生ずることを以て一元説を可とするの理由となせり。

歴史的人種

以上の人種別は自然的種別にして専ら人類の肉體及び生理的遺傳に關するものなり。種別の名稱は近世學者の創設に係ると雖ども其の實質は古代より存して世人の承認したる所なり。埃及の古記によれば紀元前二千年の頃既に黒人を募集して兵となせしとあり。又た古墳中の壁畫に古代の埃及人が認知したる四大種別の明白に掲示せらるゝもの存せり。一は赤鶯色なる埃及人、二は鶯色なるバレスタイン人、三は平鼻厚唇なる黒人及び白色なるリビヤ人即ち是れなり。猶太の古書ミヤヰ記十三章二十三節に「エテオピア人その膚をかへるか、豹その斐駁をかへうるか、若し之を爲し得ば惡に慣たる汝らも善と爲し得べし」とあり。紀元前數世紀の頃既に黒人種の一定不變なる特色を言したるや知るべきなり。然れども歴史上に最も關係を有するは以上の自然的人種別にあらずして他の標準に基きたる人種別なりとす。便宜の爲め之を稱して歴史的人種と言ふ。

或る意味に於て言語の成長發達は天然に屬するものなり。言語は多く無意志、無意識にして成長發達したり。然れども全く無意識にして發達したるものとは言ふべからず。故に言語上の人種別は前述の人種別と大に其趣きを異にせり。皮膚の變遷して或は純白となり、或は純黒となり、或は黄色となり、或は赤色となりたるは全く物質界の作用にして人間の意志は無論其の意識さへも關かり知る所に非ず。然れども言語の成長發達は精神界の作用に屬し、全く無意志、無意識なりとは言ふ可からず。方今特殊なる言語の種類千以上あり人類學者タイロルは二千と言ふ。然れども世界中の人類幾億あるも大抵前節の三大人種、若くは五大人種に編入するを得べきが如く、世界中の言語も亦た數個の種類に編入するを得べし。

(一)アリヤン語 或は印度日耳曼語若くは印度歐羅巴語とも稱す。前印度波斯希臘羅甸及び現今歐羅巴の諸國語但し匈奴人、エスソニア人の語は例外なり。は皆な之に屬す。現今歐羅巴の諸國語は概してチュートン語、ケルト語及びスラヴ語の三種と爲す。

(二)セミチク語 亞西里亞、巴比倫、希伯來(猶太)、フィニシヤ、亞刺比亞、アビシニヤ等の國語之に屬す。古代に於てフィニシヤ語は地中海の諸方に於ける殖民地に行はれたり。カーセーシは其の最も名高きものなり。又た亞刺比亞語は中世回教の蔓延に従ひ、現今亞弗利加北半の言語たり而して波斯及び土耳其等の諸言語に影響を及ぼしたり。

(三)ハミチク語 或は北亞弗利加語と稱す。古代埃及語、コプチク語近世埃及語及び北亞弗利加に於ける古代人民の言語之に屬す。古代の埃及人は此種族の代表者にしてセミチク人種及びアリアン人種は其の文明に負ふ所甚だ多しとす。高加索人種は言語の上よりすれば以上の三種別に屬するものなり。故に是より以下の種別は白色人種以外に關するものと知る可し。

(四)チュレニアン語 此名稱は意義漠然として或は以上三種別の外亞細亞及歐羅巴の諸言語を悉くチュレニアン語と稱するものあり。蓋しチュレニアン語の特質はセミチク語及びアリアン語の如く名詞、動詞等の變化なく單に前置詞、代名詞を之に結合せしむるのみにして専ら遊牧人民の言語なり。總じて亞細亞及び

歐羅巴に於てセミチク語、アリアン語及び支那種の語類に屬せざるものを包含す。匈牙利のマツヂヤル人、フィン人、ラツプ人、エッソニヤ人、土耳其人、韃靼人、蒙古人等の言語、皆な是なり。

チュレニヤンの名稱は學者の意見によりて包含する所一定ならず。マツクス、ムユレルは之を南北兩部に別ち、北部は左の五種を包含するものと爲せり。

(イ)、ツングシク (The Tungusic) 支那より以北及び以西の語(滿洲語)

(ロ)、蒙古種

(ハ)、土耳其種

(ニ)、フィンニク語 フィン人及び匈牙利のマツヂヤル人等の語

(ホ)、サモエツク語 (The Samyedic) 日耳曼海より東方露西亞及び支那の間に蔓延せり。

歐羅巴及び亞細亞の極北に行はるゝものなり。

南部は左の四種を以て其の主要なるものとせり。

(イ)、ドラウイディアン語 南部印度人(アリアン人種以前の土人)の語

(ロ)、ガンダス地方の語 雪山以北(チベット)及び以南

(ハ)、暹羅

(ニ)、馬來及びボリニシヤ

(五)支那種 即ち南東亞細亞の語にして支那、後印度、バルマ及び暹羅、チベット、等

を含めり。ウエベルは日本語をも之に編入すと雖ども、日本語は又た特種に屬して支那種より區別すべきものなる可し。

(六)馬萊及びポリニシヤ種 馬萊人、マイクロニシヤ人(南洋諸島)、マラガシー人(マダガスカル島の土人)等の語、即ち是なり。

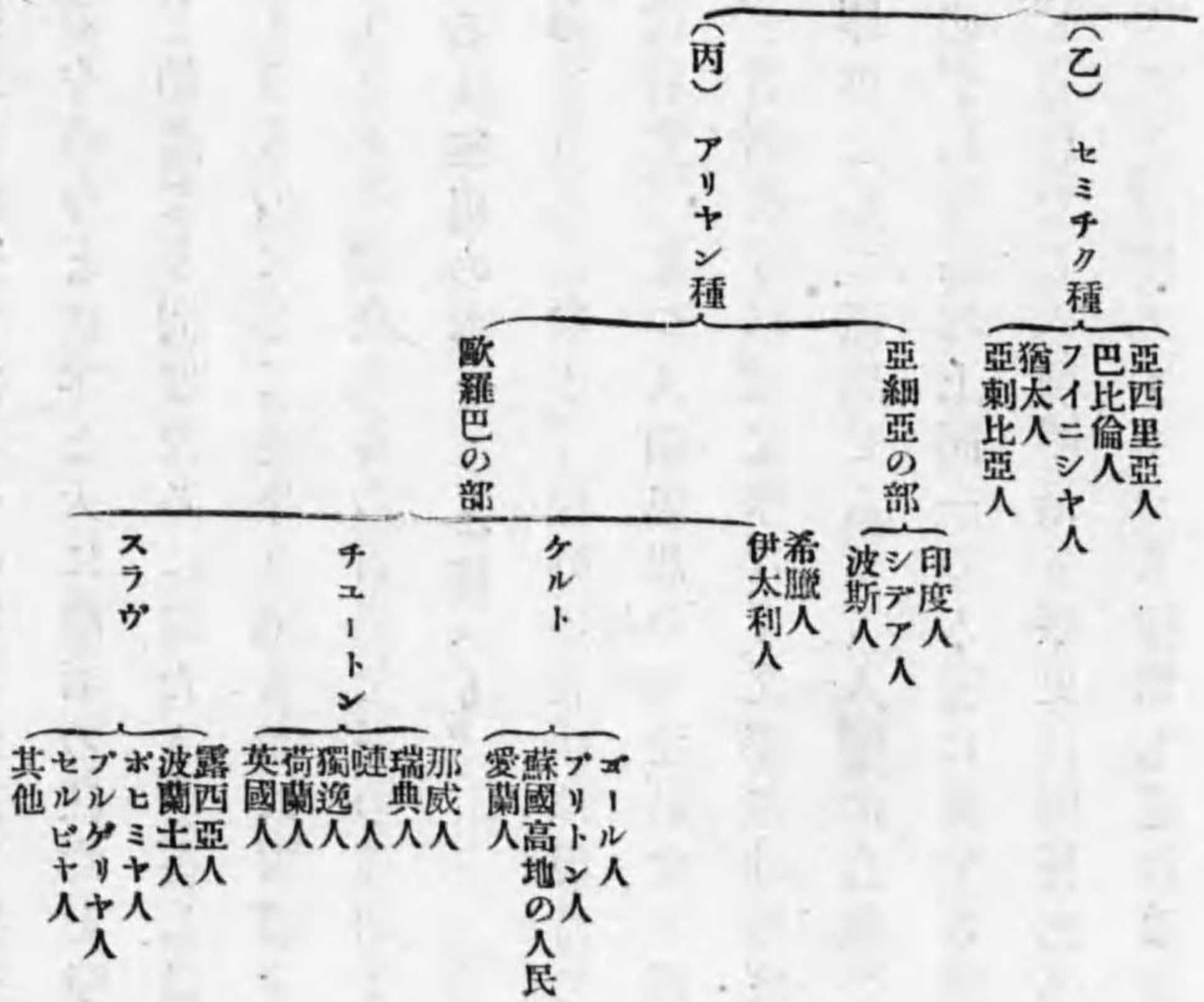
(七)亞米利加種 赤色若くは銅黑色人種なる亞米利加土人の語にして之を區別するときは五百餘の方言あり。然れども大抵一種類似の言語ならざるはなし。

(八)亞弗利加種 亞弗利加黑色人種の言語にして是れ亦た種々に區別するを得べし。

左表に人種の大別を掲ぐ。

- 第一、 エシナヒヤ人種即ち黒色人種
 - (甲) 中央及び南部亞弗利加の土人
 - (乙) 濠斯太刺利亞洲、パプア島及びグリーリスと稱せらるる南部印度の土人
- 第二、 蒙古人種即ち黄色人種
 - (甲) 支那、日本、バルマ、暹羅其他東部亞細亞の人民
 - (乙) 北部及び中部亞細亞并に東部露西亞の遊牧人民
 - (丙) 土耳其人、匈牙利人、フィン人、ラツプ人及バスク人(歐洲に在り)
 - (丁) ハミチク種(埃及人、リビヤ人、クシ人(亞刺比亞及埃及の南に住したり))

第三、 高加索人種即ち白哲人種



佛蘭西人、西班牙人、葡萄牙人、及び伊太利人はケルト人羅馬人及びチュートン人の混合にして之を羅匈人種と稱することあり。蓋し最も多く羅馬人の感化を受けたるが故なり。

歴史的地理の起原

以上諸種の言語は本と同一原語より発生したるものなるか或は各地に於て獨立に発生したるものなるか語を換へて言へば人類には本來一種の原語ありたるや否やとは本と大に學者の注意を喚起したる問題なりしが現今に於ては殆んど結果なき問題たるに似たり。蓋し言語は一時に発生することなく、漸次に発生するものにして現今と雖も新に言語を作爲することを得べければなり。故にタイロルは到底世界の言語を一の原語より発生したるものとして其原語を搜索するは無用の事なりと言へり。

言語は社會の狀態を反射するものなり。現時の言語は現時の社會を代表し、古代の言語は古代の社會を代表す。且つ人類思想の發達、社會の進歩、人民の教育、一に言語によらざるはなし。言語なければ文學なく、文學なければ文明なしと言はざる可らず。故に言語を標準として區別せらるゝ人種は自然の成果といふよりも寧ろ歴史の結果にして必ずしも生理上同一の人種に屬する者と爲す可からず。以上言語によりて區別せられたる人種中最も歴史に關係あるは第一、チュレニア、第二ハミチク、第三セミチク、第四アリヤン人種即ち是れなり。歴史は此順序に

よりて漸次に發達し、第一は文明を第二に傳へ、第二は之を第三に傳へ、第三は之を第四に傳へたり。文明の初期は困難最も大なるを以て文明史上第一の偉功は之をチュレニア人種に歸せざる可からず。アリヤン人種の文明最も能く發達したるは凡べて他の人種よりも遅く出て、他の人種より文明を吸収したるが故なり。文明の功業は一にアリヤン人種のみ在るが如く記載するは西洋史家の習癖にして歴史上の事實にはあらざるなり。

自然的人種別は皮膚頭髮等の特質に基きたるものなれば古人といへども多少之を認知したるは前述の如しとす。然れども頭骨若くは言語によりて區別せらるる人種別は其の名稱と同じく固より近世の創設に係り、全たく學術上の種別なりとす。蓋し近世西洋諸國は大抵皆な聖書バイブルを信ずるの國民なり。然るに聖書バイブルによれば人類の始祖アダムの子孫、漸く墮落して神怒に觸れ、ノア及其の一族の外悉く大洪水の爲に亡ぼされたり。ノアはセム、ハム、チエフエス(ヤベテ)の三子を生めり。而してセムの子孫は亞細亞の本土に住し、ハムの子孫は埃及希伯來語にてはミ及ズび亞弗利加に蔓延し、チエフエスの子孫は小亞細亞及び歐羅巴地方に蔓延した

るが如く記載せられたり。前世紀の後半期より比較言語學大に進みしが聖書に基きてセミチク、ハミチク、及びヂャフェチクの三種に別ち希伯來語を以て最古の言語となし、凡て世界人類の言語は此の原語より變化したるものと思惟せられたり。蓋し當時の人は皆な聖書に據りて亞細亞の西部を人類の起原地なりと信じ歐羅巴の人種及び言語は紀元二千餘年前より移住したるヂェフェスの子孫に出づるものと爲せり。然るに前世紀の後半期に於いて英人印度を征服せし以來、梵語始めて歐洲の學者に知られ、爰に一大新事實を發見するに至れり。一千七百八十六年英人サー、ウヰリアム、ヂョーンスは、梵語、希臘語、羅旬語、日耳曼語、及びチュートン語の間には著明なる語根の類似存し、普通の母語より發生したるものと爲すに非ざれば其の類似を説明する能はざることを宣言したり。ヘゲルは之を稱して新世界の發見と爲したり。是よりして歐洲古今の諸國語と印度、波斯の古語たる梵語及びゼント語の比較研究起り、後者は前者より古語に屬すること明白せしより、歐羅巴人種及び其の言語の本土は印度の西北波斯の北方なる中央亞細亞に在りと思惟せられたり。

カウケシヤンの稱は一千七百八十一年獨逸の學者ブルメンバヒの創設にして頭骨を標準となしたるものなり。彼れはシオルヂヤ人^{カウカソス地方の人民}の頭蓋を有したりしに最も完全にして希臘人の頭骨其次に位せしが故に遂に之を以て白人種全軀の名稱となしたり。然るに近時は言語の上より言へばカウカソス地方の人民は寧ろ蒙古種に屬すべきものなりとて或は學者全たくカウカソス地方の人民を高加索人種より除く者もあるに至れり。

チュレニヤンの名稱は元來波斯語のチューランより出でたるものなり。波斯人は自國をイラン若くはアイラン(光明の土地)と稱し他國をチューラン(暗黒の土地)と稱したり。英人ブリチャルド^{紀元後一七八一—一八四八}はカウケシヤンの名稱を非として其代りにイラニヤンと云ふ名稱を採用し、又たチュレニヤンといふ語をも用ひたり。久しく英國に歸化して近頃死去したる獨逸の學者マクス、ムユレルは始めてアリヤン語及びアリヤン人種といふ名稱を用ひたり。梵語にて印度人は自らアリヤンと稱し、アリヤ又はアリヤナ等の地名今に波斯に存し、又た波斯人も自からイランと稱したる事實に基きたり。梵語のアリヤは高貴といふ意義なり。

るが如く記載せられたり。前世紀の後半期より比較言語學大に進みしが聖書に基きてセミチク、ハミチク、及びヂャフェチクの三種に別ち希伯來語を以て最古の言語となし、凡て世界人類の言語は此の原語より變化したるものと思惟せられたり。蓋し當時の人は皆な聖書に據りて亞細亞の西部を人類の起原地なりと信じ歐羅巴の人種及び言語は紀元二千餘年前より移住したるヂェフェスの子孫に出づるものと爲せり。然るに前世紀の後半期に於いて英人印度を征服せし以來、梵語始めて歐洲の學者に知られ、爰に一大新事實を發見するに至れり。一千七百八十六年英人サー、ウヰリアム、ヂョーンスは、梵語、希臘語、羅甸語、日耳曼語、及びチュートン語の間には著明なる語根の類似存し、普通の母語より發生したるものと爲すに非ざれば其の類似を説明する能はざることを宣言したり。ヘゲルは之を稱して新世界の發見と爲したり。是よりして歐洲古今の諸國語と印度、波斯の古語たる梵語及びゼント語の比較研究起り、後者は前者より古語に屬すること明白せしより、歐羅巴人種及び其の言語の本土は印度の西北波斯の北方なる中央亞細亞に在りと思惟せられたり。

カウケシヤンの稱は一千七百八十一年獨逸の學者ブルメンバヒの創設にして頭骨を標準となしたるものなり。彼れはゾオルヂヤ人^{カウカソス地方の人民}の一頭蓋を有したりしに最も完全にして希臘人の頭骨其次に位せしが故に遂に之を以て白人種全體の名稱となしたり。然るに近時は言語の上より言へばカウカソス地方の人民は寧ろ蒙古種に屬すべきものなりとて或は學者全たくカウカソス地方の人民を高加索人種より除く者もあるに至れり。

チュレニヤンの名稱は元來波斯語のチューランより出でたるものなり。波斯人は自國をイラン若くはアイラン(光明の土地)と稱し他國をチューラン(暗黒の土地)と稱したり。英人ブリチャルド^{紀元後一七八八}はカウケシヤンの名稱を非として其代りにイラニヤンと云ふ名稱を採用し、又たチュレニヤンといふ語をも用ひたり。久しく英國に歸化して近頃死去したる獨逸の學者マクス、ムユレルは始めてアリヤン語及びアリヤン人種といふ名稱を用ひたり。梵語にて印度人は自らアリヤンスと稱し、アリヤ又はアリヤナ等の地名今に波斯に存し、又た波斯人も自らイランと稱したる事實に基きたり。梵語のアリヤは高貴といふ意義なり。

本土となさば歐羅巴こそアリヤン人の本土と爲さざる可からず。言語の關係上親密の度を以て之を言へばスラヴ人はレツツ人に最も近似し、レツツ人はチュートン人に最も近似し、チュートン人はケルト人に最近似し、ケルト人は羅甸人に最も近似し、羅甸人は希臘人に最も近似せり。故に歐羅巴のアリヤン人は第二圖に於けるが如く親密の關係を有する六個の環鎖狀を爲し、唯だ希臘人とスラヴ人との間直接の聯絡なくして斷絶ありと雖ども其の中間に波斯人及び印度人を挿入すれば圓圈の形狀は即ち完全なりとす。蓋し波斯語及び印度語は一方に於てはスラヴ語に近似し、又他方に於ては希臘語に親密の關係あればなり。之に就ては唯だ二個の解釋ある可きのみ。アリヤン語は凡て歐羅巴に發生し、其の一派たる印度人及び波斯人のみ、亞細亞に移住したるものとなすか、或は皆な亞細亞に發生せしも二個のみ亞細亞に遣りて他は皆な歐羅巴に移住し、然かも不思議にも本來の親密なる關係を紊るとなく各々現在の土地に定住したる者と爲さざる可らず。六個の遊牧人民が恰も軍隊の進行したるが如く能く各自言語上の比較的位置を遵守し、亞細亞の中央より歐羅巴の西部に迄移住するを得たりとは殆んど信ず可

らざる事なり。且つアリヤン原語中に亞細亞特産の獸類たる獅子、虎、駱駝等の普通名詞なきを見れば、アリヤン人の本土亞細亞にありしといふ説は甚だ信ずるに困難なり。且つ歐羅巴に在りてアリヤン人種に屬せざるフィン人、バスク人等は歐洲の土人にしてアリヤン人種の爲に壓倒せられ、僅かに本來の土人の遺類にして今に存する者なりと従前には思惟せられたりしが、近來人類學の證明する所によれば、現今歐羅巴のアリヤン人種と同一の遺骨は最も古くして、彼等の遺骨は却て近古に屬するを發見したり。此外種々の理由によりて、近來學者の説は多く、歐羅巴起原説を是認し、アリヤン人種の本土は北部歐羅巴にありしが、印度人及び波斯人のみ最初は一團躰として亞細亞に移住し、途中より分離して、各、印度、波斯に定住せりとなすに至れり。第二圖は則ち之を表明するなり。

歴史地理 歴史上の事實は特に時間に關係するのみならず、又た空間に特別の關係を有するものなり。故に年代と地理とは歴史上の經線緯線にして、其一を過まるときは即ち歴史上の正確を失ふものとす。殊に地理は文明の起原、進歩國家の成長、發達を解釋するに當りて最も缺く可らざる要素なり。

地文學は以て文明の起原及び進歩を解釋すべく又た政治地理の沿革は殆んど列國の歴史を叙述するに同じきものなり。高原は牧業に適し平原は農業に適し、海濱は交通往來の便多し。古代文明の起原地四あり、皆な温帯の平原河流の沿岸にあるもの偶然に非らざるなり。埃及のナイル河に於ける、カルデヤのタイグリス及びユーフレチース河に於ける、印度のインダス及びガンヂス河に於ける又た支那の黄河及び揚子江に於ける即ち是なり。蓋し鞏固なる文明及び國家は農業を基礎となし、其の發達は交通往來の便を要するが爲めなり。北亞米利加のメキシコ及び南亞米利加のビルーは河流に沿はずしてコロンブスの發見以前、獨立に文明の一天地を爲せり。北米は東半寒冷にして河流あり、西部は温暖にして大河なし。是を以て文明の起原地たるに適する所は唯だメキシコ地方あるのみ。此地方は地形狹隘にして島の如く、且つ赤道に近くして氣候温暖なり。其の形勢は埃及のナイルに於けると同一なり。又た南米は東部温暖にして大河ありと雖ども、水熱の量過度にして天然は却て人間を壓倒するの狀あり。唯だビルーは文明の起原に適するの地なり。亞細亞が文明の起原地たるの理由は其の人種に非ずし

て其地理に存し歐羅巴が一も獨立の文明を起すこと能はざりし所以亦た人種の劣るが爲に非ずして其の緯度の高く氣候の寒冷なるによるや明かなり。而して文明の發達に適するもの歐羅巴に及ぶものなし。其の海岸線の延長他の大陸にまさるを見て證す可し。

	面積	海岸線
歐羅巴	二、六八八、〇〇〇方哩	一七、二〇〇方哩
亞細亞	一二、九六〇、〇〇〇	三〇、八〇〇
亞弗利加	八、七二〇、〇〇〇	一四、〇〇〇
濠斯太刺利亞	二、二〇八、〇〇〇	七、〇〇〇
北亞米利加	五、四七二、〇〇〇	二四、〇〇〇
南亞米利加	五、一三六、〇〇〇	一三、六〇〇

是の如く歐羅巴は面積に於て亞細亞の六分一なりと雖ども亞細亞の海岸線は歐羅巴に倍すること能はず。亞弗利加は面積に於て歐羅巴の三倍なりと雖ども海岸線の延長は却て歐羅巴に劣れり。其他南半球の三大陸の熱帯に屬し、其の互に相隔絶すること甚しきを思へば歴史的大陸の北半球に存するの理由明白なりとす。希臘人も希臘の土地を離れては希臘人たる能はず、羅馬人も伊太利の土地を

離れては羅馬人たる能はず、現今の英人も四方環海にして内地石炭に富むことなれば英帝國を維持すること能はず。地理と人民と相待つて始めて文明起り歴史成る。二者相離れては文明もなく又た歴史もなし。其の關係は恰かも肉躰と精神との關係に異ならず。

年曆 年曆は歴史上の事實をして時間の上に正當の位置を保たしむる所以なり。其の歴史に必要なは地理の上に於ける位置と同じきものなり。

其の關係を紊亂するときは歴史上原因結果の關係を知るに由なく史學をして成立すること能はざらしむるに至る。地理學に於ては便益の爲め赤道に併行して一線を地球の周邊に畫し、之より兩極に至るの間を九十度に分ち、以て南北緯度の距離を計算し、又た英國にてはグリニヂを以てし、佛國にてはパリを以てし、獨逸にてはカナリヤ島の一なるフェルロー島を以てして經度の本位となし、東西に各地の距離を計算するが如く歴史上に於ても各國便宜の紀元を定めて時間の上に於ける事實の比較的距離を表明するもの之を年曆と言ふ。

古代のバビロニヤ人はナボナツサル王の時期を以て紀元となしたり。此時期は

紀元前七百四十七年に當るといふ。又た希臘人は最初は執政官若くは大祭司の名を用ひて年曆を計りしが紀元前三百年の頃より第一のオリンピア大祭を以て紀元としたり。此時期は紀元前七百七十六年に當るといふ。又た羅馬人は羅馬府の建設を以て紀元となしたり。此時期は紀元前七百五十三年に當るといふ。回教國民は教祖マホメットのメダイナに避難したる年を以て紀元となせり。之をヘヂラ(Hegira)と稱す。紀元後六百二十二年の事なり。又た猶太人は世界の開闢を以て紀元となせり。此の時期は紀元前三千七百六十一年に當るといふ。斯くの如く古今東西諸國に於て各々その紀元を異にし、西洋にても紀元後第六世紀の始まで種々の年曆を用ひたり。此時羅馬にありし一僧侶ダイヲニシアスエキシギユニアスは從來基督教會にて基督の死せし年を紀元となしたりし習慣を改め基督の生誕せし年を以て紀元となしたりしが爾來西洋諸國一般に採用せられたり。是より基督生誕以前をB.C.若くはA.C.(Before Christ若くはAnte Christ基督以前何年と稱し、基督生誕以後をA.D.(Anno Domini我が主の年)何年と稱して前後に計算するととなれり。然るに此紀元は羅馬府建設以後七百五十四年を基督生誕

の年となして算定せられたりしが近世に至て基督の生誕は少なくとも羅馬府建設以後七百五十年前にありし證據明白し、現今の紀元と基督實際の生誕との間には凡そ四年の差あることを發見したり。然れども基督生誕の年月は紀元何年前なりしか判然たらず且つ之を改正するは非常の難事なるが故に、紀元は元の儘にて今に用ひらるゝことゝなれり。

現今西洋諸國に行はるゝ太陽曆は紀元前四十六年羅馬の大英雄ジュリアス・シーザルの創設する所にして一年を三百六十五日四分一となし月日の數亦た當時に定められたる儘今日に傳はれり。此曆は西洋諸國に採用せられ實際三百六十五日五時四十八分五十秒に比して僅に十一分十秒の差あるのみなりしが紀元後一千五百八十二年に及び十日の差を生じたりしかば羅馬法王グレゴリー十三世之を改正して五千年に一日の差より多く生ずるとなからしむるに至れり。舊教諸國は直に之を採用したりしが新教諸國は久しく之に反對し獨逸及び瑞西聯邦の新教諸國は一千七百年より採用し英國、瑞典等は第十八世紀の中葉より漸やく之を採用し露西亞及び希臘は希臘教に屬するを以て今に舊曆を用ひ居れり。舊新

兩曆の間前世紀に於ては十一日の差なりしが現世紀に於ては十二日の差となれり。

シーザル曆は一月一日を以て年始となしたりしが是より先き地中海諸國皆な太陽曆を用ひ埃及、波斯カーセージ、シリヤ等にては秋分を以て年始となしたり。佛獨二國に於ても本は三月一日を年始となし後には三月廿五日を以て年始となしたり。北歐諸國民は古代に於て冬至を以て年始となし露國にてはピートル大帝の時まで九月一日を以て年始となしたり。一月一日を以て年始と定むるに至りしは佛國に於ては一千五百六十三年、蘇格蘭に於ては一千六百年英國に於ては一千七百五十二年以來の事なりとす。故に是より以前の事實は往々列國に於て紛雜を生ずること多し。例せば英國王チャールス一世の死刑は一月三十日なることは英蘇兩國に於て同様なりと雖ども英國に於ては當時三月二十五日を以て年始となしたりしが故に之を一千六百四十八年と稱し蘇國にては一千六百四十九年と稱したるが如き是なり。英國史にいふ一千六百八十八年の光榮ある革命も今日の計算法にて言へは其實一千六百八十九年の事なりとす。

是の如く古來列國その曆法を異にし、又た其の年始を異にしたるが故に之を調和するは頗ぶる困難の業にして特に一科學の專務とする所なり。之を年曆學(Chronology)と種す。

歴史の時期

カーライル言へることあり時計は時間の變更を報ず然れども時代より時代に變化するとき報を宇宙に傳ふる時辰鐘なしと。畢竟歴史は間斷なき流水の如し。一定の年數を標準とし、單に時間の距離のみに由りて前後の區別を爲すべきに非ず。河水或は激して急流となり或は直下して瀑布となり或は停滯淹留して一大湖となることあり。歴史も亦た然り。故に其の價値は單に年數のみに由りて定むべきに非ず。又た歴史上の分界標は單に世紀の始終を以て標準となすべきものに非ず。宜しく時勢の變換を明にし時代に於ける中心的事實を目的として其の原因沿革及び結果を解釋することを勉めざる可からず。然るに事變の生ずるや突然に生ずることなく、又た其の終結するや斷然一時に終結するとなきが故に歴史上時代の區分は歴史家の專斷によるもの多しとす。

然れども西洋歴史を古代中世及び近世の三部に分つは稍々道理ある區別なりと

す。古代東方諸國に於て文明を發生し羅馬帝國に至りて之を統一したり。是れ西洋古代史の梗概なり。羅馬帝國瓦解して其の文明は四方に散亂し、漸次近世歐洲列國の基を開けり。是れ中世史の梗概なり。列國並び起りて相競争し、其の競争の範圍漸やく六大洲に涉らんとす。是れ近世史の梗概なり。然れども或は紀元後四百七十六年を以て古代史の終結となし、又た紀元後一千四百五十三年を以て中世史の終結となすは全たく記憶に使せんが爲の專斷的方法に過ぎざるなり。故に歴史家各々その見る所を異にして古代史、中世史、近世史の區別一定ならざるは固より必然の結果なりとす。既に專斷に外ならざれば各自その便宜と思惟する所に因て之を定むるの一方法あり。唯だ記憶に使じ且つ多少時勢の轉變に大關係ある時期を撰むことに注意せんことを要するのみ。ウェーベルは紀元後第五世紀までを古代史となし、第十五世紀の終りまでを中世紀となし、又た近世史を分ちて二個となし、佛國革命までを第一期とし、其の以後を第二期となせり。哲學者コムトは紀元後第十四世紀の初頭を以て近世紀の起原となせり。當時列國に於て産業勃興し市民の勢力大に發達し、羅針盤及び火器の流行、文學の復活、科學の

興起等ありて封建制度及び迦特力教衰微の徴候を現じたればなり。又た國家學者ブルンチュリーは第十八世紀の中葉に至るまで宗教上及び政治上に於て尙ほ中世に屬するの狀態多く一千七百四十年普露兩國フレデリク大王の即位以來新思想始めて起り中世の宗教的思想及び封建的習慣を脱するの氣運に向へりとの理由に基づき同年を以て近世史の起原となせり。若し哲學的に西洋歴史を觀察せば或は古代史を有史以前及び有史以後の二期に分ち、又た中世史を迦特力教及びプロテスタント教の二大時期に分ち、第十八世紀佛國革命前後より近世史となすを以て適當なりとなすべき理由ありと雖ども、本書は普通の例に倣ひ記憶に便するを以て主眼となし紀元後四百七十六年西羅馬帝國の滅亡を以て古代史の終結となし、又た紀元後一千四百五十三年(東羅馬帝國の滅亡及び英佛百年戰爭の終結)以後一千五百十七年宗教改革の起りし時期までを轉遷の時代と爲し、此際に中世史終りて近世史始まりしものと假定し、第十六世紀の初頭より現今までを近世史と爲せり。史家或は一千四百九十二年コロンブスの新世界發見を以て或は一千五百十七年宗教改革の起原を以て近世史の始となす者あり。普通には單に左

表の如く區別を爲す者多し。

- 第一、古代史 紀元後四百七十六年西羅馬帝國滅亡の時に至る
- 第二、中世史 紀元後四百七十六年より紀元後一千四百五十三年コンスタンチノーパールの落城東羅馬帝國の滅亡に至る
- 第三、近世史 紀元後一千四百五十三年より現今に至る

第一編 東方史

天然地誌

亞細亞と歐羅巴とは相合して不規則なる三角形の一大陸を成す。通常ウーラルの山河、裏海、黑海及び地中海等を以て境界となすと雖ども、其實自然の境界に非ず。ウーラルの東西は地質と云ひ人種と云ひ全く亞細亞的なり。小亞細亞とバルカン半島との間に海あれども是れ亦た交通の便を與ふるのみにしてエヂアン海の兩岸は古來同人種の居住せし所なり。陸地の構造に於ても二者全く其の原則を一にせり。亞細亞にヒマラヤ山脈あれば歐羅巴にアルプスの山脈ありて南北を兩斷し、雪山の南に印度あればアルプスの南に伊太利あり。印度の西に亞刺比亞の半島あれば伊太利の西に西班牙の半島あり。又た印度の東に後印度あれば伊太利の東には希臘あり。而して雪山の北にチベットの

高原あるが如くアルプスの北にパワリヤ(獨逸バイエルン)の高原あり。又た亞細亞の北部に寒冷なるシベリヤの平原あるが如く、歐羅巴の北部には露西亞の平原あり。以上は唯だ偶然の符合といふに非ずして實に亞細亞歐羅巴の大陸的構造同一なるを表示するものなり。唯だ亞細亞の規模は其の西端なる歐羅巴に比して偉大を極むるの別あるのみ。地理上より言へば歐羅巴は亞細亞の西端にして別に獨立の大陸となすの價值なし。唯だ便宜の爲め歐羅巴といふ名稱を用ふるは不可なしと雖ども其の亞細亞と地理上の一致あるとを忘る可からず。人種上より言ふも亞細亞と歐羅巴とは古來相往來して全く別世界を爲すものに非ず。歐羅巴にアリヤン人種あれば亞細亞にもアリヤン人種あり。亞細亞の蒙古人種あれば歐羅巴にも亦た蒙古人種あり。コーカサス地方は亞細亞、歐羅巴の中間に在り、而して其人民は白哲人中の最も純白なるものなりとて白哲人種の總名となるに至りしが該地方の人民は言語及び其他の關係に於ては全く蒙古種に屬するものにして近來學者之を高加索人種中より排除する者あるは前に述べたるが如し二三頁。左れば人種に於ても亦た亞細亞人種、歐羅巴人種と稱して截然たる區別を立つること能はざるなり。

地理上、人種上に於て是の如く區別す可からざるが如く、歷史上に於ても亦た固より亞細亞と歐羅巴とは全然區別す可からざるなり。其の關係に於ても其の性質に於ても全く相離れたるものに非ず。亞細亞の歴史は歐羅巴史の基を開きたるのみならず往々亞細亞の歴史を參照せざれば歐羅巴の歴史を説明する能はざるの例あり。西部亞細亞の歴史が歐羅巴の歴史に關係あるは無論の事なり。支那印度の歴史も亦た西洋の歴史に大關係あるとを記憶せざる可からず。

北部亞弗利加は地理上西部亞細亞の連絡するが如く歷史上に於ても亦た密接の關係あり。人種上に於ても又た高加索人種中のセミチク派に屬するものなり。且つ北部亞弗利加は地質時代に於ては歐羅巴と土地結合して一躰を爲し、南部亞弗利加との間には淺き海ありて之を隔離せりといふ。歴史時代に於ては地中海の航路ありて常に南部歐羅巴と交通し、南部亞弗利加との間には大沙漠ありて之を隔離すること地質時代に同じ。即ち此の大沙漠は地質時代に於て淺き海水の流れたりし所なり。地理上に於ても人種上に於ても又た文明上に於ても、北部亞

弗利加は南部亞弗利加と異にして西部亞細亞及び南部歐羅巴に連合し特に歴史に關係あるが故に之を歴史の亞弗利加と稱することあり。或は之を歐羅巴亞弗利加と稱する者あり。畢竟地中海を中心としたる西部亞細亞、北部亞弗利加及び南部歐羅巴は西洋古代史の地理的版圖にして文明上親密の關係あることを記憶せざる可からず。

本編に東方といふは以上の地理的範圍に屬する東部諸國の義なり。此範圍に於ける古代の文明はターギリス及びユウフレチース河邊を中心となし、極東は印度北西の極端はリディア、西南の極端は埃及にしてカルディア、アシリヤ、ミディア、ペルシャ、フィニシヤ、ユダヤ等を包含す。

名稱の起原

アジャといふ名稱の淵源は詳ならず。或は梵語のウシヤスと同一にして曙光の地といふ義なりと説く者あり。又た昔時小亞細亞の名都エフェソスの横たはりし平原をアジャと稱したり。此平原は沼澤多くして濕地なりしといふ而してアス又はエスといふ語根は水といふ意義を有すと説く者あり。兎に角古代の希臘人はアジャといふ名稱を小亞細亞の西部に附し、羅馬人は之を

延長して小亞細亞全部の名稱となしたりしが紀元後第五世紀に至りて地中海以東大陸の名稱となし、西班牙の史家ロシウス始めて小亞細亞の名を設けてこれを區別したりといふ。

アフリカは羅馬人が附したる名稱なり。希臘人は之をリビヤと稱したり。紀元前第五世紀希臘の歴史家ヘロドトスはリビヤを三部に分ち地中海に類したる部分即ち住民の地、野獸の地及び沙漠の地と爲したり。而して今の所謂スーダン地方は其中に包括せざりしなり。沙漠の南に豊饒にして且つ住民ある土地の存じたることは彼れ之を知らざりしに非ずと雖とも亞弗利加の内地、黒人の住居したる部分は概して之をエシロピヤに附屬せしめたり。

リビヤとは希臘語の濕氣といふ語より轉化したるものにして亞弗利加より雨を帯ひたる南風吹き來りし故ならんといふ。アフリゲとはフィニシヤ語にて殖民地といふ義なり。亞弗利加のカーセイジ(カルタゴ)はフィニシヤの最も重要な殖民地なりしが故に殊に之をアフリゲと稱したり。故にカーセイジ附近の地はアフリカといふ名稱にて羅馬人に知られたりといふ。

イウローブといふ名稱は其の語原明白ならず。或は日没の地といふ義にしてセミチク語に基因すといふ説あり。又た亞細亞の希臘人がエーソス(アトス)山の地方を稱したる名なりといふ説あり。兎も角も古代の希臘人が今いふ歐羅巴の幾部分に附したる名稱なりしなり。畢竟亞細亞、亞弗利加及歐羅巴は古代よりの名稱にして其の起原及び意義は近世歐羅巴人が附したる新世界の名稱の如く明白に知ることを得ざるなり。

第一章 埃及史

土地及び人民 埃及の自然的版圖はナイル河兩岸の土地なり。長さ六百哩にして幅員は二哩乃至十一哩に過ぎず。兩岸を距ること遠からずして小山あり。西にはリビヤの沙漠あり。而して東は紅海に至るまで石材に富める山地なり。ナイル河を降りて凡そ地中海を距ること百哩の處に至れば東西の山漸やく遠く、平原次第に廣く、ナイル河は分れて二大支流となり、海に入るに及んでは其間八十哩の距離あり。ナイル河は河口より凡そ一千百哩の處を以て最廣の點となす。是より下には降雨なく他の合流を受けざるが故に他の大河と異にして河口

に近づく程河身縮小す。下流の平原は最も膏腴の地なり。古代に埃及を稱して世界の穀倉となし凶年に地中海濱の人民來りて食物を仰ぎたりしは此の平原あるが爲なり。ナイル河の三大支流は此平原に三角の形狀を與ふ。古代の希臘人は之を名けてデルタと言へり。デルタは希臘の文字にして其形三角なりしが故なり。此のデルタより上は膏腴の地甚た狭く僅かに河流の兩側數哩に過ぎざるなり。

埃及の名は希臘人より傳はれり。希臘の古詩ホーマーには國土も河流も共にアイギプトスの名あり。古代埃及人は自國を稱してケム或はケミと言へり。黒土といふ義なり。西方リビヤの沙漠に反して土地黒色なりしが故なり。或は言ふ英語のケミスツリー(化學)は元來埃及の學といふ義にて亞刺比亞人を經由したるものなりと。ナイル河の名は元來希臘語にてはネイロスと言ひ、羅匈語にてはニルスと言ひたるより轉化したるものにて獨逸人はニルと稱す。古代の埃及人はハピムと稱したりといふ。

ヘロドトスは埃及の一部を稱して「ナイルの賜なり」と言へり。埃及の全部又た然

りとす。蓋し埃及の豊饒なるは此河の恩恵なりといふのみに非ざるなり。近世地質學の證明する所によれば大古亞弗利加の沙漠未だ成らずして海水其上に流れし頃、下埃及地方は水底深き海灣なりしが年々河水の漲溢と共に泥淤流下し、漸やく積聚して兩岸の土地を造り下層の地底より四十呎乃至七十呎に達して始めて埃及の文明を現出せしむるに至れり。去れば埃及の國土は全たくナイル河の勢力によりて造られたることを知る可し。且つ此の國土を維持する所以の勢力も亦たナイル河にあることを記せざる可からず。下埃及は全たく雨なきに非ずと雖ども概して稀有の事なりとす。海を遠ざかるに隨ひ、殆んど降雨無きに拘らず、埃及が周圍の沙漠と異にして一帯の沃土を爲すは一にナイルの恩恵によれり。此河は原頭をアビシニヤ山地と赤道地方の諸大湖水とに發し、此地方に於て五月より九月まで大降雨あるが故に年々河水膨漲して六月の中旬には埃及に流溢し、八月の初旬には河岸を超えて汎濫し、九月の末に至りて其の極點に達し、全國は恰かも内海の觀あり、而して或は假山に據りて建られ或は堤防を設けて水中に突出したる村落市邑は海中の島嶼を見るが如し。十一月の下旬には平水となり、田野

には泥淤を遺して地方を養ふが故に農夫は肥料を加ふるに及ばず往々鋤をも入れずして直に播種すれば數旬ならずして前日の蒼海忽ち綠野に化するの奇觀あり。雨に依頼する國土は饑饉の難あれども埃及には其患あることなし。古代には堤防、運河、貯水所の設備ありて灌漑の方法完全に行はれたり。今は運河も多く埋れ、貯水所も破壊に歸し、耕作の土地は古代に比して僅かに三分の二に過ぎずといふ。

古代より上埃及と下埃及との區別あり。河口よりメムフェイス地方まで、概してデルタ(三角洲)地方を下埃及となし、其の以上エシヲピヤの境までを上埃及となす。元來方言土俗を異にし、亦た各々二十二區に別たれたり。シロプス(獨、テベン)は上埃及の首府たりしなり。

人種上より言へば埃及人は亞弗利加人に非ずして高加索人種に屬す。然れども皮膚は鶯色にしてリビヤ人の如く白からず。言語はセミチク種に似たりと雖ども又た特色あるが故に之をハミチク語と稱す。元來南方より河流に沿ふて降下したる人種に非ず、亞細亞より入り來りしものなるが如し。而して埃及の文明は

夙に下埃及に發生したり。

埃及學 (Egyptology) 古代埃及の歴史は現世紀の始に至るまで唯だ左の史記によれり。

(一)ヘロドトス 希臘の歴史家にして紀元前四百五十年頃埃及に遊歴し、僧侶より傳聞したる所及び自己の觀察したる所を記載せり。

(二)ダイオドロス、シキユラス 又た希臘の歴史家にして紀元前第一世紀埃及に遊歴せり。

(三)マネソ 埃及の僧侶、紀元前二百五十年頃希臘語にて埃及の歴史を著はせり。全篇は亡びたれども彼れが記載したる歴代王朝の目次のみ存ぜり。埃及古代の歴史を研究するに甚だ必要なり。

(四)舊約聖書 希伯來人の古書にして聖書の前篇を爲すもの是なり。

古代の埃及人は一種の象形文字を有したり。希臘人は之をハイエログリフ(Hieroglyph)と言へり。神聖文字といふ義なり。元來ソットといふ神の發明なりと傳説し、僧侶之を保存したればなり。希臘人も羅馬人も之を讀むの方法を知らず紀

元後第六世紀頃までは多少之を説明せんとしたる學者もありしが其後は絶えて無く近世の初頭、文學の復興と共に亦た學者の注意を引くに至れり。然れども前世紀の晩年までは一向進歩する所なく、唯だ不可思議なる古文字として知られ、ハイエログリフと言へば凡て解すべからざる事と同意義に通用せられたり。一千七百九十九年ナポレオン第一世埃及遠征の時、一工兵ナイル河口のローゼッタに於て一城砦の基礎を發掘し石板の長さ三呎許なるに三種の文字にて記したる誌銘あるを發見したり。之をローゼッタ石と稱す。其の誌銘の一種は希臘語なりしが故に直に之を翻譯するを得たり。他の二種は埃及の古代文字にして希臘文は其の譯文なりと推察せられたれども辭書なく文典なく、之を解讀せんこと固より容易にあらざりき。英人トマス、ヨング解讀の端緒を聞き、一千八百十八年、佛人シヤムポリヨン其の原則を發見し、(一千八百二十二年)遂に獨人レブシウスに至て大成したり(一千八百三十八年)。是より埃及學起りて古代の埃及人が惜氣もなく其の建築物紀念碑塚中の内壁其他日用の什器及び美術品等に彫刻したる誌文を讀むの道開け古代埃及國の事跡を知ること甚だ詳かなるに至れり。

埃及史の起原

マネソ(獨、マネット)の斷片によれば彼は紀元前第四世紀に至

る埃及の歴史を三期に分ち第一期を舊帝國、第二期を中帝國、第三期を新帝國と稱し、第一期は十一朝、第二期は六朝、第三期は十四朝の更迭ありて總計三十一朝五千年以上を経たるとを記載せり。此斷片によれば埃及の始祖はメナ英ミニス、獨メネス、若シメナスと云ひ埃及の起原は五千年以上に在りと爲さざる可らず。マネソの三十朝は悉く繼起的王朝なる乎、其の中には共存の王朝もある乎とは久しく埃及學者の争點なりし也。又た前主崩ぜざるに先だち皇太子をして位を攝せしむるの習慣ありしかば各王在位年數の計算に就ても異論ありて一定せずベックはミーニス王の即位を紀元前五千七百二年となしブルグシは四千四百五十五年となしブンセンは三千五十九年となしウイルキンソンは二千六百九十一年となせり。紀念碑の證明する所によればマネソの王朝一として共存のなることを發見したるの例なく、恐らくは正朝のみを記載したりしものなる可ければ眞理は最少年數よりも最大年數の方にあらんとは近時第一流埃及學者の説なるが如し。少なくとも埃及國文明の起原は紀元前五千年以上に在りと爲さざる可からず。埃及人

は一定の年曆を以て時代を計算せざりしが故に此點に關しては紀念碑の證明を得る所なし。

本書には紀元前二千百年頃までを舊帝國の時代となし、爾後紀元前一千七百年頃シロプス侯アームスの獨立に至るまでを中帝國の時代となし、爾後紀元前五百年頃十七年埃及の波斯に征服せらるゝに至るまでを新帝國の時代となせり。

舊帝國 紀元前二〇〇頃まで 舊帝國の始祖は即ちメナなり。マネソによれば是より以前凡そ二万五百年前神代、半神代及び人代ありしといふ。是より先き上埃及には數

多の諸侯ありしがメナは之を統一して一國となし、デルタ(三角洲)の尖頭に近き處に首府メムフェイス埃及語メン、ネフェルを建て大工事を起して堤防を築き、以てナイル河の汎濫を防止せりといふ。第一朝八王二百五十二年第二朝九王、三百三年第三朝九王、二百十四年を経過し、第四朝に至りて始めて正史時代となる。

第四朝紀元前七〇〇頃はピラミッド朝と稱せらる。是より先き小ピラミッド(方尖塔)は既に建築せられしが此朝の諸王は大ピラミッドを建築したり。是より以後傳説と紀念碑と相照應して古代の事跡を明かにすること甚だ多し。現今ギゼーにあ

るピラミッドは高さ四百八十呎四角なる基礎の長さ七百六十四呎、面積十三エーカー我がエーカーは四反餘あり。第四朝の二代クロープス希臘の建築にして埃及第一のピラミッドなり。ピラミッドは大石を以て築きたる王族の陵墓にして各王生前に經營したるものなり。第四朝の四代カフラの像及び五代メンカラの木乃伊ミイラ今猶ほ存す。此兩王は現存せる第二第三の大ピラミッドを建設したり。第四朝は六王凡そ百年間繼續したりといふ。

當時埃及に於ける學術技藝の發達は以上の大建築を見て明かなり。ピラミッドは皆な正確に東西南北を指せり。ヘロドトスによるにケラツプスは二十年間十万人を使役したり而して最初の十年間はナイルより大石を運搬せしむべき道路敷設の爲に要したりといふ。當時既に文學あり、彫刻あり、家畜あり、分業行はれて農民の外に織工、金工、石工等あり、又た貴族ありて土地を所有したり。而して埃及の文明は未だ後世に於けるが如く、凝結したるものにあらざりき。第六朝は五王、凡そ百年間、二代ペビ希臘最も有力なり。兵を擧げてヌビヤの黒人を征服し、之を徵集して兵となし、又た東北の牧民を伐つ。此朝には彫像術大に進み、文學は一

種の専門職となり、分業の結果、三十餘の特別なる職業を生ずるに至れり。第六朝以後第十朝まで國內分裂して統一なく、僭奪叛亂相踵ぎ、外敵國を襲ひ帝王の興亡定まりなく、此際メムフェイス衰へて上埃及の、シーブス埃及語遂に首府となれり。

第十一朝は七王、凡そ百年餘、第四代メンツィホテップ二世、第七代サンクカラ希臘共に商業貿易を獎勵したり。

第十二朝は七王、凡そ二百年、埃及史中の盛代にして紀念碑全國に散布し、アメネムハット及びウスルタセン等の名赫々たり。第十一朝の政策に従ひ、シリヤとの商業を獎勵し、又は灌漑の方法を完全にし、殆んど埃及の生産力を倍加せしめたり。

第五代ウスルタセン三世はエシラビヤを征して版圖を南方に擴張し、第六代アメネムハット三世はミールヌ湖獨メーリスといふ有名なる大貯水所を建設し、ナイルの出水過度なるときは其水を此湖に貯へ以て灌漑上過不足の患なからしめ、又たラピリンスとてヘロドトスの最も驚嘆したる大迷宮を建設したり。此朝に至る埃及の權勢は三方に膨脹し、南西亞細亞、北西亞弗利加及びエシラビヤに及び埃及

の文明は當時既に其の全盛に達したり。然れども國民奢侈の風に流れて遂に敵人の爲に征服せらるゝの端を開きたり。

中帝國 紀元前一六七〇迄 第十二朝以後國勢衰微し内部分裂し遂に亞細亞より野蠻なる遊牧の民襲來し下埃及を占領し漸次に權勢を上埃及に及ぼし、シープスの王朝はエシラビヤに遁逃したり。是より牧王ヒッソスの帝國となり、凡そ百二年餘間埃及は外人の支配する所となれり。

此の牧王及び牧民は歴史家が「南方の韃靼人」と稱する所のものにして固より亂暴野蠻の人民なりき。スエスの地峽より埃及に入り、土人を殺し婦人小兒を奴隸とし、市邑を焼き記碑及び神殿を破壊し、メムフェイス及びデルタのタニスといふ處を根據となしたり。最初は殘害至らざる所なかりし蠻民も次第に土着文明の爲め埃及化せられたること元清二朝の支那に於けるが如く又チエートン人種の羅馬帝國に於けるが如く、埃及の衣服言語及び文字を採用し、又た埃及風の神殿を建設し、勉めて土人の風俗に従ひたり。然れども宗教は一種の神を信じて土人と異なりしのみならず、最後の王アベビ希臘アホ詔を下して之を人民に強行せんとせし

かば人民叛亂を起し、遂にシープス侯アーメスの爲に覆へされ、牧王は國外に驅逐せられたり。之を中帝國の終りとなす。

牧王の埃及を征服するや中央集權の制度を確立し從來の弊害たる内部の分裂を統一し、爲めに新帝國時代に於ける王朝盛大の基を建てたり。且つ其の國外に驅逐せらるゝや埃及の文明を携帶して之をフィニシヤ人に傳へたるの功績あり。彼の希伯來人の祖イブラエルの種族が埃及に移住し大に國王の信任保護を受けたりと云ふ聖書の記事は此の牧王の時代にありし事ならんと云ふ。

新帝國

紀元前一六七〇頃

新帝國の創業者は第十八朝の始祖アーメス一世

(希臘アモシス)なり。英邁の君主十一代凡そ紀元前一千六百七十年頃より一千四百年代まで繼續したり。アーメス一世は牧民を國外に驅逐し南方の黒人を征服し、又た牧王の破壊したる神殿を再建し將來亞細亞より復た蠻民の侵入し來るを防がんが爲め東方侵略の外政策を立て子孫能く之を繼承するに至れり。是より武族の一階級生じ軍馬大に用られ、埃及人は武斷的侵略國民となり、文學及び建築の術亦大に興る。史家は實に第十八朝を埃及史上の黄金時代と稱す。

此の朝の第三代ソットメス一世(希臘ツットモシス)は始めて兵を率ひて亞細亞に入りシリヤを征服し、メソポタミヤを侵撃したり。第六代ソットメス三世は埃及史上のアレキサンデルにして當時埃及の版圖前代無比に達す。王の遺跡及び其の征略の紀念物は北亞弗利加のアルヂリヤ地方より西亞細亞のアルミニヤ、及び南方アビシニヤの地方に至るまで散布せり。ニネベ及びバビロンをも征服して朝貢及び質をメソポタミヤの諸國より徴收したりと云ふ。又たシープスに於けるカルナックの神殿は多く此の王の建立によるものにして、其の遺跡は零落の中に在り乍ら世界の偉觀と稱せらる。第九代アメンホテップ三世(希臘アミノフィス)はソットメス三世に次で有名の王なり。北方及び南方に於てはソットメスの遺業を保持し内部に於ては更にカルナックの神殿及び之に連続したるルクソルの王宮を増築して名あり。第十八朝の末年は衰微に屬したるも、非常の紛亂なくして第十九朝に推移し國勢亦大に振ふ。

第十九朝凡そ紀元前一四〇〇—一三〇〇は第十八朝に劣らざる隆盛の時期なり。埃及をして歴史上に名聲を輝かすを得せしむるは此二朝諸王の鴻勳霸業に外ならず。

第一代はラメッス一世希臘ラムセス一世と云ふ。其子セチ一世希臘セトス一世及び其孫ラメッス二世最も著はる。セチ一世凡そ紀元前一三九八年頃はシリヤの反亂を平げて再び之を服従せしめ又東西南北を征伐す。其最も著明なるはユーフレチウス河畔のカルケミシを首府と爲したるヒッタイト王國碑文に於てはヒッタイトとの戦争なり而して王が工事上の偉功は征戰に勝る者あり。シープスに於けるカルナックの神殿に於て世界に名高き圓柱廟を建設し又岩窟の中に最も美麗精緻を極めたる自己の墳墓を造營し、加ふるにナイルと江海との間に運河を疏通するの工事を開始したり。ラメッス二世は史上大王の名ありて古代の歴史家は之を埃及第一の王と稱賛したり。上エシロピヤ及びヌーダン地方を征し先人未だ到らざるの地に侵入し其の最も苦戦したるはヒタイト王及び其の與國との戦争なりき。ラメッス二世は工事上に於ても亦た諸王中に冠絶せり。就中父王の計畫したるナイル河及び紅海間の運河を完成し希伯來人と中央亞弗利加より囚にしたる黑人とを使役して大建築に従事せしめたり。然れども埃及の隆盛は既に其極度に達したればラメッス以後は衰運に傾くのみなりき。故に史家或はラメッス二世

を以て紀元後第十七世紀に於ける佛王ルキ第十四世に比す。第十九朝は八王凡そ百二十年にして亡ぶ。

第二十朝凡そ紀元前一〇〇年頃は十三王あり。諸王多くラメッスーと稱す。第二十一朝は僧族より出て平和の政策を所持し、七代間繼續し第二十二朝は九代にして國內分裂し、南部はエシヲビヤの爲に蠶食せられ、第二十三朝は三四代にして國內益々崩解し、紀元前七百五十年エシヲビヤ王ビアンキイ全國を併呑し、土着の諸王を朝貢せしめたり。第二十四朝はエシヲビヤに向つて獨立したりしも一代にして又たエシヲビヤ王の爲に征服せられ是に於て第二十五朝凡そ六七五〇即ちエシヲビヤ朝(六王)となる。

當時埃及は既に衰運に屬し、西部亞細亞にはアシリヤの強國漸やく起り七百二十年其王サルゴンの爲に侵されて屬邦となり、爾後獨立せしも復たアシリヤ王イサルハッドンの爲に覆され全國は二十州に分割せられアシリヤ人及び埃及人を以て知事たらしめたり。紀元前六百六十年頃エシヲビヤ王再び埃及を恢復したりしも、土着の諸侯をして各々その領地を治めしめたりしが其の一人ブサメチック(希臘、

ブサメチック)といふ諸侯エシヲビヤの羈絆を脱して土着の王統を設立したり。

第二十六朝紀元前六五五は六王凡そ百二十八年なり。始祖は前述のブサメチック一世なり。父は名をネクと云ひ、アシリヤ王イサルハッドンに擧られてサイース及びメムフェイスの知事たり。アシリヤ已に衰へバビロニヤ將に興らんとす。ブサメチック一世は小亞細亞のリディア王ギガスと同盟し、希臘人及びケリヤ人を雇兵となして遂に全國に王たることを得たり。

是より埃及の政策一變せり。從來埃及は鎖國主義にして外人を蔑視したりしがブサメチック一世は外人を歓迎し殊に希臘人を優遇し首府のサイース(原音サー)は希臘人を以て充滿し、軍隊は希臘人の雇兵を以て組織せられたり。是の如くブサメチック一世外人優遇の結果土着の兵士二万人叛きてエシヲビヤに移住したり。然れども王は其の政策を改めず、貿易を奨励し、且つ第二十朝以來廢絶したる建築を再興し國運稍々振ふことを得たり。

ネク二世希臘語ネコス希伯來語ネは父ブサメチック王の政策を襲ぎ、又た其の版圖を擴張したり。貿易の便を開き又たナイル河及び江海の戦艦を聯合せめしんが

爲めセチ一世及び其子ラメッスー二世の開設したる舊運河の既に航行す可からざるに至たりたるを再開し三橈戰艦ツライムを通行せしめんと欲して更に河身を廣くし且つ深くせんことを計畫したりしが工夫十二萬人を失ひたる後宗教上の反對ありて遂に之を中止するに至れり。

抑もスエス運河の成功は佛人レセツプ不朽の事業(一千八百六十九年開航)にして第十九世紀文明の勝利に外ならずとて歐米人の誇稱する所なれども古人は紀元以前既に之を計畫せしこと一再に止まらず。但だレセツプは直に地中海と紅海とを連結し、古人は先づナイル河に通じ、而して地中海に出るの方法によりたるの差あるのみ。埃及王ネクスの計畫は中止せられたりしが七十餘年の後波斯王デライスア一世之を竣工せしめ、歴史家ヘロドトスは之を目撃したり。運河の出發點はスエスを距るも凡そ一哩半の所に在りて之より西北に向ひ、ナイル東部の支流に通じたり。全徑九十二哩にして其の中六十哩は人工によりたりと云ふ。爾後土砂の埋むる所となりしが紀元後第二世紀羅馬皇帝ツレーヤン紀元後九八—一〇七之れを再興したりしに同様の原因によりて復た用ゆ可からざるに至れり。亞刺比亞人埃及を征服するに及びて教主ナール紀元後六三—六四埃及の穀物を亞刺比亞に輸入せんが爲に復た之を開通し、百餘年間持續したりしも、又もや土砂の爲に埋れて遂に第十九世紀に及びり。今日の運河も同じく土砂堆積の患絶ゆることなしと言へば、レセツプの成功も果して永遠に傳はる可きかは未だ容易に斷言す可からざるなり。若し此患さへなくばレセツプ

の名譽は不朽に存するに足らん。

ネク二世は運船中止の後更に天然に開通したる南方の海路を發見せんことを企てファイニシヤ人に命じて亞弗利加を廻航せしめたりしかども當時バビロン起りネク二世之と戰ふて利あらず埃及の國勢是より衰へたり。

第二十六朝の第四代ウアアブラ(希臘アプリエス)はブサメチック二世の子にしてネク二世の孫なり。祖父の武功を恢復せんと欲しバビロン王ネブカデネザルと戰ひ紀元前五百六十八年ネブカデネザルの爲に攻められ一時全國を占領せられたり。第五代アームス(希臘語アマシス)は最初ネブカデネザルに屬して朝貢國の王たりしも、大王の死後獨立して大に埃及の隆盛を圖らんとせり。希臘及び其の殖民地と親交を結び希臘商人多く埃及に移住したり。當時の紀念碑は王が如何に工藝を獎勵したるかを證するもの多し。又たヘロドトスは當時市邑の數二萬に達せりといへり。亦た以て埃及の繁榮を知るに足れり。然れどもブサメチック一世の時武族移住せし以來兵力衰へて到底亞細亞の強敵に當ること能はざるに至れり。

是時バビロニヤ既に衰へ波斯は馬太^{ミヂヤ}を亡ぼし紀前五尋てバビロンを陥れたり紀前五八尋てバビロンを陥れたり紀前五三。

紀元前五百廿七年波斯主カムビシース埃及を攻め、アームスの子プサメチック三世兵敗れて虜となり遂に死に處せらる。在位僅かに六ヶ月。埃及はアシリヤ及びバビロニヤに對しては一時朝貢國となりしのみにて永久に屬邦たるの禍を脱したりしも茲に到りて全たく波斯帝國の一州となり了りぬ。第二十六朝は六王百二十餘年にして亡ぶ。

埃及の末路

紀元前五百二十七年より四百四年迄は波斯の支配に屬せり。

之を第二十七朝となす。カムビシース死後波斯の總督之を治め、施政緩和なりしも、デライアス一世の晩年埃及の叛亂は王をして希臘親征の目的を達する能はざらしめたり。ザークシース一世之を鎮定し其結果として朝貢税を重課したり。アルタザークシース一世の時復た謀反し、希臘、アセンス人の聲援を得て勢甚だ猖獗なりしが、ペルシヤ王の弟アケメニース之を征討して勝たず兵敗れて戰死す。殘兵メムフェイスに圍まるゝこと三年更に征討軍を遣り數年にして漸やく平定し

たりしも波斯の衰微に乗じ、又た希臘の聲援に依りて遂に獨立し、紀元前四百四年より三百四十年頃まで土着の王朝を維持することを得たり。此間を第二十八朝(二王)第二十九朝(二王)及び第三十朝(三王)となす。爾後波斯王アルタザークシース三世の爲に復た征服せられて波斯の一州となれり。之を第三十一朝となす。

紀元前三百三、三十三年マセドン王アレキサンデル之を征服してアレキサンデルヤ府を建設す。三百二十三年同王の將トレミー(希臘)、プトレマイオス(埃及)の王となり、子孫十三世二百九十三年間持續せり。トレミー家代々文學を獎勵し、アレキサンデルヤの大學及び圖書館天下に冠絶せり。然れども其の文明は埃及土着の文明に非ずして寧ろ希臘の文化を移植したるものなりき。紀元前卅年羅馬の屬邦となりてよりアレキサンデルヤは衰退に傾きたりしも尙ほ羅馬帝國文化の泉源として存し又は基督教の一大中心たりしなり。然るに紀元後六百四十年亞刺比亞人に征服せられてより爾來今に回々モムメット教の國土たり。紀元後一千五百十七年土耳其に屬し、一千七百九十八年ナポレオン第一世之を征服したりしが、一千八百一年英國及び土國の爲に佛人逐はれて又た土耳其の屬邦となれり。一千八百六年土

將メヘメットアリ埃及の總督となり善く埃及を治む。土耳其の皇帝たらんと欲せしが、歐洲列國の干涉によりて其の志を達せざりしも子孫代々位を継ぎ、名は土耳其に屬し其實は殆んど獨立の王國たり。佛帝ナポレオン第三世の保護によりてスエスの運河成就したりしが、埃及政府財政紊亂の結果一千八百七十六年以來財政上に於て英佛兩國の監督に屬し、一千八百八十一年アラビイの亂あり。翌年英佛議合はずして英國獨り干涉し兵力を以て亂を平げ、是より名は土耳其の保護國たるも其實英國の屬邦たるが如き地位に陥れり。

此の如く數千年來の變遷により人種も言語も大變遷をなし、現今に於て古代埃及人の子孫といふは僅かに人口十四分の一に過ぎず。之をコプツと稱す。古代に於ては人口七百万、羅馬皇帝ニロ^{紀後五四}六^八の時七百八十万ありし由なるが今は六百八十万にしてコプツは十五万人なり。其他は亞刺比亞人、土耳其人、シリヤ人、希臘人、猶太人等にして言語は一般に亞刺比亞語を用ゆ。古代埃及語より出てたるコプツク語は十世紀以來既に下埃及の用語にあらざ爾後數世紀の間上埃及に使用せられしも、今は一般に亞刺比亞語を用ひコプツク語は僅かにコプツ人が宗教

上經典を讀むの語として存するのみとなれり。
沿革略表左の如し。

- 第一期 舊帝國(最初の十二朝)
 - 第一朝の祖メネス (紀元前四〇〇〇年以前より
同 二一〇〇頃まで)
 - 第四朝ヒラミッド諸王(六王)の時代 (三三 四五 〇〇 頃まで)
 - 第六朝以後分裂 (三三 三三 〇〇 頃まで)
 - 第十一朝(七王)晩年紛亂 (一一 一二 〇〇 頃まで)
 - 第十二朝(七王)始祖はアメネムハット一 (三三 三三 〇〇 頃まで)
 - 第二期 中帝國(次の五朝) (一一 一二 〇〇 頃まで)
 - 第十三朝以後衰微遊牧民侵入 (一一 一二 〇〇 頃まで)
 - 第十七朝(六王)ヒクソスの時代) (一五 一六 七〇 頃まで)
 - 第三期 新帝國(第十八朝より第廿六朝) (一五 一六 七〇 頃まで)
 - 第十八朝(十一王) (一一 一二 〇〇 頃まで)
 - 始祖アームエス三世 (一一 一二 〇〇 頃まで)
 - 第九代アメンホテップ三世最も名あり (一一 一二 〇〇 頃まで)
 - 第十九朝(八王) (一一 一二 〇〇 頃まで)

始祖ラメツス一世、第二代セチ一世最も名あり

第二十朝以後衰微

第二十五朝(六王、エシオビヤに屬す)

アシリヤ王サルゴン襲來

同イサルハツドン埃及征服

第二十六朝(六王)

ブサマテク一世の獨立

ネク二世(亞弗利加回航)

一時マビロニヤに屬す

波斯王カムビースに征服せらる

第四期 波斯、希臘及び羅馬時代

第二十七朝(波斯時代)

第二十八朝より第三十朝まで(獨立)

第三十一朝(再び波斯時代)

歴山大王埃及征服 歴山府開設

トレミー諸王(十三代)

〔七五〇頃まで〕

七二〇

六七〇

〔六五五頃まで〕

五二七頃まで

五九六まで

五二七

〔五二七より〕

三〇まで

四〇四まで

〔四〇四頃まで〕

三三〇頃まで

三三二

〔三三二より〕

羅馬に服屬す

文明略説

傳記によるも歴史上の埃及人は埃及最初の人民にあらず。又た近時古墳の發掘によりて埃及人より以前に土人ありしこと明證せられたり。之に由りて之を觀るに埃及人の埃及に於けるは猶ほ大和民族の日本に於けるか如く外來優等の人種が土着劣等の人種を征服して國內を統一し文明を興起せしめたるものなるを知る可し。紀元前四五千年以前埃及に於ては既に進歩したる文明を開發したり。而して初代は最も進歩の時代にして後世に於けるか如く停滞したるものに非ざりしなり。

第一、社會制度 埃及は君主制にして上に王あり、而して社會は僧侶、武族、及び平民の三階級に分れたり。

埃及の王は神孫にして最敬禮及最尊號を受けたり。近臣は其前に拜跪し、鼻頭地に垂るゝを禮となせり。且つ王を稱して天地の主、世界の日と謂ひ、神聖侵す可からずと爲したり。古代に於ては然らざりしも後世となりては王權も僧侶の支配する所となり、日々の行爲及び作法より飲食の種類及び分量に至るまで聖經の規

定に従ひ大僧正は王を監督して是等の規定を守らしむることを職務となしたり。希伯來人は埃及の王をバロ(英語フェンラ)と稱したり。我國にて天皇と稱するが如し。ハーレン曰く、

皇后は位置及び尊稱に於て王と同等なりき。埃及に於ては皇后政を行ひしことすらあり。國王が其の姉妹を妻とすることはトレミー家の朝となりし以前より久しく行はれたる習慣にして恐らくは外人をして位を繼がしむること無からしめんが爲なりしならん。

此の奇怪なる王位繼承法は近時社會學の證明によりて始めて其の眞義を知ることを得たり。抑も太古野蠻の社會には夫婦父子の關係往々不定なるが故に財産及び權力の相續に於て父系繼承法を用ゆる能はず母系繼承法によりたる時代あり。母系繼承法によるときは財産及權力は子に譲ると能はずして兄弟に譲り若くは姉妹の子に譲るの制度なり。今は文明諸國一般に男系繼承法によることとなりたれども古代に於ては女系繼承法を用ひ或る野蠻社會には今猶ほ此制度を用ゆるものありといふ。埃及の王位繼承法は女系繼承法と男系繼承法とを兼用

したる制度なることを知る可し。古代埃及に於ては社會一般に女系繼承法を用ひ、新婚者は自姓を捨て、妻の姓を冒し、一切の財産を妻に譲り、以て之を我子に傳ふるの方法となしたり。故に人民は皆な父の姓を冒さずして母の姓を冒し父某の子と言はずして母某の子と稱し父母を養ふの義務又た女子に存したり。然るに社會を統一して其の組織を鞏固ならしむるは男系繼承法に及ぶものなし。是に於てか社會は猶ほ女系繼承法を用ゆるに拘はらず、政治的元首の位置は例外として男系繼承法を用ゆるの例少なしとせず。フイジー島タヒチー島等に於て然りとす。埃及も亦た其の一例にして王位繼承法は兄弟姉妹相婚して以て正統なる女系繼承法と鞏固なる男系繼承法とを混合したるものなりしなり。南米のピルに於て同様の法を用ひたり。而して女系繼承法の制度は嘗て古代の希臘、及び日耳曼人の間にも行はれたる證據あり。

埃及の僧侶は最高の階級にして殆んど王族と同等の位置を有したり。全國の土地三分之一を所有し以て各神社及び之に附屬したる僧侶を維持したり。彼等は一世の智者、學者、政治家にして國務を管掌し學術を専攻し醫者、裁判官、建築師、數學者

等皆な僧侶にして軍事の外殆んど社會高等の業務は悉く僧侶の手_に存したり。彼等は知識に於て德行に於て社會の模範となりたり。最も清潔を貴ひ、一日に二回、一夜に二回沐浴を爲し、又た毎三日に全身を剃るの習慣を守りたり。英國にてシチーといふは必ず大寺院を有する市府に限るが如く、埃及の各都府は必ず神社の在る所にして之に世襲の僧侶附屬したり。而して埃及の僧侶は妻を娶り、子々孫々同一の神社に事へ他の神社に轉ずるを得ざりしといふ。

武族は僧侶に次で名譽の地位を有したり。僧侶と同じく全國の土地三分一を所有し、各人凡そ八エークル一エークルは我を所有し無税なる代りに武具自辨にして何時にても職務に差支なき準備あることを要したり。是れ則ち古今封建兵制の特質なりと謂ふ可し。埃及全盛の頃には武族五十万人ありたり。兵は歩兵、騎兵、戰車兵にして武器は弓、槍、刀、棒及び投石器を用ひたり。隊制は各面に一百人を列ねたる密接方隊なり。後世マセドニアの方隊と同じく、殆んど侵す可からざるの兵制にして野戰には向ふ所敵なかりしといふ。埃及人は海に習はず、故に其海軍にはフイニシヤ人及び其船舶を用ひたり。

平民は概して三級に分れたり。第一級は農民、獵師、ナイル河の船夫等なり。第二級は諸種の工匠及び商人なり。第三級は牧人、漁夫、其他の勞働者なり。牧豕者は最賤の人民にして神社に入ること禁ぜられたり。最初階級の別は甚しからざりしが新帝國の時には僧武二族と平民との間は儼然たる世襲的階級制となりたり。各人民は必ず一定の職業を有し時々其の届書を官吏に納めざる可からず而して偽書を作り、若くは不法の職業を營むものは死刑に處せられたり。

以上述るが如く全國の土地三分の一は僧侶に又三分の一は武族に與へ、自餘三分の一は國王に屬して農民は其收穫の五分一を納めたり。政治社會と云ふは僧武の二族にして彼等は所謂參政の權を有し、而して彼等は一切地租を免せられたり。僧武二族の間には非常の懸隔なく僧侶にして武人となり、武人にして僧侶となり又同時に僧侶たり武人たるを得たり。平民にも種々貴賤の別ありしと雖ども概して土地所有權なく又政治上の權利なく恰かも歐洲中世の封建制度と同じく、僧侶は教へ、武人は戰ひ、民は勞して税を納め、以て各々國家を負担することを爲したり。

埃及の文明が如何に進歩し居りしかは其の裁判の方法を見て明らかなり。希臘の史家ダイオドロスによるに王は自から裁判することなく司法の事は之を適法の裁判所に委任したり。代言の制なく各人は自から法廷に出て自己の訴件を辯護したり。高等法院はシーブス、メムフィス及びヘリヲポリスの三府より選拔せられたる三十人の判官を以て組織せられ、三十人は自ら裁判長を選挙し而して其空缺は議長を出さざる他府の人を以て補充したり。此法院の裁判は凡て文書を以てし原告は先づ文書に訴件及び要償の價額を記して訴へ次に被告は文書によりて答へ、原被文書の確答濟みたる後法廷は判決を下し之を文書に認めて裁判長之に捺印したり。又た債權者は債務者の財産を收むることを得るのみにて其の身軀に及ぶこと能はざりしといふ。

第二、宗教及び道德 各神社には僧侶を養成する爲めの學校附屬したり。是れ則ち埃及人の知識を保存したる貯藏所なりしなり。神社及び僧侶が祖先經驗の結果たる傳説を保存したるは今日の大學及び學者が世の所謂學問を保存するに異ならず。今代の人々は古代の學問を傳説と稱して輕蔑すれども今日の所謂學問も

多くは傳説にして過去に於ける先人の經驗を保存し以て利澤を後世子孫に授くるの方法に外ならず。古代の宗教は即ち古代の哲學にして社會道德の基礎、政治法律の根本なりしなり。故に古代の歴史を研究するには其の宗教思想を知ること最も肝要の事なりとす。

僧侶は神體の唯一なることを認識し、之にヌク、プー、ヌクといふ名稱を附したり。希伯來人の聖經に載せたるものと同義にして、我は自然に在る者なり」と云ふ意なり。即ち宇宙萬物の本原は初より自存し、萬物を造りたれとも自からは造られたる者に非ずといふ義なり。然れども多數の人民は此の不可思議なる神體を理會する能はずして其の顯現に外ならざる日月及び諸種の動物を獨立の神體として崇拜したり。

埃及の神は多く三對を爲し、就中ヲシリス(太陽)アイシス(其妻)及びホロス(其子)は一般に崇拜せられたり。朝日はホロスと云ひ、日中はラと云ひ、日没はタムと云ひ、夜はアモンと云へり。ヲシリスは善神なりしが其の兄弟なる聖神セツト(暗黒の神)に殺され、其妻アイシスの祈禱によりて復活し其子ホロス神遂に仇を復し惡神セ

ツトを亡ぼし之よりヲシリスは死者の神となり死者を保護し、死後人間の審判者となれり。死者若し生前に於て悪を爲さざるときはヲシリスと一體となり、各ヲシリスの名を以て稱せらる可し。ナイル河はヲシリスの化身にして人民はハピと稱し之を崇拜したり。而して沙漠、大蛇、河獸及び鱷魚は惡神セツトの化現なりと信せられたり。

實にヲシリスの秘密を悟るは僧侶の奧義として最も誇りし所なり。且つ萬物を神となしたりしが故に、土地も天空も、將た東も西も、神として崇拜せられ、神樹、神石、神器等ありて毎月毎日その月の神あらざるはなし。僧侶は唯一の神體、靈魂の不朽、死後の審判、惡人の消滅、善人の化神を信じたり。彼等は曰く神は自己の肢體を造れり諸神即ち是なりと。是の如く一神より群神生じ、僧侶は之を唯だ一神の顯現となし、人民は其の然るを知らずして之を崇拜したり。

動物崇拜は埃及に於ける宗教の一大異觀なり。メムフェイスの神社に於て崇拜せられたる牡牛エピスはヲシリスの化身と信ぜられたり。其の他鷹、アイヌ、鶴に似たる鳥、猫、猿、蛇等は國中一般に崇拜せられ、又は犬、羊、狐、蛙、鼠、甲蟲、鱷魚並に植物等は

諸處に於て崇拜せられたり。猫死するときは家人悉く其眉を剃り、犬死するときは其の髪を剃り、以て哀悼の意を表したり。トレミーの朝に當り、羅馬の一兵卒神猫を殺したりしが群民は王の仲裁をも聽かずして之を殺したることあり。凡て崇拜せられたる動物死するときは之を木乃伊にして大葬式を行ひたり。特に馬を崇拜せざりしは初代には馬なかりしが故なる可し。

動物崇拜の起原に關して古人は種々の解釋を試みたり。プルタルク希臘(プルタルコス 紀元後七〇)は軍旗に動物の形像を用ひたる習慣より生じたるならんと云ひ、ダイオドロスは諸神が巨人と戦ひ、大に困められて神物の姿を假り免かるゝことを得たりといふ神語に基きしものならんと言へり。近時宗教學社會學等起りて始めて真正なる解釋を得るに至れり。夫れ古代の人類は未だ自己と外物との區別を知らず故に外物の現象を解釋するに當りて外物を自己と同様なるものとなして解釋したり。是時に當りては天地間に在りて活動するもの山川、草木、禽獸、風火、電光、日月、星辰、一として生物ならざるは莫く、一として靈魂を有せざるはなしと思せられたり。畢竟古代人類の思想には生物と死物、動物と植物、人類と禽獸、

自己と外物との區別判然たらざりしのみならず。殊に人類の狀態未だ禽獸的生
 活を脱する能はざりし時代なれば往々禽獸は人よりも高貴なるものと思惟せら
 れたり。或は會長の武勇を稱しては之を虎狼獅子に比し、或は人を名づくるに禽
 獸の名稱を以てし、遂には禽獸を以て我が祖先と信ずるに至るが如き事實は枚舉
 に遑あらず。埃及のシーブスに於ては羊及び鱈魚を崇拜したれども、山羊は之を
 殺して食し又タメンデスにては羊を食し山羊を崇拜したる事實の如きは祖先教
 の關係によりて始めて解釋することを得べし。故にスペンセルは動物崇拜は祖
 先崇拜の變形なりと言へり、而してコムトは以上の宗教を拜物教(Fetichism)と稱し
 タイロルは靈魂教(Animism)と名けたり。

此の如く靈魂は万物に充滿せりと信ぜらるゝときは、靈魂不滅の信仰起るは必然
 の結果なり。而して事物の區別判然たらざりして唯た事物の變遷窮りなきを見る
 が故に靈魂輪廻の信仰生ずるに至るも亦た自然の事なりとす。されば人生は暫
 時にして靈魂は永遠なり。且つ善人の靈は三千年間ヲシリスの神と共に在りて
 後、復た世にかへり、本の肉躰に寓るべしと信せられたり。故に埃及人は現在の家

屋よりも死體を保存し墳墓を經營することに苦心したり。埃及人が死躰を木乃
 伊にするの習慣は蓋し此の宗教思想より出たるものなり。木乃伊にするの秘術
 は僧侶の專有する所にして死者の身分に従ひ其の方法を異にせり。其最も高價
 なる方法は死者の腦及び腸を抜き出し、椰子、葡萄酒及び香料を以て之を洗ひ淨め、
 或は之を本の骸骨に入れ、或は之を壺に入れて棺と共に墓に葬り、又た體軀は之を
 洗ひて樹脂及び香料を満たし、然る後四十日間硝石の中に保存し、次に之を繃帶し
 て三重の貴き櫃に入れ、最後に之も木棺若くは彫刻したる石棺に納むるの方法な
 り。下等社會は單に死體を洗ひて之を鹽或は瀝青に漬し木伊乃となしたり。
 埃及の各市はナイル河の西方に墓所を設け、其の間に湖水ありて死者は之を渡ら
 ん爲め舟に乘せらるゝ前に審判を経過せざる可からざりき。之を死者の審判と
 稱したり。湖岸には四十二人の審判官ありて何人たりとも死者に對し訴件ある
 者は告訴することを得たり。若し其事なければ死者は聖湖を渡りて墓所に安置
 せらるゝことを得たり。然れども死者が生前の品行不良なりしときは舟に入る
 ことを拒絶せられて空しく家に歸るか、若し貧にして其の費用に堪へざる者は湖

畔に埋めらるゝを常とせり。國王たりとも是の如き審判の結果にて正葬を得ざりし例あり。而して是れ則ち死後來世に於けるヲシリスの審判の前表なりと信ぜられ、極悪人の靈魂は鬼に啖はれて消滅し、救済の望ある者は下等動物となり輪廻の苦を経ざる可からずと思惟せられたり。亦以て宗教が如何に道德の制裁力たりしかを知る可し。

當時埃及人の道德思想は大抵今代の人と異なる所なかりしが如し。「死者の書」と稱せらるゝ古文の中に死者の靈がヲシリスの前に出て自訴するの言あり曰く。

余は懶惰にあらざりき、余は酒の爲に酔はされざりき、余は秘密を許かざりき、余は詐僞を爲さざりき、余は讒謗を爲さざりき、余は涙を流さしめざりき、余は餓へたる者に食を與へ、渴ける者に飲を與へ、而して裸なる者に衣を與へたり。

又た四千年前第五朝の王子フタホテツプは倫理書を著はして當時の青年を教訓したる中に孝道、謙遜、及び快活の諸徳を叙して曰く。

從順なる子は成長して恩寵を受くべし。余も亦た斯の如くして地上の老人となり、百十年間生存して國王の恩寵を蒙り、長老の稱賛を受けたり。

汝若し卑うして後に大なるものとなり、貧にして後に富を積み其故を以て市中第一の人となり、汝の富によりて汝の名を知られ、以て大なる主公となりたらんには、富の故に汝の心をして驕らしむること勿れ。蓋し汝が富の創立者は神なればなり。汝が嘗て在りし如き地位に在る者を輕ずること勿れ。汝の同輩を待つが如く彼を待つ可し。

以て社會道德の一斑を窺ふに足れり。埃及人が長者を敬するの徳は希臘の史家ヘロドトスが希臘人の模範として最も稱賛したる所なり。

第三、學問及び技藝　學問は僧侶の手に存し、僧侶は其の小兒に當時の學問を教授したり。算術習字は其の最も注意したる所にして幾何學及び測量術は特に貴重せられたり。希臘の史家ダイヲドロソ曰く、河は毎年國土の形象を一變するが故に畔を接する所の地主等は其の所有地の廣狹に就て種々なる紛議を生ずること多し、幾何學的證憑によらずしては何人も其の要求を決定すること困難なりしなるべしと。是れ幾何學の夙に發達したる所以にして現今の歐米諸國の數學は希臘人及亞刺比亞人を経由して埃及に負ふ所甚だ多しとす。雲雨を見ざる埃及

の青天はカルデアの平原に於けると同じく夙くより天文學の開發を促がし、特に太陽の運行に従つて毎年七月より干満するナイル河の洪水は自然に埃及僧侶をして頗ぶる正確なる太陽曆を發見せしめたり。一年三百六十五日六時間にして四年毎に一日を加へ三百六十六日となし、又た一年を十二ヶ月に分ち一ヶ月は各々三十日にして之に五日を加へ一年となしたり。是れ紀元前四十六年羅馬の大英傑シーザルが採用し一千五百八十二年法王グレゴリー十三世が改正したる太陽曆にして各月の日數は概してシーザルの規定したるまゝ、今に傳はれる者なりとす。

醫學も亦た大に進み、分業法行はれて眼科、齒科其他の専門醫ありて他科の患者を治療するを許さず、又た之を治療するの手術は一に過去の習慣に従ふべき規定なりしが故に、萬一自己の任意によりて治術を施し患者を死に致すことあれば醫者は殺人罪の刑に處せられたりといふ。

埃及人は一種の象形文字を有したり。希臘語にて之をハイエログリフといふ。神聖なる彫刻といふ義なり。其の簡單なるものは殆んど支那の文字に同一なり

とす。例へば○は太陽又は日といふ字なり。(は新月の形にして太陽又た月といふ字なり。又た◐は口といふ字なり。筆墨の畫は書くといふ義にして鵝鳥は子の字鵝は母の字なり。是れ鵝は親を愛するの情深く鵝は皆雌なりと信ぜられたればなり。而して通例支那文字と同じく右より左に讀み、古代には豎にも書きたりしか後には横にのみ書くことゝなれり。埃及文字は左より右に讀むこともありて其何れより讀むかは象形文字の動物の面によりて見分けられたり、但し埃及の文字は形字のみに非ず。同時に數多の音字を綴り用ひたるか故に埃及學者は之を解讀せんとするに當りて非常の困苦を嘗めたり。又た文章の材料として用ひたる紙はナイル河邊に生じたる一種の植物より製造したり。植物は蘆の類にて埃及人は之をパプ或はピプロスと言へり。是れ英語にてペーパー(紙)及びパプ(聖書)といふ字の出處なりとす。然るに此植物も埃及の衰退と共に殆んど消滅し、今はシ、リ、島及びバレスチンのジャツファ地方にありといふ。古代猶太のイザヤは既に紀元以前に於て其事を預言したり。

埃及の墟は皆な漸次にへりてかわき葦と蘆とかれはてん。ナイルのほとりの

草原ナイルの岸にほとと近き所すべてナイルの最寄に来る者は悉く枯れて散り
失せん（バイブル舊約中の以賽亞書十九章六節七節）

建築、彫刻、繪畫、音樂、文學の五大美術中埃及に於て最も發達したるは第一なり。其の主とする所は廣大莊嚴なるに在り。方尖塔（ピラミッド）の偉大なる者ギゼーに三あり。其他合して七十以上ありしが今は二三十に過ぎず。古代希臘人は之を世界七不思議の一と稱したり。又たギゼーにある大方尖塔の下に人頭獅身の大像あり。長さ九十呎高さ七十呎にして前足の外は全く自然石を彫刻したるものなり。之をスフィンクスといふ。今に旅客の最も目を驚かす所なり。又た埃及人は玻璃の製造に巧にして其の妙工は今人の及ぶ能はざる所なり。後世フイニシヤ人を以て玻璃の發明者となしたれども其の實彼等は之れを諸國に分布したるに過ぎざりき。

第二章 加耳特亞亞西里亞及び巴比倫

地理及び人種 ナイル河の埃及に於けるか如くユーフレチス（東方、フラッテ、獨逸ユフラッテ）及びタイギリス（希臘、チギリス）の二大河はメソポタミヤ（希臘語にて二河の間とい

ふ義地方の歴史に大影響を及ぼしたり。地理上の差異によりて自然に上部と下部との區別あり。北部は即ち亞西里亞にして小山多く、高低一ならざる平原なり。其の土地は河流より甚だ高きが故に灌漑は頗ぶる人工を要したり。然れども其の南部は所謂カルデア又はバビロニヤにして全たく平地なり、此の地方は河流よりも低く、兩河年々流溢して其の泥淤累積して土地を成したり。故に其土地は海面より高からずして豊饒窮りなく、亞細亞の埃及と稱せられたり。而して埃及と同じく殆んど降雨あらざるが故に農業は一に人為的灌漑の方法によれり。古代には四方に大運河を通じたりしが今は零落して土沙に埋没しながら依然蛛網の如く國中に散布せり。此地方は今も豊饒なること古に異なることなく、河口には小麥自然に野生すと雖ども、古代の運河は放棄せられて其用を爲さず、爲めに嘗て人民繁昌したりし此地も沼澤沙漠の地となり果てたり。

最古代に於てはカルデアの下部をシュミル（希伯來語）と稱し其上部をアッカドと稱したり。此地方の人民は通例アツケデヤ人と稱せらる。紀元四千年以前裏海の南西部より來りしチュレニヤン人種なり。元來平原の民にあらざりしことは其

のアッカド高地の民と云ふ義の名稱によりて推定せられ、又た其の本土は山地にして熱帯にあらざりしことは其の言語中に金屬の名辭あれども椰子樹の語なかりしを以て察知せられたり。

アツケテヤ人はユーフレチス地方に於ける文明の開祖にして一種の象形文字を携へ來れり。其形槪の如く又た鍬の如くなるが故に之をキユニーフラム(槪形)文字といふ。文學發達し又た建築の術に長じたり。其の早く文明に進みたるは埃及と伯仲の間に在り。舊紀を有することは埃及に及ばずと雖ども希伯來人の傳説は此地の歴史を以て埃及よりも古しと爲したり。紀元前四千年の頃セミチック人種に屬する遊牧人民の爲に征服せられたり。然れども征服者は文明の上に於ては却て被征服者に征服せられたり。元來彼等は水草を逐ふて移住する遊牧人民にして其の開化固よりアツケテヤ人に及ぶ可くもあらず。是に於て牧業時代を去りて漸やく農業時代に入ると共にアツケテヤ人の藝術及び文學を採用したり。初代の王はアツケテヤ人の言語を用ひたりしが外來人民の多數は自己のセミチック語を保持し後遂にアツケテヤ人の語を壓倒したり。是の如く二人種漸

次に混合して世に所謂カルデヤ人を生じ其の土地も亦たカルデヤと稱せらるゝに至れり。カルデヤの名稱は紀元前第九世紀以前の碑文には見へずといふ。タイギリス及びユーフレチス兩河間は三大王國の相繼で興起したる所なり。即ち第一はカルデヤ王國にして或は之れを前巴比倫と稱す。第二亞西里亞、第三巴比倫、或は後巴比倫と稱するもの是れなり。是等は皆なセミチック人種の建設に屬すと雖も、其の文明は一にチュレニアン種なるアツケテヤ人に淵源したり。故にアツケテヤ人は西方亞細亞に於ける文明の開祖にして彼等は之をセミチック人種に傳へセミチック人種は之をアリヤン人種に傳へ、以て今日の西洋文明を發達せしめたり。

亞西里亞學

(Assyriology)

以上三王國の歴史も埃及の歴史と同じく、現世紀の始に至るまでは全く左の史書により傳へられたり。

第一、バビロンの僧ビロイサス(ベロソス)の斷片

ビロイサスは紀元前二百六十年頃の人なり。バビロンの舊紀に基づき、希臘語にてバビロニア史三書を著はしたり。今は其の斷片のみ存すれども、甚だ

有益なることマネッの埃及史に於けるが如し。

第二、希臘の歴史家特にヘロドトス

第三希伯來人の聖書(バイブルの舊約書)

アツケデア人が發明したる楕形の文字は、アッシリア人、バビロニア人及びベルシヤ人に傳はり古代ベルシヤ帝國の大部分たる西部亞細亞に行はれたり。マセドン大王アレキサンデル紀元前三三六以後漸やく衰亡に歸し爾來殆んど二千年間世人は其の存在すらも忘却するに至れり。ベルシヤ帝國の宮殿神廟破損して零落の中に存し其の内面を掩ふ所の石版には楕形の形刻ありて滿てりと雖ども旅客は更に其の文字なることを知るものなかりしが、紀元後一千六百十八年西班牙王フィリップ三世の使節フイゲエーロアはベルセボリスの舊都に至り其の文字なることを確信し其の寫字を携へて歐羅巴に歸りしより、行客漸やく之に注目し、佛人シャルダンも亦たベルセボリスに於て之を模寫し一千六百七十四年歐羅巴に歸りて之を公版したり。然れども學者にして尙ほ其の文字なることを疑ふ者も少からず、一千七百年東方學者トマス・ハイドは之れを學者の妄想なりとして爲

に貴重の時間を徒費することを譴責し、ウキツテは代々蟲の蠶食したる結果なりと思惟したり。然るに一千七百六十一年頃東方を遊歴したる獨人カルステン、ニイプル始めて解讀の端緒を開き爾後ロストツクのチヒセン及びコーペンヘーゲンのムンテル等その業を進め、一千八百二年ハノヴァルのグロテフェンドに至て全く大成したり。楕形文字は埃及のハイエログリフと同じく右より左に讀み、専ら碑文として用ひられたり。之れに三種あり。第一はベルシヤ文字にして最も新しく、第二はミデヤ文字にして中間に位し、第三はアッシリヤ文字にして最も古く、ベルシヤ時代には大抵右三様の文字を併記して以て帝國の要素たる三種の人民に揭示すると現今波斯の或る地方に於ては波斯語、土耳其語及び亞刺比亞語を併用するが如くなりき。アッシリヤの文字は以上併記の三碑文より解讀の方法を得て夥多の文學を譯出し赫々たる光輝は古代メソポタミア歴史を照すに至れり。

世に之を亞西里亞學と稱す。其の大成は埃及學よりも早くして埃及學の成功を容易ならしめたり。

加耳特亞王國

(紀元前四〇〇〇頃以前)

舊紀は其國の起原を以て遠く太古にありと爲し洪水以前十王の時代ありて四十三万二千年洪水以後第一期八十六王三万三千九十一年第二期ミダヤ僭主八王二百二十四年間第三期十一王第四期カルデヤ朝四十九王四百五十八年第五期アラビヤ朝九王二百四十五年第六期四十五王五百二十六年を經過したると博説したり。最後の第六期は紀元前一二五七―七三一頃なりしなる可し。兎に角埃及とカルデヤと何れが最も古きやは歴史上の疑問なりとす。

アツケデヤ人の文化に就ては頗る知ることを得べしと雖ども其の政治歴史に就ては殆んど知る所なし。紀元前四千年頃セミチク人來往せし以前には國中統一なく諸市府分立して各々其王を戴き或はバビロン或はウル専ら其の勢力を振ひたり。セミチク人來襲の後も或はアガデー(アツカド)或はカラク、或はエレク、或はウル、或はラルサ等の諸小王國ありて互に相分争したり。就中アガデー王サルゴン(シャルキン)一世は始めて統一の基を置き大に文化を奨励したり。後代の王ナボネディアス(紀元前五五五―五三八)の碑文によれば同王の年代は紀元前三千八百年頃なり

しならんといふ。

當時アツケデヤ人の言語は既にセミチク語に壓倒せられたり。左れば其の文學は若しセミチク語に翻譯せられざりしならば後世の人その文化の如何なりしかを知る由なかりしならん。サルゴン一世はアツケデヤ人の宗教、神話、天文等に關する文學をセミチク語に翻譯せしめ、之を其の建設したる大圖書館に藏めたり。其の翻譯をなすに當りて王は原文をも正確に模寫せしめ譯文と相對照することを得べからしめたり。又た之を學ぶに便益を與へんが爲め、アツケデヤ語の文典及び字書を編纂せしめたり。故に東方學者セイスは彼をカルデヤのソロモンと稱したり。然れども王は全く此地方を統一すること能はざりしが如し。爾後下カルデヤのウルを首府としてカルデヤを統一したる大王あり。之をウレアといふ。初代カルデヤ諸王中建築を以て最も名あり。全國の大都會には宏大なる神廟を造營したり。其の舊跡今猶ほ存せり。同王の時代は紀元前二千八百年前なりしならんといふ。

是の如くセミチク人の王等は下カルデヤに於て市府及び神殿を造營し王國を建

設せんとしつゝあるに當り、其の東北にチュレニアン種に屬するエラム人の王等はスーサを首府として之に反對の王國を設立しつゝありしなり。紀元前二千二百八十六年其王クドールナクンタ加耳特亞を蹂躪し、サルゴン以下諸王の建設したる諸市を陥れ、ウレア王の神殿より神僕を奪ふてスーサに移し以てエラム王朝を建設したり。其子クヂェル、ラガマーは西部亞細亞を統一せんことを試み、一時シリヤ及びバレスチンに至るまで其の威勢を振ひたり。

爾後此の王朝衰微しアラビヤ王朝となり、バビロンは漸次其の首府となりたり。カンムラビーと稱する王は運河を通じて大に土地の生産力を養成し其他宮殿神廟を造營して其の遺跡甚だ多し。彼の即位は凡を紀元前一千五百四十五年頃にして在位二三十年其子サムシユ、イルナ位を繼ぐ。一千三百年頃遂にアッシリヤの爲に滅ぼされたり。

加耳特亞人の文明

カルデヤ人は上古より建築に名ありり。聖書（イザヤ）の創世紀（第十一章）にカルデヤ人が邑を起し天に達すべき塔を建んとしたることを記載せり。固より埃及の建築術には及ばざりしと雖も技術は頗ぶる巧妙に達したり。

其の最も著明にして遺跡の今に見るべきものは神廟の殿塔なり。其の構造は二三階ありて方尖塔（ピラミッド）の形に似たり。此地方には石材乏しく、且つアラビヤ及びベルシャの山は遠くして多く石を得がたかりしが故に太陽の熱にて作りたる磚瓦を用ひたり。是等の堂塔は或は天文臺としてカルデヤの僧侶が占星術の爲に用ひたりしものならんといふ。

アツケデヤ人は楸形文字を發明し、又天文學の開祖となりたり。圓圈を三百六十度に分ち、黄道の十二支を創意し、七日を一週として遊星の名稱を附し、第七日を以て休日となすは皆な彼等より傳はれる習慣なり。希臘人は本と一月を三旬に分ち羅馬人は八日を一週となしたりしが希臘人はアレキサンデリヤより七日一週の制を輸入し、羅馬人は紀元の頃より之を採用し、遂に西洋一般の習慣となりたり。又希臘人は其の度量衡の制度をバビロニヤより得たりしがバビロニヤの制は本とアツケデヤ人より傳へられたるものなり。希臘人が用ひたる貨幣の本位はミナ(Mina)と云へり。是れカルケミシのマネより轉化したるものにしてマネはセミチック語に非ず、アツケデヤ語なりしといふ。

アツケデヤ語は紀元前一千七百年頃全たく消滅に屬したり。是より先きアツケデヤ人を征服したるセミチック諸王等は文學の保護者にしてサルゴン一世の如きは最もアツケデヤ文學を保存するに勉めたり。カルデヤ人の書籍は概して磚瓦の兩面に楕形の文字を彫刻したる者なり。長さ一時乃至十二吋、厚さ凡そ一時あり。特に重要な記録は文字を記したる後、更に陶土を加へ其上に重記して更に之を焙きたり。故に外記若し破損に遭ふときは直に外被を除去すれば更に眞蹟を發見するを得たり。是等の石版は大圖書館に保存せられたり。チュレニアン時代に於ても大都會には必ず圖書館設備せられたり。エレクは殊に圖書の都會と稱せられ、其大圖書館を以て聞えたり。東方學者セイス曰くアツカドは西方亞細亞の支那なりき、殆んど各人皆な文字を讀み且つ之を記するを得たりと。以て其の盛大なりしことを想見すべし。後年カルデヤ衰へてアシリヤ起りし時其王アシユル、バニバル紀前六六八頃サルゴン一世の圖書を模寫し、之をニネベの大圖書館に藏めたり。今日東方學者が發見して譯出せるものは即ち此の大圖書館の遺跡なりとす。此の如くアツケデヤ語は死語となりし後も、カルデヤ人及びアシ

リヤ人に對しては恰かも近世歐米の文化に於ける希臘語及び羅旬語の位置を有したり。彼等はアツケデヤ人の文學を翻譯し而して其の學術上及び宗教上の名辭を傳授したり。亞西里亞學起り、且つ磚瓦の古書發見せられてより、カルデヤ人の宗教及び學術に就て大に其の真相を知ることを得るに至れり。

アツカド人の宗教は現今北部亞細亞の遊牧人民中に行はる、シヤマニズム(Shamanism)と大略同一のものにして善惡の靈を信じ、其の善惡を防制せんが爲に種々の符咒及び妖術を用ひたり。セミチック人到來の以前、善靈の崇拜益々盛にして多神教となり且つ群神中、他神よりも高等の位置を占むる者ありて磚瓦は漸やく諸神に對する祈禱及び讚美歌を以て充たされたり。是時に於てセミチック人は到來したり。彼等の宗教は一種のサビアニズム(Sabianism)にして天體特に太陽を崇拜したり。二個の宗教相合し、世界に於て最も勢力ある一種の宗教となりたり。アツカド及びシユミルに於けるセミチック人種の諸王は萬神の崇拜を整理したり。故にセイスは下にある人間を組織したる同一の諸王は上にある群神をも組織したりと云へり。諸神の順序左の如し

第一、イル又はラと呼ぶ神あり。埃及の日神ヲシリスの他の稱號も亦ラと云へり。而してイルは一神教の本國たる希伯來人の神エロヒム及び亞刺比亞人の神アルラの語根なりといふ。其下に三對の神あり。アナ(地神)バルス(天神)及びホア(海神)是なり。希臘人の崇拜したるブルト、ゼウス及びポサイドンの三神に相符合せり。次に第二の三對神あり。シン(月神)サン(日神)及びビン又はウル(虚空)是なり。其次に五神あり。土星、木星、火星、金星、及び水星、即ち肉眼にて見らる可き五大遊星を代表したる神なり。以上十二大神の外無數の小神祇及び地方神枚舉に遑あらず。蓋し新宗教はアッカド人の一切の神とセミチック人の神々とを合併したるものなりしが故なり。

セミチック人はアッカド人の宗教の外形を變更せしめたるのみならず、深厚にして且眞誠なる宗教的精神を注入したり。其の悔恨的讚歌の中にはバイブル舊約のダビテの詩篇に似たる者あり。抑も此の人民の中より唯一眞神の存在を認識したる一派起りしことは世界の宗教史上特筆大書すべき事件なりとす。彼の希伯來人の祖なるアブラハム紀前二〇〇〇—一四〇〇はカルデアのウルといふ處に生れ、唯一

神教の萌芽を携へてバレスチンに移住し、猶太教基督教及びマホメット教の祖先とはなりしなり。又た中世歐羅巴に行はれたる占星術はセミチック人の天躰崇拜に基因し、其の魔術妖法はチュレニアン種のアッカド人より傳播したるものなり。英語のマジク (Magic) は希臘語より轉化し希臘語のマゴス(魔術師)といふはアッカド語より出でたりといふ。

又たイズデバル (Izdubar) の史詩あり。十二部に分る。希臘神話中のヘラクレス物語に似たり。此外カルデアの女神イスタルは希臘諸神中のアフロダイトに符合するが如き希臘の宗教が其の文明と同じく東方に負ふ所の深遠なることを證明するもの多し。

天文學及び之に關係ある學術に於てカルデア人は確實なる進歩を爲したり。傳道を十二支に分ち、星宿に名稱を附したるは其の星學に達したりしことを不朽に紀念せしむるものなり。彼等は日蝕月蝕を豫知し又種々の日時計を構成し、一年を十二ヶ月、日夜を各十二時間に分ち又た七日一週の制を組織し世界文明の上に非常なる影響を及ぼしたり。其の算術に長じたりしことは一より六十に至る數

の自乗及び三乗を記したる表の發見せられたる事實に依て知ることを得可し。又た數學に於ける十二分數法は彼等の發明にして西洋諸國は多分カルデヤ人より傳授したるものならんと云ふ。ラウリソン曰く、カルデヤは亞細亞文明の大祖先及び發明者として卓立すと。實に西洋文明の淵源は一は埃及にして他はカルデヤに在りと言はざる可からず。

亞西里亞帝國

亞西里亞は巴比倫の北方に在りて西部亞細亞に於ける最

初の大帝國なり。希臘人の傳説によれば建國の祖をナイノス及び其女皇セミラミス本邦神功皇后に似たりとなす。然れどもナイノスの名は碑文の中には發見せらるゝことなく又たセミラミスの名も紀前第九世紀の碑文にあるサムラミットの外見る所なしと云ふ。

第一期の帝國紀元前一三〇〇頃—紀元前七四五

カルデヤ王國の時代に當り亞西里亞は

其の屬邦なりしが凡そ紀元前一千九百年頃より獨立し紀元前一千五百年より一千四百年頃までは國勢微弱にして振はず、凡そ紀元前一千三百年の頃チグラシ、ニン起りて一時バビロニヤを征服し爾後盛衰ありと雖も概して紀元前六百六年ニ

ネベの滅亡に至るまでカルデヤに代りて西部亞細亞の霸國たり。

チグラシニンの後凡そ二百年を経てチグラスピレザ一世紀元前一五〇一—

五〇といふ王あり。彼が遺したる碑文によれば彼れは即位後五年の間に四十二

國を征略して其王を服従せしめ其質を收め其の朝貢を命じ南はペルシャ灣に達し、西は地中海及び裏海の濱に至るまで一政府の下に歸せしめたり。彼れは又た神殿を再建して前代よりも偉大なるものと爲したり。

爾後二百年間亞西里亞は殆んど歴史上の地平線下に没し其の版圖も亦た本部の外に出る能はざりしが紀元前九百三十年より六百二十六年までは亞西里亞帝國の全盛時代なりき。アッシュル、ナジバル紀元前八八三—八五八の時に至りて國勢大に振

ひ、パレスチン諸邦の亂に乗じて亞西里亞の勢力を擴張シタル及び其他の諸市に朝貢を徴し、其威權は小亞細亞のシリシヤに及びたり。彼れは戰爭に於ては他の諸王と同じく、殘酷猛烈にして磔刑火刑を用ひたり。然れども平和の事業をも

亦た銳意獎勵して彫刻及び建築を保護したり。次王シャルマニ一世紀元前八五八—八二三は三十五年の治世にして其間二十回乃至三十回の遠

征を爲し地中海よりペルシヤの山中に至る諸邦の人民を征服したり。之を第一期帝國の諸王中、最後の大王となす。此より諸州諸市相離叛して帝國漸やく瓦解したり。

當時亞西里亞の文明及び工藝は頗ぶる進歩を爲し偉大なる王宮は建築せられ、之を飾るに美麗なる彫刻を以てしたり。首府は主としてカラに在りたりと雖も諸王往々にしてニネベ(原ニヌア王宮といふ義)に住居したり。各王の事蹟は其の當時の記録ありて之を後世に傳ふ。而して其の材料には石又は長圓形の磚瓦を用ひたり。亞西里亞の權勢に歸したる諸國に於ては到る所に彫刻したる石柱を建設したり。外國との交通も頗ふる頻繁にしてバクトリヤ地方の駱駝、羚羊、犀象等亞西里亞に輸入せられたり。

第二期の帝國 紀元前七四五—同六〇六 デグラスピレザー二世 紀前七四五—七二七 は僭主にして所謂第二期帝國の始祖たり。有爲活潑にして武材に富み、シリヤ、パレスチン及びフィニシヤを征服して屬邦となす。當時バビロニヤは數小國に分裂したれば王は之を蹂躪してアツカド及びシユミルの王と稱したり。是に於て亞西里亞の

國權は再び南亞細亞の大部分を覆ふに至れり。

特に此王に關し萬國歴史の上に於て大書せざる可からざることは彼が單に國土を征服するのみに非ずして之を政治的に組織せんとしたるの事蹟是なり。從來西部亞細亞に興したる帝國は單に征服せられたる邦國若くは都府を以て成立し、各自土着の王を戴き何時にても離叛獨立せんとするの状態を存したり。チダラスピレザー二世は屬邦の王を廢して亞西里亞の總督を置き頗ふる中央集權の制度を設立せんことを試みたり。彼れの計畫は十分に成功せざりしと雖ども第二期の帝國が第一期の帝國と異にして幾分か後世に於けるデライオス、アレキサンデル、及びシーザーの世界帝國の模型となりたるは此王企圖の幾分が成功したる結果によるものなり。

第二期帝國の諸王中最も大なる者はサルゴン 原サルギナ希伯來サルゴセナケリ紀元前七〇五—六八八 及びエサルハドーン一世 同六八〇—六六八 となす。

サルゴンは又大建築者にしてペルシヤの山下に大都を起し、王宮を建設したり。史家之れを亞西里亞のウエルサイユと稱す。其の子セナケリ 希臘サナケリナス は亞西

里亞の諸王中名聲最も聞ゆ。ニネベの墟址より發見せられたる遺物多く同王に關するが故に其の有名なること後巴比倫の王子ブガデネザルに相對比することを得べし。彼は猶太王國を討ち又たバビロン叛きしかば之を討て全く殘滅せしめたり。晩年溝渠を掘りニネベに壯麗なる王宮を建つ。王少子エサルハドン^{エサルハドン}を愛し二長子の爲に弑せらる。

エサルハドン一世希伯來語なり。原音アシユル、アクイッテイナはセナケリブの末子にして先づ父を弑したる長兄及び次兄を誅し、次に四方を征し前代未聞の功業を成したり。又た巴比倫を再興して半ば之に住し其他建築造營する所甚だ多く、神殿三十餘を建設したり。

アチユルバニル原音なり。希臘サルダナバは美術及び文學の保護者として最も名あり。カルデヤの圖書を摸寫せしめて首府ニネベの圖書館に藏め、カルデヤの文學をして多く後世に存することを得せしめたり。吾人が古代カルデヤの文明に關して知ることを得るは此のニネベ圖書館の舊趾發掘の結果による者とす。文學美術大に開けたるに拘はらず亞西里亞の衰微も亦た當代より其の徵候を顯

はしたり。紀元前六百三十三年頃より東方にはミデヤ王國興りて漸やく進撃的態度を取り、又たシ、ヤ人と稱せらるゝ蠻族同時に西部亞細亞を蹂躪したり。

エサルハドン二世希臘サハは亞西里亞最後の王なり。彼は巴比倫の總督にナポボラサルを任じたるに紀元前六百二十五年叛きて獨立したり。後にミデヤ王サイアクサレースと相應し、ナポボラサルの子ネブカドネザル巴比倫の兵を率ゐ共ニ首府ニネベを圍み之を陥れたり。時に紀元前六百六年なり。凡そ七世紀の間亞西里亞は西部亞細亞の帝國として四隣を壓したりしが一朝にして亡び其後二百年希臘人ゼノフォン及び一萬の希臘兵が通行せし時首府ニネベは全く零落に屬し、其名さへも知るに苦しむたりと云ふ。

亞西里亞の文明

亞西里亞帝國は雜駁なる諸國民及び諸人種を征服し、單に外部の勢力を以て之を結合し、共同の宗教言語若くは習慣によりて内部より同化したる者に非ざりき。チクラスピレーザル二世之を統一せんとを圖りしも成功すること能はずして止みたり。其の征服したる人民を同化する方法は之を新土地に移住せしめて故郷の風俗習慣及び歴史的觀念を脱却せしむるに在り

たり。例せばサルゴンはイズラエルの十族を移してミデヤの諸邑に散住せしめしかば遂に土人と混合して其の獨立を失ふに至れり。是の如き帝國は英邁の君主存すれば即ち盛なりと雖も然らざるときは忽ち瓦解するの傾向あり。故に世世叛亂相踵ぎ遂に鞏固なる國家を成立せしむること能はざりしなり。

アシリヤ人はセミチク人種にして其の特色たる宗教心に富み希伯來人に類似したる所ありき。故に其帝王の諸戦争は單に土地侵略のみの戦争にあらずして同時にアシリヤの宗教を擴張するの目的を有し、希伯來諸王若くは中世に於けるサラセン人の侵略に比較せられたり。建築に於ても亦然りとす。亞西里亞人は巴比倫人に比すれば神殿よりも多く王宮に意を用ひたれ共神殿の造營も亞西里亞諸王の常に重要事となしたりしと碑銘によりて明かなりとす。蓋し亞西里亞人の宗教は大略カルデヤの宗教と同一なれば別に特筆するの要なし。唯だカルデヤにてはイル又はラといふ神を第一となし、亞西里亞にてはアッシュルといふ國神を第一となし、之を萬神の王又は諸神の父と稱したり。亞西里亞國の原名はアッシュルにして其人民はアッシュル神の民其の軍隊はアッシュル神の兵其の敵はアッシュ

ル神の敵と稱せられたり。

亞西里亞人は傲慢武勇にして史家之を亞細亞の羅馬人と稱したり。其の敵人に對するや慘酷を極めたり。王宮の墟趾より得たる大理石の彫像を見るに敵國の王を捕虜となし其の片唇若くは兩唇を穿ち鉤にて之を貫き或は生きながら囚人の肉皮を剥ぎ或は槍の尖頭にて其の眼を抉り或は其舌を抜くの圖あり。又たアッシュルナシルバル王の碑文に曰く、其の男子は老幼ともに朕は之を捕虜となしたり朕は或は其の手足を斷ち、或は其の鼻耳及び唇を切りたり、朕は少年の耳を以て丘を爲し、老人の頭首を以て塔を築きたり、朕は戰利品として彼等の頭首を城邑の前に曝し其男兒及女兒は朕之を火焰の中に焼きたりと。

亞西里亞帝國は他の亞細亞帝國と同じく一定の首府を有せず、時々都を遷すの習慣なりしが故に、皇都零落の跡タイグリス河畔に散布せり。アッシュル、カラ及びニネベの墟趾即ち是なり。現今は之をキレシエルガット、ニムルド及びコウンジクと云ふ。ニネベの東北凡そ十哩の處にコルサバッドの一丘あり。是れ即ちサルゴン王皇居の跡なりといふ。又たタイグリスの上流に沿つて其の右岸に周圍凡そ八

哩の方形なる城趾あり。是れ即ちニネベ城荒廢の跡にして今に其城壘の高さ五十呎廣さ平均百五十呎あり。紀元前ゼノフランの通過したる時には其の高さ百五十呎ありしと言ふ。現今土耳其人はニネベ城の古石を發掘して其の建築の材料となしモースルニネベ城趾の面にある市邑に於けるタイギリス河の橋は彼の城壘の石を以て築造せられたり。

一千八百四十四年モースル在留の佛國領事ポタはコルサバドの墟趾を發掘し、サルゴン王宮の遺物を得て古代亞西里亞の美術を天下に紹介し世人を驚歎せしめたり。爾後英人レヤードも亦た發掘に着手し、アッシユルバニバル王の大圖書館を發見したり。前に述べたる磚瓦の書籍二室に充滿し總計凡そ一万卷ありと算定せられたり。文字微細にして顯微鏡の力を假らざれば讀むこと能はざるものあり。書籍の種類は地理、歴史、法律、數學、天文、占星、植物及び動物にして植物、樹木、金屬、礦物の目錄及び種類に従て分科したる動物の表を備へ、圖書館吏ありて之を監督したり。レノルマン曰く、疑もなく此の分類の多分は甚だ粗笨なる科學の分類なりと雖ども、吾人は亞西里亞人が既にリンネウスの原則に等しき原則に基づき、

科學的術語を有したることを知り、一驚を喫したるも亦宜なる可しと。而して此の圖書館より得たる磚瓦の一には、參觀者は其参考せんと欲する書の番號を圖書館員に與ふへし、然れば館員は其の書を參觀者に渡すべしとの告示文を載せたるを發見したり。固より此の圖書館は公衆の參覽に供したるものにして碑文にも「朕は石版に書せしめ朕が人民を教訓せんが爲に之を朕の宮中に置きたり」とあり。以上の書籍はカルデヤの古文書を模寫したるもの多し。是れ亞西里亞の文學美術及び科學は殆んど皆なカルデヤ人より傳來したるが故なり。アッシユルバニバルはカルデヤの古書を検索し更に之を磚瓦に模刻してニネベ皇宮の圖書館に藏めしめたり。彼はアガデいの王サルゴンが建設し、若くは擴張したる圖書館より最も貴重なるものを得て之を自己の圖書館に加へたり。亞西里亞人の書籍はカルデヤ人の書籍と其形を同うし、品類甚だ種々ありと雖とも其の多分は字書、文典及び其他の教科書なりとす。是まで發見せられたる石版の中にて最も珍奇なるは政府より發行したる石版の手形なり。此の手形には大藏省に於て金銀に交換することを得べしとの文字あり。而して紀元前六百二十五年頃の手形も亦發

見せられたり。此に由りて亞西里亞人は既に代表貨幣の性質に就て正確なる思想を有したることを知る可し。古來各地に於て種々の通貨流行し或は介殼を用ひ或は獸皮を用ひ或は家畜を用ひ或は穀物を用ひ甚だしきは奴隸を用ひたるもの例あり。然るに古代亞西里亞に於ては磚瓦の幣を紙幣の代りに用ひたるものなりと知る可し。近年亞西里亞學の進歩は世人をして始めて亞細亞の美術及び開化が歐洲文明の上に如何なる密接の關係を有するかを知らしめ、從前希臘及び羅馬の文明は殆んど歐洲固有の文明にして亞細亞に負ふ所なきが如く思惟したりし觀察の全く誤謬なることを覺らしめたり。又た此に由て歴史の一致といふ原則愈々證明せられて如何なる國民の歴史と雖も、苟くも人類の歴史たる以上は史家の決して度外視す可からざることを理會せしめたり。希臘及び羅馬は近世歐洲文明の淵源なるが如く、ナイル及びユーフレチース河畔の開化は希臘及び羅馬の爲には文明の淵源たりしなり。フェルキエソン曰く、埃及は古代の世界が其の科學及び美術の半を得たる教師なりしならん然れども吾人が祖先となす所の國民は亞西里亞に生れ亞西里亞より其の一切の情感其の一切の固有文明を傳承し

其の哲學、其の數學的知識……一言に約すれば其の知識上の生命を得たりと。

巴比倫帝國

舊加耳特亞王國の亞西里亞に征服せられし後、凡そ六百七十五年間、巴比倫は亞西里亞の屬邦となり、人民は其の軛を脱せんと欲して屢々兵を擧げ稍々成功したる事もありたり。特にナボナツサル王紀前七三三は英邁の主にして亞西里亞より獨立し其の紀念として前代巴比倫の記録を破毀したりしかば後世王の即位を以て巴比倫の紀元となすに至れり。之をナボナツサルの紀元と稱す。然れども巴比倫の獨立は鞏固に永續すること能はざりき。亞西里亞王チラスピレザ二世の後シャルマニ一ザ一四世紀前七二七の時サルゴン七叛きて其位を奪ひ王となりたり紀前七二〇。此機に乗じてメロダクバラダン希伯來名ドニク、パレットイン(紀元前七二〇)。亞西里亞より獨立して巴比倫に王たること十二年間遂に亞西里亞王サルゴンに征服せられたり。紀前七百三年セナケリブ王の時巴比倫反してメロダクバラダン再び巴比倫王となりしも、セナケリブの爲に逐はれて其の地位を保つこと能はざりき。王は猶太、埃及の王と通じ、亞西里亞王に反對の同盟を組織せんことを試みたり。正當に獨立したる新巴比倫帝國の始祖をナボボラッ

サル希臘名稱、原ナアバ紀元前六二五—六〇四と稱す。亞西里亞の晩年亞西里亞王の爲に巴比倫の總督となり其の反亂を鎮定するの任を受けしが反て其の首領となりて獨立したり紀前六〇五。後年ミデヤ王サイアクサレスと同盟してニネベを陥れ亞西里亞を亡ぼしたり紀前六〇六。其の功により亞西里亞帝國の西部に屬したるユーフレチース地方、シリヤ、フィンシヤ、及びバレスチンを得て爰に帝國を建設したり。且つミデア王の美女アミチスを迎へて其の子ネブカドネザルニ娶し、更に兩國の同盟を固くしたり。紀前六百八年埃及王ネクの爲に兵敗れて西部の領土を失ひしが同六百五年武勇なるネブカドネザルはカルケミシに於て埃及の兵を擊破し之を恢復したり。ナボボラツサルは晩年征戰の事を其子ネブカドネザルに一任したり。ネブカドネザル希臘名稱、原ナアクテ紀前六〇四—五六一は父の死せし時遠く巴比倫府を離れ南部バレスチン若くは埃及に在りて埃及王ネクがシリヤを襲ひたるを征討しつゝありしが父王の訃音に接し、通常の道路によりて兵を返し王は獨り自から僅少の従者と共に直にシリヤの沙漠を横ぎり數日にして首府に達し、不軌を圖らんとする者をして其目的を達するに遑なからしめたり。

王在位四十三年間武勳最も輝き又た首府巴比倫原バビルをして世界の偉觀たらしめ、巴比倫の國光をして其の極度に達せしめたり。紀元前五百九十年猶太を征し其の首府エルサレムを陥れ其の神殿及び王宮を掠め、其王エホヤキムを囚にし、其叔父ゼデキヤを立つ。ゼデキヤは埃及及びフィンシヤの諸市と同盟を聯ねて反す。ネブカドネザル復エルサレムを圍みて之を陥れ、其の神殿を焼き悉く其の寶器を奪ひ、ゼデキヤ王の眼前に於て其の子を死に處し、王の兩眼を抉りて之を罰し、人民を巴比倫に移住せしめたり紀元前五八六。又た是より先きフィンシヤの雄都タイル希臘名稱、希伯來名テロ、久しく巴比倫王に圍まれ防戰十三年に及びしが是に到りて遂に落城したり紀元前五八五。又た埃及を討て之を屬邦となしたり。大王の征戰は西部亞細亞の列國に涉り、其の囚虜となす所の人民甚だ多く、之を驅りて役夫となし、埃及の諸王と併び稱せらるゝ程の大工事に着手し、就中巴比倫府の大城壁を修繕し、府中に大王宮及び假山を建設し、ユーフレチース河畔に堤防を築き、ユーフレチース及びタイグリスの兩河を相通せしめ、其他大池及び運河を造りて灌漑の利を興し、又た全國の市邑及び神殿を再造し、若くは之を修繕したり。

大王死して後其子エビルメロダク希伯來名、原名アミル立つ。大王の女婿
 ネルガルシヤレゼル紀前五五九之を殺して其位を奪ふ。四年の後其子
 ラボツラコス希臘名、原名イリク立つ。在位九ヶ月にして反者の爲に弑せられ、ナ
 ボネデイラス希臘名、原名ナナ之に代れり。彼はネブカデネザルの女を娶
 りて其の位地を固め又た其子ベルシヤツザル希伯來名、原名をして政を攝せし
 む。是時に當り埃及既に獨立し、シリヤ將さに反かんとし、而して東方には波斯と
 いふ強國起り、漸やく四隣を蠶食せんとするの勢あり。紀前五百五十八年波斯ミ
 デヤを滅す。是に於てミデヤの交親國たりし巴比倫リデヤ埃及との間に三國同
 盟を結び波斯を防がんとせしも、リデヤは紀前五百四十九年頃遂に波斯に滅ぼさ
 れたり。ナボネデイラス巴比倫城に糧食を蓄へ大に戰備を充實せしむ。王その
 子ベルシヤザルをして城を守らしめ、自から兵を出し波斯王サイロスの軍を邀へ
 撃て敗走し、尋て首府も亦た陥りたり。時に紀前五百三十八年なりき。ヘロドト
 スによれば巴比倫は天下の堅城なるを頼みて波斯の兵を侮り城中酒酣なるとき
 波斯人は城中を横流せるユーフレチースの水を他に轉流せしめ、水門を潜り城中

に突入し遂に之を陥れたりとあり。然れども近時の批評によれば此の傳説は紀
 前五百二十一年巴比倫再び獨立を圖りしとき波斯王デライオス一世の爲せし所
 にしてヘロドトスは前後の事實を誤まりたるものなる可しといふ。

是より先き二三千年間西部亞細亞の文明はタイグリス及びユーフレチースの兩
 河を中心となし帝國の主權亦た爰に集中したりしが巴比倫の亡滅と共に移りて
 波斯の首府ベルセポリスに歸したり。斯くて從來天下に跋扈したるセミチク人
 種漸やく衰へてアリアン人種歴史上に雄飛するの時代となれり。

巴比倫の文明 亞西里亞には埃及に於けるが如き世襲的階級制度なく君主
 は内外人の上に平等なる擅制政治を行ひたりしが巴比倫に於ては君主擅制は亞
 西里亞と同様なりしも、人種雜駁にして社會には埃及に均しき世襲的階級制度存
 し其中にて舊來のカルデヤ人は埃及の僧侶に似たる一階級を爲したり。彼等は
 星を占ひ夢を解き種々なる宗教上の儀式を掌どり又は政治に參與し軍隊を指揮
 し國務上重要な官職に任したり。僧侶の權勢は君主擅制よりも早く發達して其
 勢力は久しく社會の上に風靡したりしが爲に太古よりの人民も新來の移住民も

共にカルデヤ人と稱せらるゝに至れり。商工農の三民も各々世襲的階級を爲し、特にベルシャ灣頭の沼澤に生活したる漁民は社會階級の最下層にして埃及の牧豕者と其類を同うし泥土を蓋ひたる筏を蘆葦の間に浮べて之に住し乾魚を以て製したる食物に其露命を持したりといふ。

紀元前第五世紀ヘロドトスは巴比倫に遊び種々の奇談を傳へたり。就中その結婚の習慣は最も奇と稱するに足れり。巴比倫人は少女を嫁するに當り競賣の方法を用ひたり。即ち先づ最も美なる女子を出し最高價を投ずる者に與へ、漸次劣等の美人に及び醜美の中間に位する女子は無代價にて嫁せしめ、而して醜顔の女子は美女子に投ぜられたる代價を附して義侠なる貧困の男子に嫁せしむるの方法を用ひたり。此の如く富者は代價を以て美人を娶り貧者は醜女を娶りて其の代價を受け、醜美貧富の幸不幸を平均せしむるを得たり。結婚は一年一度の時期に限り、他の時期に婚するを許さざりき。又た巴比倫の風俗は埃及に於けるが如く別に専門の醫師を用ひず、病者を城門に出して各通行人の診察を受けしめ、通行人は其の經驗によりて治療の方法を授けたり。而して病者の市場に横たはるるを

見るもの其の病狀を問はずして通過するは法律の禁ずる所なりしといふ。

巴比倫府は古代の大都府にして天下第一と稱せられたり。其の起原は遠くして考ふ可らず。紀元前六百九十年亞西里亞王セナケリブ之を破壊し其子エサルハッドン之を再建し、巴比倫王ナボポラッサル及び其子ネブカデネザルに至りて大成したり。亞西里亞の首府ニネベは長さ凡そ三哩にして幅は一哩半なりしに對し、ヘロドトスによれば巴比倫の城壁は方形にして一方面の長さ凡そ十哩厚さ八十五呎高さ三百二十五呎ありたりといふ。又たヘロドトスの説に城内の面積凡そ方十四哩ありしとの事なるが近時發見せられたるネブカデネザルの碑文は正さしく其説を確實ならしめたり。但現今歐米の都會の如くならずして我が江戸城に類したり。ユーフレンチスは城中を斜に流れ、周邊は繞らずに城壁を以てし城外には深濠を穿ち城壁は貫くに四面各々二十五門を以てし其上には二百五十の城樓を築き、而して城壁の内邊と外邊との間は駟馬の車を駛らしむるの餘地ありたりと云ふ。又たストレポー紀元前一世紀希臘地理學者の時城壁の高さ猶ほ七十三呎にして厚さ三十二呎を爲したりとあり。希臘人は此の城壁と城内に設けられたる空中の

庭園とを所謂世界七不思議の一に數へたり。

此の空中の庭園とは古代希臘の旅客が最も驚歎したる所なり。巴比倫國は大平原にして遠近に山なかりしかばネブカデネザルは其の皇后アミチスが元來ミデヤの山地に生長し、郷の情に堪へざりしを以て其心を慰めんが爲めに假山を建築したり。之を空中の庭園と稱す。其實は彎形に石柱磚瓦を築き一階又一階遂に城壁の上に聳へたる空洞の假山を造りたるものにて其實空中に懸れるには非ず、而して其上を覆ひたる土は深くして草花を養成するに足るのみならず、最大の樹木を成長せしむるに十分なりき。且つ機械的作用によりてユーフレチースの河水を引き、噴水の泉、香木の森ありて其狀正に眞山の景に異ならず、而して其の森林中に冬時皇后の住居せらるゝ宮殿を設けたり。他の地方ならば避暑に適すべき所なれども此地は熱帯に近きか故に屋外に生活するを得るは冬時のみに限られたり。

世界七不思議は埃及の方尖塔、巴比倫の神殿、城壁及び空中の庭園、希臘のオリンピックヤに於けるゼウスの神像、小亞細亞エフェソスに於けるダイアナ女神の社殿、同ハリカーナッソスの墓碑及びロード島の港口に跨がりたる直立の大像是なり。

元來巴比倫人は亞西里亞人よりも多く宗教に注意したり。故に亞西里亞人は多く王宮を建設し、巴比倫人は多く神殿を建設したり。而して巴比倫帝國時代の建築はカルデヤ時代に異なるとなしと雖も概して偉大莊麗を極めたり。巴比倫府の外郭ボルシッパに建られたる七星殿は巴比倫の偉觀として稱せられたり。

其の構造は方尖形に似て其基礎方二百七十呎數階を爲して高さ百五十六呎に達す。而して各階は七星に奉げ七星の色に擬して各階を裝飾し、日月の階は金銀の延板を以て張り、日月も亦た遊星の中に算入したり。

巴比倫府は波斯人に征服せられたるが爲めに頗る破壊せられたり。デライオス一世の時獨立を圖りて二年間圍まれしが遂に陥れられて外壁は毀たれたり。波斯王は巴比倫を以て其の皇居の一となしたりしも遂に之を舊態に復するとを爲さざりき。紀元前三百三十一年アレキサンデル大王巴比倫府に入りて之を恢復し、零落せる神社を再建せんと欲し、二ヶ月間役夫一万人を用ひたりしも未だ竣工に到らずして大王死し、是より益々頽敗に屬し紀元後二世紀希臘の地理學者パウセニアスの時には城壁の遺跡のみ存したり。

以上三王國年表

第一 加耳特亞王國

紀元前四千年以上
同 四千年以上
同 三千八百年頃
同 一千三百年頃

アツケテヤ人の來住
セミチク人種の侵入
アガアイ王サルゴン(サルキン)一世
アシリヤ王チクラシ、ニン加耳特亞を亡ぼす。

第二、亞西里亞帝國

紀元前一三〇〇頃—一二八〇頃
同 一一三〇頃—一一一〇頃
同 七二七—七〇五
同 七〇五—六八一
同 六八一—六六七
同 六〇六

アシリヤ王チクラシ、ニンの治世
チクラシ、バレザル第一世
サルゴン(サルギナ)
セナケリブ(シナキイルバ)
エサルハドン(アッシュルアグイッテイナ)
亞西里亞亡ぶ

第三、巴比倫帝國

紀 六二五
同 六二五—六〇四
同 六〇四—五六一
同 五三八

巴比倫の獨立
ナボホラツサル(ナアバルズル)
ネアカアネザル(ナブクドズル)
巴比倫亡ぶ

第三章 希伯來人及びフィニシヤ人

希伯來人

古代に於て地中海の東隅に二小國民あり。一をフィニシヤ人と云ひ他を希伯來人と云ふ。其の歴史上に於ける價值は實に偉大なれども其の生存したる土地は狹隘にして地理上に於ける最少國民の一なりとす。希伯來人の國土は通常之をパレスチンと云ふ。西は地中海にして東にはヨルダン河流の低地あり、北にはレハノンの山脈及びリタニの谷あり而して南はシナイ半島の沙漠に相接したり。中央は高原にして山多く、東邊はヨルダン河流れて死海、ガリラヤ海等の湖水あり、西部は地中海に濱したる平原にして全國の輻員南北は凡そ百四十五哩東西は僅かに平均四十五哩に過ぎず。希伯來とは元來原語にてはイブリと云ひ、彼の方よりといふ義なり。埃及人の命したる名稱にして元來其の祖先アブラハムがユフレチス河の彼方より來りしが故ならんといふ。パレスチンは一名カナンと稱す。低地といふ義なり。パレスチンとは希伯來人より以前に住居したる土人の名稱に基づくものなる可し。而して希伯來人の歴史は載せて西洋諸國の經典たる聖書の中に詳かなり。之を大別して左の四期となす。

第一期 遊牧時代にして始祖アブラハムよりモーゼの立法に至る 紀前二百年頃まで

第二期 聯邦共和時代にしてバレスチンの征服より王國の建設に至る 紀前一千三百年頃より同

第三期 君主統一の時代にして 國の建設より南北兩朝の滅亡に至る 紀前一千五百八十四年頃より同

第四期 外邦隸屬の時代にして波斯王サイラスの時より羅馬に征服せらるゝの時に至る 紀前五百八十六年頃より同

第一期 遊牧時代 希伯來人の祖をアブラハムと云ふ。加耳特亞のウルと云ふ處よりバレスチンに移住す。傳説によれば彼の周圍の人民と異にして多神教及び偶像教を捨て純然たる一神教を奉じ神命に隨ひて故郷を去りたりといふ。蓋し遊牧の生活を爲したる一族の長にして其の族と共に水草を逐ふて移住したるものなる可し。其の子にイサクあり。イサクの子にヤコブあり。ヤコブ十二人の子ありて希伯來人種十二支派の始祖たり。ヤコブの一名はイズラエルなり。

故に又たイズラエル人と稱す。又た十二支派の中ユダの一族最も強し。是れ後世猶太人の稱ある所以なり。而して亞刺比亞人も亦たアブラハムの庶子イシマエルの子孫なりといふ。

ヤコブの子ヨセフ聰明にして父の寵を受け他の諸子に嫉まれ賣られて奴となり埃及に往き埃及王の宰相に擧られ後カナンに饑饉ありしかば其の一族を招きて埃及に移住せしめたり。蓋し埃及中帝國牧王の時代にありし事なる可し。

希伯來人の埃及にあるや猶ほ遊牧の生活を改めず且つ特殊の宗教を信じ人口繁殖して十二支族に分れたり。亞細亞の遊牧人種が埃及の思をなすや久し。王統變更して國王は希伯來人が遊牧の生活を爲しつゝ益々繁盛なるを忌み之を驅馳して市邑を建設し之に住居せしめんことを欲したり。希伯來人は其の強迫及び虐待に堪へざりしがモーゼといふ人傑出現し希伯來人を率ゐて亞刺比亞のシナイ半島に脱れ爰に在ること四十年モーゼは神意に託して之に法律を授け訓練して以て國民の規律を立て遂にバレスチンを征服し獨立の國家を建設するの基を開きたり。モーゼは自から希望の地に入ること能はずして身先づ歿したりと雖

ども、將軍ヨシユア之に代りて遂に其の目的を達することを得たり。

第二期 共和時代 希伯來人はカナンの地を畧して十二支族之を分領し、土人より農業を學びて之に従事し確定の住居を爲すに至れり。別に君主といふものなく、エホバと稱する獨一の眞神を信じ、之を以て全國民統一の基礎とは爲したり。獨逸の政治學者ツライチユケーは此の時代の政體を民主的神教制と稱したり。各支族には支族の長あり、又長老等ありて各族内の政治を掌り、又宗教はレビの族ありて之を管掌したり。此の一族は全國四十八個の市邑に分住し、宗教を以て全國民の統一を維持したり。然れども十二支族の上に君主なるものなく、宗教の勢力のみにては全國の一致を保つこと甚だ難く、弱勢の支族は動もすれば強勢の支族を嫉み、無政府の状態に陥りたり。また外部の人種に征服せられたること往往なりしが是の如き時節には國神に事へて忠實なる偉人現出し或は諸支族を聯合せしめて國民の獨立を恢復するを得たり。西洋の諺にサムソンの力を稱するは即ち此の時代の勇將サムソンの事なりとす。

第三期 君主統一並に南北兩朝の時代 前期に於て希伯來人は一個獨立の國民

となりたりしも、中央政府なく十二支族の聯合制度にして全支族の上には君主なく宗教上の信仰と外部に對する恐怖の念とによりて稍、其薄弱なる一致を保存することを得たり。然れども内部の統一不完全なりしが爲に、從來の土人すらも十分に之を征服して全く其土地を畧取する能はず、且つ南には埃及あり、又北には亞西里亞ありて何れも君主制により國內統一し、勢力甚だ強大なりしかば希伯來人も遂に之に倣ひて十二支族の中よりサウルといふ偉人を撰び之を全支族の王と爲したり。サウルは人民の中にて身長最も高く、美にして且つ壯なるが爲に王に擧られたり。爰に於て希伯來人の敵を征服し、十二支族を結合し大に王國の經營を爲したり。然れども晩年僧侶サムエルと衝突して民心を失し、王位を其子に傳ふると能はずして戰死し他支族の人ダビデ之に代りて全支族の王となりたり

紀前一九〇三頃

當時土人未だ全く征服に歸せずして猶ほ要害の地に割據したり。ユダの支族はダビデ王の支族なりしが其の占領地の中部エブスといふ所にも土人ありて之に據りたり。是に於てダビデ王討て之を平げ、名をエルサレムと改めて王國の首府

となしたり。此王の治世は猶太國史の黄金時代にしてナイル及びユーフレチー
ス河畔の二大王国と併立し、其の版圖は紅海及びユーフレチーに達したり。又
た王は自ら詩人にして大に希伯來人の文學を進めたり。

ソロモン紀前九三三頃は父ダビデの武畧なかりしかども建築貿易及び學藝を奨
勵し、サムソンの力ソロモンの智とて天下後世に並び稱せらるゝに至れり。埃及
王の女を娶り、又たタイルの王ハイラム希伯來語にてはと好を通じ、彼よりレバノ
ン山の良材とタイルの技師とを得てエルサレムに壯麗なる神殿を築き、ダビデ王
の遺圖を完成し、永くエルサレムを以て宗教上及び政治上の國都たらしめたり。
而して希伯來人はシリヤに於ける雄大の人民となり、四隣その朝貢國たるもの多
かりき。

ソロモンは商業を擴張するの目的を以て艦隊を地中海及び紅流に設置し、亞細亞
及び亞弗利加の最も遠遠なる地方に航せしめ、其の名産珍寶を得て王國の富と光
榮とを増進せしめたり。又たユーフレチー地方及び其外なる土地との陸上貿
易を助長せしめんと欲してシリヤの沙漠に商隊の足を駐むべき都會を建設した

り。之をタドモル希臘の都府といふと稱す。此の都會漸次發達して紀元後三
世紀には名高き女王ゼノビヤの首府として繁盛を極めたり。

ソロモン王の智は天下後世の稱する所なるが南部亞刺比亞なるシバの女王は其
の風聞を聞き、自から來りて之を試み歎じて曰く「我來りて目に見るまでは其言を
信せざりしが今見るに其半も我に聞えざりしなり、爾の智慧と昌盛とは我が聞た
る風聞に越ゆ」と聖書列王紀略。今にソロモンの箴言と傳説するもの聖書の舊約
中に在り。彼は又た當時の植物學者なりしと見え、凡べて植物及び樹木の智識に
通曉せり。

ソロモンの智も當時の風俗たる帝王の女色には勝つ能はずして數多の妻妾を蓄
み外國の婦女を寵愛し、其の數一千に達したり。又たフイニシヤと交通の結果國
中の諸山はパール神パール神及び其他の異神を崇拜すること流行し王も亦た之を許可し
たるのみならず、王自から晩年祖先の神に背きて偶像に迷ひ、之が爲めに民心を失
し、王國分裂の端を啓きたり。以後南北分立王國の時代となれり紀元前九五三
ソロモン一代の間は榮華を極めたりしも之が爲に人民に重税を課したりしかば

其子レハベアム英語レホ位を繼ぐに及びて人民は其負擔を軽くせんことを請願したり。然るに彼れ之を聽かざりしが故にユダ及びベニヤミンの二支族を除くの外、十族は叛きてエルサレムの北に別て一王國を分立し、エラベアム英語アムを以て王となし、サマリアを首府となし、イズラエルの王國と稱したり。南朝は正統にしてエルサレムを首府としユダの王國と稱したり。一致せば十二支族は強大なる王國を保持す可かりしに、分離して二王國となりしより、南には埃及の強國あり、又た北には亞西里亞及び巴比倫の二大帝國起りしかば、希伯來人は其間に立ちて獨立を維持すること能はざるに至れり。

北朝凡そ紀前九五は十九王二百九十年の間存続したり。然れども九個の異族より出て治世何れも久しからざりき。エレベアムは南朝と戦ひユダ王國の基本たる宗教に反して偶像教を國教となし、新に僧侶を組織し、又埃及王シシヤク原名シの援助を請ふ。埃及王ユダを攻め、エルサレムを圍み、レハベアムをして償金を拂はしめたり。紀前九北朝第七の王アハブ紀前八は南朝と和して其女を南朝五代の王ヨラムに嫁せしめたり。政治上に於ては兩國の一致は大に益する所あり

りたれども、アハブ王の皇后イゼベルはフェニシヤのシドン人なりしが故に異教の神バアルを崇拜し、偶像教兩王國に蔓延したり。是時愛國心と純然たる一神教とを鼓舞したるは彼の預言者と稱せられたるエリヤ及びエリシヤの徒にして大に正教を維持したり。是時に當り北方には亞西里亞起りて其勢力パレスチンに及びイズラエル王國は一時その朝貢國となりたり。此の如く南北の分裂に加ふるに内外宗教の競争ありて内亂を生じ兩朝の國勢漸く衰頽したり。紀元前七百三十五年頃イズラエルの王ベカ第十八代はダマスコの王レヂンと同盟を結びてユダの王アハズ第十二代を攻めたり。是に於てアハズは亞西里亞王チグラスピレザ一の保護に頼り、同王はダマスコを征してレンズを死に處し、ベカ王を廢してホジアを立てイズラエルの王と爲したり。ホジア凡そ紀元前七後に埃及王シヤバクと結びて亞西里亞に叛く。亞西里亞王シャルマニザ一はイズラエル王國を攻めてサマリアを圍み未だ成功に及ばずして死し、サルゴン新に王となりて遂にイズラエルを征服し其人民を東方に移住せしむ紀前七。是に於て北朝は亡びたり。南朝凡そ紀前九七は北朝よりも版圖狹小にして人口は其の半に過ぎざりしもダ

ビデの正統にして民心一致し、一系二十代凡そ四百年の間存在し、北朝に後るゝと百三十六年にして亡ひたり。亞西里亞王サルゴンのイズラエル王國を滅するやユダの王ヘゼキア第二十三代紀前七二六―六九七は之れに服従したりしが、サルゴン死すると聞きて埃及の王と結び亞西里亞に叛く。亞西里亞王セナケリブ來りてユダを攻め進んで埃及を討んとせしが卒然其の軍を失ひて本國に歸りユダ王國免かるゝとを得たり。爾後又は亞西里亞に服屬し、亞西里亞亡び巴比倫起るに及びてエホヤキム第十代は巴比倫王ネブカデネザルに降り、エダ王國は其の朝貢國となりたり紀前五八六―五八〇。爾後ユダ王反覆常なく遂に最後の王ゼデキア紀前五八六―五八〇に至りては又た埃及と結び巴比倫に反す。ネブカデネザルはバレスチンを攻めエルザレムを畧し遂に國民を擧げて巴比倫に移住せしめたり。

第四期 紀元前五百三十八年巴比倫亡びて波斯王サイラス西部亞細亞を統一したり。波斯人は希伯來人と同じく偶像教を憎み、大に猶太人に同情を表したり。紀前五百三十七年サイラスは之に歸國を許しユダ支族の長ゼルバベルを知事となして猶太に歸らしめたり。是より猶太人は本國にありて大に祖先の宗教を發

揮したれども長く波斯の一州として獨立すること能はず。波斯亡びてマセドニヤ王アレキサンデルの支配に屬し紀前三三三―三二三。大王死して後百年間は大王の部將より起りて埃及の王となりたるトレミイ家に屬し紀前一九八―一八九〇。爾後は大王の他の部將より起りたるシリヤ王家に屬したり紀前一六七―一六〇。紀元前百七十年頃シリヤ王アンチヲコス、エピフハネースは猶太人の宗教を滅し之を希臘化せんと謀りし爲に謀反して獨立し叛將マカビイ家その君主となり子孫十一代持續したりしが遂に羅馬の干涉を招き紀前六十二年ポムペイアスの爲にエルザレムを陥れられ、爾後羅馬の屬邦となり遂に其の州郡となるに至れり。

猶太の宗教及び文學 希伯來人は科學、若くは、建築、彫刻等に於て文明の爲に寄與する所あらざりき。其の宗教は實に斯の如き有形の美術を發揮せしむることを許さざりしなり。彼等は多く埃及に依頼し又たカルデヤの文明に負ふ所少からず、而して其の工業は多くフィニシヤ人の助力によりて成就せられたり。希伯來人の天職は精神的宗教の上に存し、其の宗教的理想は天下後世文明諸國の模範となるに至れり。其の文學は實に宗教的文學にして聖書の舊約は實に其の

最も純潔なるものなり。近世泰西の文學は之に負ふ所甚だ多し。基督も亦猶太人にして其の宗教の中世及び近世史上に如何なる關係を有するかは猶ほ後編に於て詳説す可し。

非尼士亞人

ファイニシヤはバレスチンの北レバノンの山脈と地中海との間に在り。希臘人は之をフォイニケと稱したり。其意義明白ならず、或は其の名産たる紫色の染具に因みて希臘語のフォイノス(紫)より出でたりと云ひ、或は其の國木たる椰子樹(フォイニクス)に因みて名づけたるなりと云ふ。非尼士亞人は自から其國土をケナオンと稱したり。低地といふ義なり。非尼士亞本部は海濱の狹隘なる平原にして此の平原は長さ二十八哩幅は二哩乃至五哩にして平均僅かに一哩に過ぎず。全土合して長さ百二十哩幅二十哩に過ぎざる可しと云ふ。人民はセミチックにして希伯來人と同種に屬す。然れども希伯來人の如く高尚なる宗教思想なく、粗野なる偶像教を崇信したりしは奇と謂ふ可し。之に反して非尼士亞人は古代に於ける貿易、殖民、アルハベットの傳播、亞弗利加廻航等の大事業を爲して古今文明の上に寄與したる功績甚だ大なりとす。然れども彼等の功勳及

び事蹟は一として彼等自身の紀碑若くは記録によりて傳はるものなく、悉く他國人の傳説若くは説録によりて存するは遺憾なりと謂ふべし。

非尼士亞人の祖先は元來ペルシヤ灣頭の土地に住したりしが希伯來人の祖先よりも早くバレスチンに移り、一部は此地に止まり其餘は海濱に進み、非尼士亞の地を占領したり。タイグリス及びユーフレチース河畔の人民漸やく膨脹して此の現象を生じたるものなる可し。或は埃及國に進入してヒクソスの王朝凡そ紀前五〇一七を建設したる遊牧人種も亦其同類なりしならんと云ふ参照。是時に當りてファイニシヤ人は漁業に従事し、漸次地中海に於て第一の商業國民たるの基を開きつゝありたり。

サイドン希伯來は其の最も舊き都會にして凡そ紀元前千五十年頃までは國中第一の繁盛を極めたり。是頃南の方アスカロン人の爲めに覆され、逃亡したる人民はサイドンの南マイル希伯來に移りしよりマイルはサイドンに代りてファイニシヤの盛都となりたり。希臘の史家ヘロドトス遊歴してマイルに到りしとき、二千三百年を経たる神社ありたり。さればマイルの起原は紀元前二千七百年以前に

あることを知る可し。此の外ベイルト、ビブロス、ツリポリス、及びアラトス等の諸市ありて各、その周囲の地を領し獨立の國家を爲したり。古代の市府的國家とは此の謂にして希臘列國は其の最も發達したるものなりしなり。往々外難迫るの時に際しては其の最強なる市府盟主となりて聯合を組織する事ありと雖どもフィニシヤは遂に地理上の名稱たるに止まり、古來諸市統一せられて政治上の一國を成したるとなし。各市には獨立の王ありて之を治めたりしが僧侶及び貴族の勢力強大にして君主の獨裁政治を許さざりき。サイドン及びタイルは諸市の中に在りて勢力最も強く他の小市は多く其の覇權を承認したり。國中七大市府中古代にはサイドン最も盛にして其藝術は希臘第一の詩人ホーマー謳歌したる所なりき。サイドン人は波斯王ザークシースの時に至る迄航海者として他のフィニシヤ人に勝れたり。

然れども紀元前一千五十年頃より以後タイルは政治上の權力最も強く、是よりフィニシヤの歴史は主としてタイルの歴史となれり。紀元前八百二十四年頃に至るまで二百三十五年間十二王ありて就中第二代ハイラム希伯來ヒラム紀前一〇〇一頃一九六七頃の

時希伯來人の王デビッド及びソロモンと好を通じたり。當時タイル人は既に航海に熟練したりしかばソロモンは彼等の力を假りてタルシ西班牙のタルテメスなる可しと云ふ及びピオフルアラビヤの南部と貿易を通ずることを得たり。タイルは元來海岸の市府なりしが後には附近の島に新タイルを建設したり。ヒラムは橋を架して新舊タイルを連絡せしめ、王宮神殿を以て市府を壯麗ならしめ、又た強固なる城堡を築きて其の防備を嚴ならしめたり。フィニシヤ人は此の時代に於ては全く獨立にして其の商業、殖民、航海に於ける事業最も昌盛を極めたり。

紀元前九世紀の中葉よりして亞西里亞漸次勃興してフィニシヤも遂に之に征服せられたり。紀元前八百五十年頃ヒラム王の系統絶へ内亂を生じ、且つ亞西里亞の威勢を怖れて舊家多く北部亞弗利加に移住し、カーセイジ希臘カルケドンを建設したり。亞西里亞王シャルマニール二世フィニシヤの諸市を征服せしより二百年以上其の屬邦として之に朝貢を納めたり。此間フィニシヤの歴史は斷續して詳かならずと雖もタイルの諸王は屢々亞西里亞に獨立せんことを圖りて遂に其の目的を達すること能はざりき。亞西里亞王サルゴン紀前七〇二がフィニシ

ヤの諸市を平定するや海中のタイルは大陸より通したる水道を切斷せられたるに拘はらず五年間の長圍を受けて屈せざりしと云ふ。

紀元前六百二十五年以後亞西里亞の衰亡するや巴比倫と埃及との競争起りしがタイルは諸市の盟主となりて一時獨立せんとしたりしも紀元前六百八年には埃及王ネコに征服せられたり。時にネコはナイル河と紅海との間に於ける運河疏通の計畫其の目的を達すること能はざりしが故にフィンシヤ人をして遂に亞弗利加を廻航せしめたり。ヘロドトス之を記して曰く

故にフィンシヤ人はエリスレイアン海(紅海)を出發して南海に其航路を進めたり。其の達したる所はリビヤの如何なる部分なりしにもせよ秋は上陸して其の土地に播種し、收穫の時到るを待てり。斯くて二年を経たる後第三年にビルラース、ヲヅ、ハルキュリス(ジブラルタルの海峡)を通過して埃及に歸り來れり而して彼等はリビヤ廻航中太陽を右手即ち北方に見たることを述べたり。是れ他人には信ず可き事ならんかなれども余は信じ難しとする所なり。

亞弗利加廻航の事業は紀元後第十五世紀に於て葡萄牙人が一世紀の間その國力

を擧げて漸やく成功したる所なり。當時前代未聞の大事業として着手せられたるに古人は既に紀元前第七世紀の頃に於て僅々三年間に之を成功したり。但だ葡萄牙人は西より亞弗利加を廻航しフィンシヤ人は東より之を廻航したるの相違あるのみ。而して其の事實として争ふ可からざる證據はリビヤ廻航中太陽を北に望みたりといふ傳説にしてヘロドトスが自から信じ難しとしたる記事即ち是なり。

紀元前百五年巴比倫の大王ネブカデネザルに服従して其の朝貢國となり、同五百九十八年獨立を圖りて國王の爲に攻め圍まるゝこと十三年の久しきに涉れり。紀元前五百三十八年ペルシヤの大王サイロス巴比倫を亡ぼし、フィンシヤも亦た波斯の屬邦となりたり。是に於て波斯は其の海軍を得て波斯の國威を地中海に振ふことを得るに至れり。當時フィンシヤの諸市は幾分か地方自治の權を與へられサスドン、タイル及びアラドスは各王及び諸元老を戴き之をしてツリポリスに會合せしめ、三市共通の事項を協議せしめたり。波斯時代にはサイドン復たひ盟主の位置を有したりしが紀元前第四世紀の中央に市民波斯の知事に反したり。

是に於て波斯王アルタザークシース三世貴族の首領等を死に處せんことを命じたりしかば市民は火を放て全部を焼き其珍寶を灰燼となしたり紀前三。五一。後又た再興せられて紀元前三百三十三年マセドニヤ王アレキサンデル大王に屬したり。是時タイルは大王の強兵を邀へて之と戦ひ、七ヶ月間大王の兵をして南進することを得ざらしめたり紀前三。三二。大王の死後フィニシヤはシリヤ王國に屬したり。又一時埃及のトレミー王家に屬したることあり。斯くの如くフィニシヤ人は政治上に於ては天才薄く且つ帝國を建設せんとするの欲望に缺けたり。希伯來人の王ソロモン神殿を建設するに當りタイルの王ヒラムの助力を謝せんが爲め二十個の市邑を與へんとしたりしに、王は寧ろ之に代へて油、小麥及び其他の産物を請求したり。是の如く海上貿易の利益を專有するを以て満足し更に土地版圖を領有するを欲せざりしものゝ如し。紀元前一千五百年の頃地中海は全く彼等の海にして敢て之と競争し得るものなく北は黒海の東濱カウカソス地方に至り又西はジブラルタルの海峡より大西洋に出で西班牙の西岸に錫を求めて種々なる青銅の器を製造したり。バルチク海の琥珀は獨

逸の山林を通過して伊太利のポー河に達しブリテン島の錫はゴールを経てロンの河口に出で而してフィニシヤ人の船に搭載せられたり。印度の貿易は波斯灣及び紅海の諸港より出入し隊商は貨物を負ふて亞刺比亞及びシリヤの沙漠を横斷したり。又アルメニヤ、アッシリヤ、バビロニヤ及びペルシヤ地方を経て中央亞細亞に交通したり。去れば東方の黄金及び眞珠、タイルの紫色、亞弗利加の奴隸、象牙、獸皮、亞刺比亞の香料、埃及の麻布、西班牙の銀、英國の錫及びホルベ島の鐵は彼等の手を経て東西南北に分配せられたり。是に於て地中海の諸島、北亞弗利加の海岸はフィニシヤ人の市場及び殖民地なり般富なる都會を以て満たさるゝに至れり。又た彼等は西部亞細亞諸國の文明に最も密接の關係を有したり。タイルの王ヒラムは工人を遣り、木材を送りて希伯來人の王ソロモンの事業を助けたるが如く埃及、亞西里亞及び巴比倫の王宮神殿も其の材料をフィニシヤに仰きたり。埃及人は海に習はず故に海軍を有せざりしかば埃及王の水師は必ずフィニシヤ人を要したり。其亞弗利加廻航の事業は餘り時代に先だちて其の結果を利用するこ

と能はざりしのみならず一時全たく世人に忘却せらるゝに至れりと雖も海上の事業として偉大なりしことは二千年後葡萄牙大の成功したる事業に比して優劣あるを見ざるなり。又たニネベ及び巴比倫の諸王も其の波斯灣及び紅海に於ける海上の企業には必らずフェニシヤ人の助力を要したり。波斯王の亞細亞及び歐羅巴に於ける遠征には彼等の船艦を以て其の兵士及び軍用器を運搬せしめたり。ザークシース希臘のを征するや水軍は彼等を以て主となし彼のヘレスポント二重の船橋も彼等によりて始めて成功することを得たり。レノルマン曰く「埃及と亞西里亞とは物質的文明の生誕地なり、カナン人(即ちフェニシヤ人)は其の傳播者なりしなり」と。埃及が外來の遊牧人民に征服せられし頃フェニシヤ人は既に彼の三角州に移住し、或は其の象形文字を得て之を本國に傳へしなる可し。是れ即ち近世アルハベット(字母)の起原にして彼等は之れを希臘人に傳へ之を伊太利人に傳へたり。チュートン人種の古代文字なるルーンといふものも或は黒海の方面よりフェニシヤ人によりて授けられたりしならん。中世に至りてチュートン人は其のルーン字を廢し、羅馬の文字を採用したり。而し

て石器時代に居りたる歐羅巴人はフェニシヤ人より青銅器を得て漸やく文明の曙光に接することを得たり。是の如くセミチク人種希臘人及び羅馬人、古代西班牙人、古代歐洲北部のアルハベット及び亞刺比亞以東印度以西に行はるゝアルハベットは間接直接フェニシヤのアルハベットを基本となすものにして正しくフェニシヤ人の商業上に於ける五大通路に沿ふて分布せられたるものなるが如し。彼等は元來商業的人民にして製造的國民にあらずりと雖ども其の青銅金銀を以て製したる金器は高價なる聲譽を博したり。玻璃の製造は埃及人最も天下に先鞭を着けたりと雖ども通例フェニシヤ人の發明なりと稱せらるゝ程にて種々なる實用品及び裝飾品は之によりて製造せられたり。其他鑛山の採掘、金屬の鑄造、織物の製造に精通したり。レバノンの山は彼等の爲めに船舶の良材を供し地中海の介魚は彼等の爲に紫色の染具を與へ、到る所其名聲を喧傳せらるゝに至れり。希臘人が未だ地中海に勢力を得ざりし頃フェニシヤ人は既に文字度量衡を有し種々なる發明を爲し又は東方より種々なる文明の方法を傳へて之を希臘人に授けたり。希臘人は彼等に倣ひて造船航海の術を學びたり。彼等は北極星を

發見して羅針盤の代用に供したりしが希臘人は北斗星中の赫々たる一光星を以て之に代へたり。紀元前一千百年頃より希臘人起りて其の多島海に入ることを妨げたりしかば益々地中海の西部に向ひ大西洋に進みたり。紀元前七百年頃より同五百年頃に至りてカーセーシ漸やく盛にして母國を凌ぎ西部地中海の商權を吸収したりしかばフェニシヤ人は専ら陸上の貿易に依頼し大に之を擴張することを勉めたり。彼等は希伯來人と同人種なりしに拘はらず宗教上に於ては全たく其の趣きを異にしたり。其の主神として崇拜したるパール及びアシタロテは日月二神を代表し、パールの崇拜には人を犠牲に供して之を祭りたり。又たアネケラといふ淫神ありて少女等は其祭りに節操を犠牲となしたり。是れ太古野蠻時代に廣く行はれたる生殖器崇拜の遺風なる可し。然れどもフェニシヤ人は希臘人及び羅馬人に比すれば偶像を崇拜するの習慣少なく、其の神殿には神像を安置すること稀にしてアシタロテの神は單に圓錐形の石を以て代表せられたり。哲學及び科

紀元前二千年頃より第六世紀まで文明はセミチク人種に存したり。哲學及び科學は巴比倫より文字はフェニシヤより又た宗教は猶太より天下に蔓延して遂に現今歐米文明の要素となるに至れり。

第四章 波斯帝國

馬太人及び波斯人 印度河の西スレイマン山よりメソポタミヤの平原に至る高原をイランといふ。其の西部に馬太人住し、又其の南部には波斯灣に沿ふて波斯人住したり。共にアリアン人種の一派なりしが馬太人は他の人種と雜婚し、頗る波斯人と異なるに至れり。然れども歴史上に於ては必ず其の名を波斯人と併せ稱せらるゝが如く甚だ親密の關係を有したり。

波斯人は遂に西部亞細亞の諸王國を併呑するの運命を有したれども、最初は馬太人の勢力強くして波斯人は之に隸屬したり。而して馬太人が始めて歴史の上に見はれたるは亞西里亞王シャルマヌル二世紀前八五八頃の時なりとす。彼は紀元前八百三十年頃馬太人を征伐したりしが、當時彼等は數多の酋長を戴き勢力微弱にして未だ多く亞西里亞の兵威に抵抗すること能はざりき。紀前七百年頃サルゴン紀前七〇五之れを討ちて其の諸邑を畧取し、此地にイブラエルの人民

を移住せしめたり。爾後亞西里亞の諸王は漸次馬太を蠶食し、亞西里亞王アッシュ
ルベニバル紀前六六八の晩年に至るまで其の屬邦たりしが、是時より獨立して爾
後百五十年間四王世を治めたり。

ヘロドトスによれば此の獨立王朝の始祖はデーラケース原名ダイヤカ紀前七〇八—六五五にし
てエクバタナを建設すといふ。其子フララルテース原名フララルテス紀前六五五—六三三は波斯
を服し亞西里亞と戦ひ、ニネベ城を圍みて之に死す。次王サイアクサリ原名サイアクサリス紀前六三三—五九三は波斯
人と稱せらるゝ野蠻人の侵入に遭ひしも、銳意版圖を擴張して東海、コーカサス山
及び小亞細亞のヘリス河に及びり。巴比倫と同盟してニネベを亡ぼし紀前六〇六其
勢に乗じて小亞細亞全部を征服せんと欲せしがリデヤ王アリアテ原名アリアテス紀前六〇六—五八八三世能く
之と戦ひ六年間勝敗決せず遂に和睦してリデヤ王の女を其子アスタイアチ原名アスタイアチス紀前五八八—五五八ス
に嫁せしめ永久の親交を締結したり。

アスタイアチ希臘アスタイアチス原名イスタチはリデヤ及び巴比倫と親交を保
ち三國同盟の結果、西部亞細亞平和なりしが、紀前五百五十八年南方より波斯起り

其形勢を一變せしめたり。

波斯帝國の創業

波斯帝國の創立者をサイラス希臘キロス原名クルスとい

ふ。ヘロドトスの史によれば彼は馬太王アスタイアチ原名アスタイアチスの孫なり。馬太王そ
の女を屬邦波斯の王カムビゼ原名カムビゼスに娶せしが夢に其女の身躰より葡萄樹發生し
て全亞細亞を蔽ふと見て吉兆に非ずとなし其女の生みたるサイラスを宮臣ハル
バゴスに命じて殺さしむ。ハルバゴスは之を牧人に附して山麓に委棄せしめん
とせしが牧人の妻其子を失ひてサイラスを捨るに忍ひず其死兒を棄て、竊かに
サイラスを救ふ。サイラス長じて十歳に及び遊戯能く衆童を指揮し常人の子に
非ざると發覺しアスタイアチ原名アスタイアチス其實を知りて大に怒りハルバゴスの子を殺し
其肉を煮て之に食はしむるに至る。サイラスは赦されてペルシャに歸りしがハ
ルバゴス竊かに反心を懷きて時期の到るを待てり。サイラス成人するに及びて
ハルバゴスは兎の腹中に一書を入れて之をサイラスに送り兵を擧げて馬太に反
せしむ。爰に於てハスバゴス内應し、アスタイアチ原名アスタイアチス囚となりて馬太遂に亡ぶ。
以上は小説にして其中事實は只だ馬太の屬邦たりし波斯かサイラスによりて獨

立したりといふ一事あるのみ。

バルツ又はバルツといふ名稱を帯びたる人民は紀元前八百五十年頃ザグロス山の地方に住して亞西里亞王に接したること史に見えたり。其の勢力微弱にして數多の酋長に支配せられたり。是れ則ち波斯人ならんといふ。波斯王朝の祖はハカマニシ希臘メネイアと云ひ紀元前六百四十年頃王國を建設す。サイラスは其四世の孫なりといふ。

波斯王サイラス馬太に代りて勢威遠近に振ふ。馬太の親交國リデヤ王クロイソス大に恐れて巴比倫及び埃及と共に波斯を防がんと欲し、兵を進めてヘリス河を渡りカバトキヤに入る。クロイソス兵少なきを以つて首府サルデスを守り、援軍の到るを待つ。サイラス急に攻めて之れを陥れ、王を虜にし其の土地を波斯に合す五紀四前頃サイラスは小亞細亞の西岸に殖民したる希臘人を征服せんが爲に其將ハルバゴスを遣して自ら東に還り巴比倫を討ち遂に之を陥る五紀三前。サイラスは在位二十九年間英邁の資を以て四方を征略し大帝國を建設し其の版圖は東はインダス河より西は小亞細亞の海岸に達し、北は裏海より南は波斯灣に達した

り。紀元前五百二十九年彼はアラル海濱の野蠻人を征して爾後二百年間波斯の北邊に患なからしめたり。然れとも王は此戰役に討死したり。王の墓は今猶ほ波斯の舊都バサルゲデイに在りと云ふ。王は東西を征伐し攻城野戰に長したり。然れとも其性宏量にして殘暴ならず祖父アスタイチスを釋して之を敬し、又たりテヤ王クロイソスを其の顧問となしたりと言ひ傳ふるが如き其の品格の雄武にして且つ寛大なりしことを知るに足れり。波斯人が彼れを國民の父と稱したりしこと誠に故ありといふ可し。

サイラス二子あり。長をカムビセースと云ひ次をスマーデイスといふ。長子カムビセース原名カム立つ。治世七年紀前五二九—五二二。カムビセースの才はサイラスに及ばざりしも勇は父に劣らず、而して更に彼よりも遠大なる侵略の事業に着手したり。サイラスの遠征は亞細亞に止まりたり。然るにカムビセースは亞弗利加を波斯の版圖に加へんと欲し紀前五百二十七年埃及を攻めメムフェイスを畧しナイル河を溯りてシーブスに至る。此處より兵五万を遣りてリビヤの沙漠中にある膏腴の地アンモンを征せしめしにシムーンと稱する熱風に遇ひ

て全軍覆没し一人も生きて還りし者なかりき。

當時カムビセースは使節をエシヲビヤに遣して其の服従を求めたり。エシヲビヤ人は弓を贈り且つ謂て曰くペルシヤの弓手能くこの弓を彎くの時始めてエシヲビヤ人と戦ふことを得んと。王怒りて直に兵を動かし其の傲慢無禮を責めんと欲したりしがエシヲビヤ人の勇敢よりも寧ろヌビヤの沙漠を憚りて遂に此の遠征を中止したり。

カムビセースは計畫の失敗により埃及人が之に乗して窃かに反を謀らんことを恐れ頗ふる埃及人を虐待するに至れり。ヘロドトスによれば王は特に埃及の僧徒を窘しめ自から神牛を刺殺して其肉を犬に啖はしめたりと云ふ。然れども近時発見の碑文は神牛が自然の死を遂げカムビセースは慣例の葬式を行はしめたる事實を證明したり。王は無限に帝國の版圖を擴張せんとしたりしもアンモン及びエシヲビヤの遠征は天然の勢力に制せられて失敗し西の方カルセーデを討たんとしたりしも其の計畫はペルシヤの爲に船艦を供すべきフィニシヤ人が其の同種族たるを以て従はざりしが故に實行するに由なく海陸ともに帝國の版圖

を制限するの止むを得ざるに至り遂に軍をかへすことゝはなりぬ。然れども王は大にサイラスの帝國を膨脹せしむることを得たり。西部亞細亞の爲に累代の患をなしたりしバロの帝國は波斯の一州となり波斯の眼中には最も惡む可き埃及の偶像教も純粹なるゾロアスター教の下に屈服し而して亞刺比亞の野蠻人も波斯の大王に敬禮を表したり。

然れども埃及遠征中王は其性質一變して專恣濫行の人となれり。是より先き王はサイラスの天稟を受けたる弟スマーデイス希臘名稱なり。原音バルジャ。を殺したり。然るに其の專横によりて民心漸やく離散したりしかば從來波斯人の爲に制せられたる馬太人の一黨は此機會を利用して政權を専らにせんとを企てたり。カムビセースは平素波斯の貴族を制せん爲に馬太人なる一僧侶に非常の權力を賦與し宮廷の行政を託したりしに是に於て彼は謀叛して其の弟ガウマタが大王の亡弟スマーデイスに似たるを以て之を眞のスマーデイスと稱し王位を僭せしめたり。紀前五百二十二年カムビセースは埃及より歸途に於て其報に接し憤懣して死したりしかば僭主は愈々人民の信仰する所となり遂に帝國の首府を再び馬太に還すに

至れり。

當時波斯には二個の反對なる宗教行はれたり。一はゾロアスター教にして純然たる善神アウラマズダを拜し他はマデアニズムとて拜火教を信じたり。以上の變動は即ち専ら馬太人の間に行はれたる拜火教徒の所爲に出て僞主は七ヶ月の間其位に在るとを得たりしが波斯の貴族等は容易に此の状態に服従すべくもあらず、サイラス王家の一族ヒスタスビース原音ダシブスの子デイイアス他の六大貴族と結合して僞主を誅し、中興の偉業を成就したり。

波斯帝國の組織

デライアス一世希臘紀前五二一—原音ダラは先づマデア教の僧侶を誅しゾロアスター教を恢復し拜火教徒の爲に破毀せられたる神殿を再建し以てアウラマズダの神恩に酬ひ大略五年間にして一時瓦解せんとしたる帝國諸州の叛亂を鎮靜することを得たり。是より後王は専ら平和の政策を實行し、スーサに王宮を建築し又たパーセポリスにも偉大なる建築を造營し、帝國の組織を完成し、スーサを中心として驛路を設け、全國の貨幣制度を確定し、波斯帝國第二の創立者と稱せらるゝに至れり。

波斯帝國の版圖は南北に於ては既に天然の制限ありて之を進めんとするは得策に非ざりき。北方には薄情なる荒野ありて蠻人之に住し、サイラスも其の生命を犠牲となして漸やく北邊の治安を保つことを得たり。南方には亞弗利加及び亞刺比亞の沙漠ありて炎熱焼くが如くカムビセスは五万の兵を其の熱沙の中に葬り去れり。但だ東方には印度の沃野大王の來るを待つが如く又た西方には歐羅巴の大陸ありてボスフォロス及びヘレスポントの海峡横はり其兩岸は接近して東西相呼應し而かも東方諸帝王の兵馬未だ嘗て侵入せざる所なりき。デライアスは此二方面に向て帝國の境域を進張せんと欲し、先づ海上よりインドス河邊及び希臘沿海の事情を探検せしめたり。而して印度の西北部パンジャブの地方は一撃の下に波斯の版圖に歸し、帝國の諸州中最も富豊なる財源となれり。紀元前五百十三年の頃デライアスはボスフォロスの海峡に船橋を設けて七十万の兵を亞細亞より歐羅巴に渡らしめ次にダニユープ河をも同様の船橋にて渡り深く野蠻なるシ、リヤ人の地に進入したり。彼等は二千年の後露西亞人が佛帝ナポレオン第一世の大軍に向て施行したると同様の兵法を用ひ波斯の軍進むに

隨て野戰を避け井を埋め其他一切敵の便益となる可きものを破壊し内地に退きたり。デライアスのダニユーブ河を渡るや二ヶ月間船橋を存すべきを命じ若し二ヶ月の後歸り來らざるときは他の路より波斯に還るべきことを豫告したり。然るにデライアスは二ヶ月を経て遂に歸り來らざりしが船橋は幸にして尙ほ存したり。彼は以上の困難に遭逢して征討の目的を達する能はず、又た他の道路によりて歸國すること能はずして空しく舊路に由りダニユーブを渡りて小亞細亞に歸ることを得たり。此の遠征の結果としてスレースは波斯帝國の一部分となり、マセドニヤ王國も亦た朝貢を獻ずることとなりたり。是れ波斯帝國が歐羅巴を征服せんとするの端緒にして亞細亞と歐羅巴との間に大衝突を生ずる遠因とこそ知られたり。

紀元前五百年に小亞細亞のアイヲニヤ叛す。希臘本部のアゼンス之を助けたりしも數年にしてアイヲニヤは鎮定せり。是に於てデライアスは女婿マルドニヲスをして希臘本部を討たしめたり。然るに陸兵はスレースの蠻人に窘められ、舟師はアトスの岬に於て暴風に遭ひ破碎せられたり紀前四〇九二。二年の後デライアス

は更に兵十二万を發し直にエヂアン海を越へてアゼンスを討たんと欲し、兵をマラソンに上陸せしめたり。アゼンスの名將ミルタイアデース之を邀へて大に波斯の軍を敗る紀前四八六。是に於てデライアス怒りて全帝國の兵を催し自ら兵を指揮して希臘を討たんと計畫中偶々埃及に叛亂起り且つデライアス遽かに崩じて後事は其子ザークシース一世希臘クセルクセースに遺託せられたり紀前四八六。英邁なるデライアス自から希臘を征討したりしならんには希臘の運命未だ知る可からざりしも、希臘の爲には幸なる哉、暗弱の君主位に就き遂に希臘をして歴史上に一大光彩を放たしむるに至れり。

デライアスは天性守成の明君にしてサイラスの創業を完備し波斯の帝國を組織したる人なり。彼はカムビセスに従て埃及に赴き、遠征の危険なることを知り、埃及が屢々變亂を経て猶ほ其の統一を維持したる所以を看破し、而して馬太帝國の容易に顛覆せられたるは其の組織の散漫にして内部に真正の統一存せざりし事實にあることを認識したり。デライアス以前には波斯の帝國も亦た之と同様にして種々なる國土及び人民を結合し更に内部の一致なく、數多の屬邦は朝貢を

献じ戦時に兵員を出すのみにして土着の王を戴き、從來の國政を行ふことを許されたり。是を以て屬邦は動もすれば土着の王を奉して獨立を謀り、亞西里亞及び巴比倫帝國の如き世として叛亂絶ゆるとなかりき。デライアス一世は彼の亞西里亞王デ格拉斯ピレザー二世紀前七四五—七二七が成就せんと欲して成功せざりし統一の計畫を實成し、歴史上に於て始めて中央集權制をして政治上の事實たらしめたり。**波斯と希臘との交戦** ザークシース一世原名クシアヤルシヤ 紀前四八五—四六五はデライアス登位後の子なりしが故に兄を超えて其の位に即きたり。先づ在位第二年に埃及の争亂を討平し又たバビロニアの謀反をも嚴罰して愈々波斯帝國の鞏固なることを證明したり。是に於て在位の第三年に帝國諸州の大守及武將を召集し希臘征討の謀議を決し、其の結果として歐羅巴全土を席卷するの目的を決定したり。爾後四年の間西は地中海の沿岸より東はインドス河邊の州郡に至る迄北より南より帝國の人民となりたる萬邦の諸人種より悉く兵員貨物を徵發し海濱の諸國民よりは地中海に未だ嘗て見ざる所の大艦隊を編制せしめ、フイニシヤ人及び埃及人にはヘレスポントの海峡に二重の船橋を架設せしめ、又先年マルドニアスの

舟師を破碎したる難海の風波を避けんが爲めアトスの岬と大陸との間に運河を疏通し、海軍をして彼の岬を廻航するの必要なからしめ紀元前四百八十一年の秋ザークシース自ら小亞細亞サルデースに軍兵を聚め、同四百八十年の春ヘレスポントに向つて進發したり。大軍船橋を渡るに七日七夜を要し、スレイスのドリスコスに於て兵を檢せしに陸兵は四十六ヶ國の民族より成立し、ヘロドトスに従へば歩兵百七十萬人、戰車及び駱駝二萬、馬四八萬、海軍は三ツライム艘船の兩側に三階の長架を設け架階に水夫を坐せしめたる戰艦一千二百七艘、小船三千艘、兵員五十一萬七千六百十人、而して此の奴隸従者及糧食を運搬せしむる水夫等亦た同數ありて總計五百萬以上の人員潮の湧くが如く亞細亞より歐羅巴に押し寄せたり。スレイスは既に波斯の版圖にしてマセドニヤは其の朝貢國たりき。沿道の河水は人馬の爲に飲み盡され、途上の市邑は軍隊の爲めに一食を供して破産したるものありといふ。北部希臘は風を望んで敢て抗するものなく、ザークシースはセルモビレーに於てスバルタ王レヲニダス及び其の小勢を塵にし直に進んでアセンスを陥れ之を破壊せしめたり。然るにアセンスの名將セミストクレース希臘の船艦を列ねてサラミス灣に

戦ひ大に波斯の水軍を破りしかば、ザークシース大に恐れて征戰の事をマルドニ
ヲスに委任し亞細亞に歸り去りたり。是より希臘の戰爭遂に波斯の敗軍となり、
希臘大に興り波斯漸やく衰ふ。其の顛末の詳細は第二編に於て希臘の記事と共
に叙説す可し。

波斯帝國の衰亡

歸來ザークセースは恢復の志なく唯だスーサの都に在
りて遊惰に耽り新なる快樂を發明する者に高價なる賞與を授け淫亂暴行増長し
て遂に親衛兵の長アルタペーナス及び宮臣の爲めに弑せられたり紀前四〇五。皇太
子デライアスも亦た殺され、少子アルタザークシース一世紀前四四六五位に即く。
彼はアセンス人の煽動によりて起りたる埃及の謀叛を鎮定し頗ふる興國の志あ
りしも紀前四百四十九年サイプラス島の海戰波斯に利あらずして遂にヘレスポ
ントの海峡より小亞細亞の西南リシヤのファセリスに至るまで希臘諸市の獨立
を承諾したり。紀元前四百二十五年アルタザークシース二世死し、其子ザークシ
ース二世立つ。在位四十五日にして異母弟ソグデアイアノス彼を弑し其位を奪ふ。
然るに他の異母弟ヲコスハ埃及およびアルメニヤの總督等と共に叛きて王を廢

し之を死に處し而して自から位に登りデライアス二世と稱したり。

デライアス二世紀元四〇五は在位十九年奸惡なる皇后バリサチスに制せられて
國政舉らず、叛亂相踵ぎデライアス一世が分畫したる文武の官又た同一の人に歸
し、一總督にして二三州を兼併し、父子相傳へ、漸やく獨立の形勢を現出するに至れ
り。馬太及びリヂヤの叛亂は鎮靜したれども埃及は遼遠にして凡そ六十年間そ
の獨立を維持することを得たり紀前四〇五。然るに希臘に於てはスバルタ及び
アセンスの嫉妬よりしてペロポネーサス戰爭紀前四〇三の爲に波斯を顧みる
に違あらず、小亞細亞の希臘諸市悉く波斯の主權に歸し、スバルタは遂に波斯と同
盟の約を締結したり。

アルタザークシース二世紀前四〇五はデライアス二世の子にして記憶人に超絶
したり。弟サイラス權を争ひ一万の希臘兵を雇ひ王位を奪はんと欲す紀元前四
百一年。四
キナクサ巴比倫の近傍の戰に於て希臘の兵は勝利を得たれども元帥サイラス戰死し、希
臘の兵は死地に陥りたり。然るに勇將ゼノフラン原名クセ敵國を通過し兵を全
うして難なく歸ることを得たり紀前四〇四。是より波斯帝國薄弱の實狀益々希臘人

の眼中に明白となりたり。然れども波斯は希臘内部の紛争に乗じて更にスバル
 タと和約を結び亞細亞の諸市に對して主權を有するのみならず、希臘本部の上
 も殆んど盟主たるの位置を得たり。スバルタの將アンタルキダスの手に成りた
 るを以て之をアンタルキダスの和約と稱す紀前三〇八七。是の如く希臘に於ける外交
 政策は大に成功したるに拘らず、波斯の國勢は日に衰へ叛亂屢々起り、埃及を征服
 せんとせしも全く失敗に屬したり紀前三〇七六。

アルタザークシース三世紀前三三六二は前王の少子にして殘虐なれども活潑有爲
 の資性を有したり。其の位に即くや長兄を殺し、次兄は自殺し、彼の外、王統殆んど
 盡き更に位を争ふ者なからしめたり。處々の謀反を平定し又た埃及を征服した
 り。メントル及バゴアス等の名相之を輔佐し、王の在位中最後の六年間は波斯史
 上の光明なる時期なりき。然れどもバゴアス遂に王を弑し、王の少子アルセース
 をして位を襲はしめたり。在位二年紀前三三三八の後バゴアスは又た王を弑し、デ
 ライアス二世の孫デライアス、コドマンノスを擁立したり。之をデライアス三世
 と爲す紀前三三三〇。彼は先づバゴアスを誅して位に登り、賢明善良の人主なりし

が是より先きマセドニヤに英傑の王フィリップ起り希臘を統一して波斯を滅す
 るの志ありき。紀元前三百三十六年彼は刺客の爲めに殺されたりしも、更に英邁
 不世出のアレキサンデル大王位に即き、同三百三十四年兵三萬五千を率ゐてヘレ
 スポントを渡りグラナイカスの一戦によりて悉く小亞細亞を征服す。波斯の大
 勢既に去りて亦支持すべからず。同三百三十三年イツソスの戦及び同三百三十
 一年アルベラの戦にて波斯の兵悉く敗績しデライアス三世は馬太に遁れ更に北
 に走りて遂に部下の一貴族に弑せられ波斯の版圖悉く歴山大王の有となれり。
 是れ紀前四百八十年ザークシース希臘遠征の復讐にして百六十年間に涉りたる
 波斯及び希臘の衝突終結し希臘も波斯も俱にマセドニヤ帝國の一部分となり、歴
 史上に於て一大新紀元を開くに至れり。

波斯は紀元前二百五十年までシリヤ王國に屬したりしが此時韃靼種のバルシャ
 人獨立してアルサケース一世王となり。バルシャ王國を建設し紀元後二百二十
 六年まで持續したり。紀元後二百二十六年波斯人獨立してバルシャ王國を倒し
 新波斯帝國紀元後二二六を建設したり。此間をサツサニデイ朝の時代と稱す。

此時遂に亞刺比亞人の爲に征服せられ今に土耳其と共に肩を比べて西部亞細亞に於ける回教國の一なりとす。

馬太及び波斯諸王年表

第一馬太諸王

紀元前	希臘名稱	原名	在位年月
七〇八	テイオケース	ダーヤウカ	五三
六五五	フラオルテース	ラソルチス	二二
六三三	キアクサレース(英、サイアクサリース)	ウソークサツラ	四〇
五九三	アスチアケース(英、アスタイアジース)	イスチウエカ	三五
第二波斯諸王			
五五八	キロス(英、サイラス)	クルス	二九
五二九	カムピセース	カムプシヤ	七
五二二	ボマテース	ガウマタ	八月
五二一	ダライオス一世(英、ダライアス)	ダラヤウス	三三
四八六	クセルクセース(英、ザークシース)	クシアヤルシヤ	二一
四六五	アルタクセルクセース(英、アルタザークシース)	アルタクシヤツラ	二〇

四二五	クセルクセース二世(ザークシース二世)	クシアヤルシヤ二世	四五日
四二五	セキデアノス	不詳	六月一日
四二四	ダライチス二世	ダリヤアウシ二世	一九
四〇五	アルタクセルクセース二世	アルタクシヤツラ二世	四六
三五九	アルタクセルクセース三世	アルタクシヤツラ三世	二一
三三八	アテルセース	アルシヤ(?)	二
三三六	ダライチス三世	ダラヤウス三世	六

文明概略

第一政治 亞西里亞及び巴比倫に於けるが如く波斯國王は人民の生命財産及び自由に對して生殺與奪の全權を掌握したり。但し國王と雖ども其の最も下賤なる臣民と同じく一國の習慣によりて制限せられたり。之を外にしては君主の意志は無制限なりき。其の命令を發するや一たび發して後は君主と雖ども自ら之を撤回することを得ず、故に凡を變更しがたきことは世に之を馬太人及び波斯人の法律の如しといふ諺を生じたり。君主は即ち國家にして單に國君たるのみならず、土地及び人民の所有主たりき。

國王の次に七貴族あり、其一は皇族にして之をアケイメニデイと稱したり。王妃は必ず他の六貴族より撰まる可き法規なりき。七貴族は宮臣の紹介を要せずして王に謁し隨意に其室に出入し國事に關して建言することを得たり。

波斯人は本と遊牧の人民にして其の社會は族制々度なりき。十種類ありて各々其の位置及び生活を異にし、其中三種は貴族他の三種は農業に従事し他の四種は依然牧業に従事したり。族制々度はデライアス一世の時まで社會組織の基本たりき。

デライアス一世は數多の意義に於て波斯帝國を組織したり。第一、皇居を一定の土地に置きて遊牧人民の習慣を改め鞏固なる社會制度を建設したり。サイラス及びカムビセスは常に戰陣を事として一定の地に住せざりしがデライアスの時よりスーサは専ら帝國の首府と定められたり。但し巴比倫は冬の皇居にしてエクバタナは夏の皇居なりき。

デライアスに到りて帝國內部の組織大に整頓したるは彼が帝國を諸州に分ち一定の租税を徵收したる事實に存したり。大帝國の組織に於て最も必要なるは國

内區劃の制度にして是れ擅制政治に在りては中央君主の意志を人民の全階級に傳達せしむる唯一の方便なりとす。デライアスは全帝國を二十餘州に分ち各州に知事を置き之をサツラップと稱したり。是より先きサイラスは其の征服したる諸國に土着の王を存したりしがデライアスは之を廢して各州に其の信任する知事を配置したり。是等の知事は固より君主の隨意に任免する所にして始めて中央集權の政治を見ることを得たり。

サツラップ制度は現今土耳其又は支那帝國に行はるゝ總督政治に似たりしならん波斯帝國以前馬太も亦た稍々之に類したる地方政治を有したり。ヘロドトス曰く、

馬太人は波斯人と同じく自から世界第一の人民と視做し、土地の遠近に隨つて他の國民の價値を定め最も遼遠の地に居る人民を輕視したり。其の治下に在りて諸國民は相互の上に置かれたり。馬太人は全國の人民特に彼等に接近したる國民の支配者となり、又た彼等に接近したる國民は其の隣國の人民を支配し彼等は又た其次の土地に住する人民を支配したり。

而して其の制度はサツラップ制にして馬太外の諸州には馬太人を以て其のサツラップとなしたり。蓋し其の州制は單に諸國民を分類したるのみにして遼遠の地に
ある州知事は漸次馬太に接近したる地方の州知事に朝貢を傳達し以て馬太本部
に輸送するのみに過ぎざりしならん。

デライアスに依て組織せられたるサツラップ制は最も完備したる制度にして他の
同類に屬する制度に勝れるは其文武の二職を分離せしめたる點に存したり。元
來波斯人の思想によれば國王は帝國の安寧を保維し、又た之に善政を施すの二重
義務を有する者にして第一の目的を達する爲に鎮臺は全帝國に設置せられ、又た
第二の目的を達する爲に文官は任命せられたり。ゼノフラン前三四頁參照紀元
一至希に從へばサイラスは其の征服したる諸國に鎮臺及び司令官を置きて單
に其地方の安寧を保維することのみを命じ、又た別にサツラップとて人民を治め貢
税を徵する官吏に任命したり。然れどもサイラスは猶ほ土着の王を存し、又た各
地の貢税もデライアスの時に至るまで年々一定の制度によらざりしが、此王の時
より各州は定額の税を納むることとなりたり。然れども各州知事は此の定額を

徵收したる後更に人民より自己の位置を保つに必要なる税を徵收したり。され
ば其の税額は往々專横にして人民の苦痛少からざりしと雖ども中央政府は各州
知事に於て年々定額の貢税を中央に納むるときは其他を問はざりき。帝政衰微
するに隨ひ一人にして司令官と州知事の權を兼併し、且つ同時に數州の總督たる
ものありて漸次帝國分裂の禍を醸すに至れり。

各州知事の謀叛を豫防せんが爲め各州には王の耳目と稱せらるゝ官吏ありて知
事の一行一爲を中央政府に報道したり。反逆の嫌疑を受けたる知事は直に死に
處せらるゝの規定にして知事の衛兵に命令を傳へ之を施行せしめたり。又た諸
州は何時にても不意に王若くは視察官巡回することありて知事の責任を問ひ、人
民の訴願を聽きたり。

首府のスピーサに於ては毎日王宮にて食を賜與せらるゝもの一千五百人ありたり。
國王巡回の節是等の朝臣を伴ふが故に貧困なる諸州は其の爲に饑饉を生ずるの
恐れあるを以て波斯王の巡回は多く富有の諸州に止まれり。朝廷の下級なる官
吏は物品にて俸給を受け重臣等は帝國の市邑を領し其の收入を以て俸給と爲し

たり。又た市邑のみならず、土地及び家屋を與へて俸給の代用を爲さしめたり。是の如き賜與は官吏死すれば復たび君主に歸し、君主は更に新官吏に賦與するの規則なりしが、官職も漸次世襲となるに及び之に附屬したる収入も亦た同様の規定に従ふの習慣を生じたり。金銀の朝貢もありしかねれども、此は多く君主の私用に供せられ、公用は文武ともに物品若くは収入を與へて其の報酬となしたり。ドライアス一世は始めて貨幣を鑄造し、重要な金銀の鑄造貨幣は王の名に因りてダリクと稱せられたり。

各州知事の各州にあるや、波斯王の全帝國に於けると同様の位置に立ち、又た同様の方法にて其の財政を整理したり。又た各州に於ける兵隊は其の在營する各州により扶持せられたり。ヘロドトス曰く、

蓋し希臘人の間に在りては、雇兵が貨幣にて拂はるゝが如く、王の兵卒は食物を以て拂はれたり。波斯の貴族又た諸市諸州の知事、家庭に於ても同様なりとす。

第二、宗教

波斯の君主は無限の權勢を有したりと雖とも、習慣の爲に其の權勢

を制限せられたり。抑も習慣は何故に斯の如く、有力なるかと云ふに、古代に於ては習慣は即ち法律の効力を有し、其實神意に基つくものなりと思考せられたり。

故に古代壓制君主の權力は實際宗教によりて制限せられたること、恰かも近世の君主制に憲法を設けて君主の專横を防制するに異ならず。

波斯の古典をゼンダヴェスタと云ふ。寧ろアヴェスタ、ゼンドと云ふを正確なりとす。アヴェスタは經の義なり。ゼンドは譯解の義なり。而して其の教義の祖師をゾロアスターといふ。元來文字に記載せられず、口傳によりて存したり。

凡べて古代の經書たる印度の維陀書の如き、猶太の法典タルマツドの如き、回々教の傳經スナナの如き、又たホーマーの詩の如き、何れも久しく口碑によりて存したり。ゾロアスターは波斯の聖人にして、凡そ紀元一千年前の人なりと云ふ。彼は孔子が堯舜の時代を理想として支那を改革せんと試みたるか如く、イラン古代の明君ジユムシッドの治世を黄金時代として之を理想に掲げたり。

ジユムシッドは彼れの人民の父にして、日光に照されたる人の中に、最も光榮ある者なり。彼れの世には動物死亡せず、水或は草木或は人類の食に適する動物

乏しきことあらざりき。彼れが治世の光澤中にありては魔神の所業に屬する霜や炎熱、死亡又た制し難き情慾あらざりき。人民の父たるデユムシッドの治世中成年の人は十五歳の容貌を保ち小兒は安全にして成長したり。

是の如き先王の道を恢復し以て國民の風俗を改革するはゾロアスターの目的なりき。彼れはアリヤン人種に於ける多神教の信仰に反對して一神教の傾向を創始したる者なり。是より亞細亞のアリヤン人種中に二派を生じ、一は印度に於けるブラマ教となり、他は波斯に於けるゾロアスター教となりしならん。ゾロアスターは羅句語の轉訛にして原名は寧ろザラツスツラといふ方正確ならん。波斯人及現今のバルシイ教徒、拜火教徒は之を變化してゼルデユシトといふに至れり。ゾロアスターの説教によれば宇宙には光明と暗黒との對立するありて光明の世界にはアウラマズダ又はラルマズドの神支配を爲して凡べて善の基本となり、暗黒の世界にはアիրリマン支配を爲して凡べて物質上及び道德上に於ける惡の根源となれり。萬物一として或は光明の神に屬し或は暗黒の神に屬せざるはなし清潔なる人間及び清潔なる動植物は前者の創造に係り、不潔なる人間及び不潔な

る動植物は後者の創造に係れり。太古より以上の二神は相争ひ現今は其の勝敗未だ知る可からすと雖ども將來に方てはアウラマズダはアիրリマンに勝ち、善獨り存して惡は亡ぶ可しと云ふに在り。故に人間の義務は惡神アիրリマンに反して善神アウラマズダの業を贊助するに在り。凡そ人たるものは自己の胸中に於て一切の惡を斷ち、荒野を開拓して良田となし、又た惡神の造りたる不潔の動物、蛙、蝦、蟻、蛇、蜥蜴の類を夷けざるへからず。凡そ空中に住む動物又た樹木及び農作を害する動物を殺すは人間の功德にして農業は神聖なる職業とせられたり。是等は則ち善人の爲す可き所なりとす。之に反して惡人とは自己の心中にある不徳及び情慾を制せず、有害の植物を夷げず、又土地を開きて惡神の支配を脱せしめざる者なり。生命、良土、清水、河泉、牧野、貴金屬、眞實及び清潔の行爲は凡べてアウラマズダより出て、疾病、死亡、沙漠、寒冷、汚穢、罪惡及び詐僞はアիրリマンより出づ。死後善人及び惡人の靈魂は狹隘なる橋を渡らざる可らず。善人の靈魂は安全に之を通過してアウラマズダの前に出ることを得、惡人の靈魂は必ず橋より落ちてアիրリマンの住所なる禍の谷に没す。

以上はゾロアスター教の大要なり。此の教義を擁護するの任務は僧侶の階級に委ねられたり。波斯語にては僧侶をマグ又はモグと言へり。亞西里亞學の證明する所によれば元來アッケデヤ語にては僧侶の階級をイムガと稱したり。高貴の義にしてセミチク語に轉化し遂に希臘語のマゴスとなり、英語にては之をメイジヤイと稱するに至りたり。彼等は宗教上の公式を掌どりしのみならず、又た當時の學問を保存するとを職務となしたるは埃及の僧侶に異なるとなし。然れどもゾロアスターは此の階級の創立者といふにあらず、寧ろ此の階級の改革者なりといふを以て適當なりとす。

二元主義の宗教が此の地方に起りしことは多少その土地の形勢の然らしめたる所なりと言ふことを得べし。ゾロアスターは遊牧人種と境を接し、常に野蠻社會と文明社會との反對を目撃したり。一はチュランにて暗黒の國なり、波斯の原名アイリマンの支配に屬する所なり。其の南にあるは即ちイランにして光明の國なり、アウラマズダの支配に屬する所なり。且つ波斯の氣候も亦た此の觀念を養成するに適應したり。冬は寒威凜烈にして次に鮮明なる陽春の候となり、而して頓に

炎熱激甚たる夏節に變す。且つ草野と沙漠と互に交換して善惡二元の理を顯はせり。馬太にてはアウラマズダは人類に福する神なれば崇拜するに及ばずとなし、アイリマンは人を害せんとするものなればとて専ら之を崇拜したり。

ゾロアスターの宗教は其の以前より馬太及び波斯地方に行はれたる古代の宗教と混淆して深く其の影響を蒙りたり。此地方の土人は太古より火、風、土、水の四元素を神聖として之を崇拜したり。埃及に於ける動物崇拜、カルデヤに於ける天體崇拜と共に天然宗教の一種なりとす。世に之をマジアニズムと稱す。是れ前述のマグ又はモグなる僧侶階級は元來此の宗教の祭司たりしが故なり。此の宗教は四元素を崇拜するのみにて他の神なく、又た神殿及び偶像を用ひず。唯だ火は元素中の最も神秘にして有力なるものなるが故に特に之を神聖視し、山頂に壇を設け壇上常に火を燃やし僧侶之を監して年々歳々消ゆることなからしめたり。人にて天より降りたる火なりと信じたり。氣息を以て壇上の火を吹くは神を瀆すの罪にして死に當り死躰を焼くとも亦た同様の重罪とせられたり。火に亞ぎて最も崇まれたるは水なり。河、湖、泉等に犠牲を供して之を祭りたり。但し一滴

にても血を水中に流して神を瀆することを許さず。河流に汚物を投じ、又た手を濯ふことも禁止せられたり。又た土を崇拜するが故に之れに犠牲を供し、土葬を禁止したり。是の如く元素崇拜の結果は死者を葬むることに關して奇怪なる習慣を生じたり。火葬は火を瀆し、土葬は土を瀆し、水葬は水を瀆し、塚中に葬むることも亦た風を瀆す。波斯に屬したるバティアンスといふ野蠻人は人をして自然の死を遂げしむることなく、男子病に罹りて危篤なるときは他の男子之を殺して其肉を食ひ、婦人は同様に他の婦人之を殺して其肉を食ひ、又老人は犠牲として神に供したる後之れを食ひたりと云へり。イラン人は既に開化して是の如き蠻習を脱したるが故に死體は葬らずして他の動物に啖はしめたり。死後正式の葬儀は死躰を山巔若くは沙漠の如き地に委棄して禽獸の食餌となすの習慣にして僧侶ハイハイは自から此式を遵守し、又た人にも此式に従はんことを勧めたり。然れども人情忍ぶ能はざりしが爲に此の正式の外に變則を設けて先づ死躰に蠟を塗り、直に土に觸るゝことなからしめ、以て土中に葬むることを許したり。是の如く二元主義の宗教は元素崇拜の教義と相合したるに拘はらず、ゾロアスタ

一教の精神存したるが爲に波斯の宗教は遂に全く偶像教となることなく、彼の猶太教を除くの外古代にありては最も純正なる一神教なりき。故に波斯人と猶太人との間に宗教上親密の同情存し、巴比倫に移住を命ぜられたる猶太人民はサィラス、巴比倫を亡ぼして後再び國に歸ることを許されたり。ザークシースが希臘を討つに當りて希臘の神殿を燒きたるも大に希臘人の偶像を崇拜することを惡みたるが故なり。是の如く古代に於て波斯の興起したるは其の宗教的側面に於ては大に中世アラビヤ人の蔓延に似たる所ありき。波斯はアレキサンデル大王に滅され、其後又蠻族バルシヤ人の爲に支配されたりしかどもゾロアスター教は依然として其の位置を維持したり。中世に到りてアラビヤ人波斯を征服し、マホメット教を強行したりしかば是よりゾロアスター教は驅逐せられて印度に入り、現にグゼラット及びボムベイ地方にパーシー教徒と稱する者あり。即ち拜火教徒にして今に猶ほ死躰を鳥に食はしむるの習慣を行へり。拜火教は近時人類學の進歩によりて其の眞意義を發揮するを得たり。火は萬物の中にて最も不思議なるのみならず、人類が今日の開明に達するを得たるは火の

恩澤によることを知る可し。人類は初め人為的に火を生ぜしむるの術を知らず、或は火山より或は雷火より之を採取し、唯だ保存するを以て唯一の秘術となしたり。當初火は食物を煮る爲に非ずして寒を防ぎ猛獸の難を脱する爲に用ひられ、人類は火を有するに及んで如何なる土地にも住居することを得るに至れり。抑も人為的に火を作ることを得るに至りたるは人類史上の一大進歩にして最初は之れを保存することを勉めたりといふ。拜火教は此の事實の紀念を今に存するものなり。而して此の事實の痕跡は波斯のみならず、天下到る所に於て追求するに難からざる可し。

第三、文藝。波斯の青年は讀書を學びたれども、智育は疎にして専ら武藝を尙ひたり。ヘロドトス曰く、波斯の青年は三事を教へられたり、而して唯だ三事のみを教へられたり。馬に乗り、弓を引き、又た眞實を言ふこと是なりと。其の訓練は五歳より始まり、日出前に起き、競走、投石、弓術、投槍等の武藝を習ひ、長途の進行、風雨其他氣候の變化に馴れ、又た露宿して睡眠する事等を學びたり。飢餓に堪へしめんが爲に二日に一食のみを與へらるゝことあり。但し波斯人は元來一日一食を規則

となしたり。七歳にして馬術、獵獸、又た馬を飛ばしつゝ、弓をひき、槍を投ることを學び十五歳にして武士たることを得たり。

文字は楕形文字を用ひたり。然れども亞西里亞の楕形文字に比すれば波斯の楕形文字は極めて簡單なりき。波斯人は三十六字を以て一切の音を言ひ顯はし、左より右に書する方法を用ひたり。公文の材料には天然の巖石を用ひ、私書には獸皮を用ひたり。現今の波斯にては波斯語、土耳其語及び亞刺比亞語を兼用するが如く、昔時の波斯に於ては第一、波斯語、第二、馬太語、第三、亞西里亞の語を用ひ、楕形文字も之に隨て三様の文字を使用し、公文は大抵此の三様の文字を以て同一の事を三段に連記するを常としたり。楕形文字の中亞西里亞文字は最も舊く、波斯文字は最も新しく、紀元五百七十年より同三百七十年までの間に行はれたり。波斯人は數多の點に於て羅馬人の模型なりと謂ふことを得可し。文學美術は其の長所にあらずして科學哲學等に寄與したるものなし。波斯第一の詩人フィルドゥシは紀元後第十世紀の人なりとす。獨り建築術に至ては前代の諸國民に勝れたり。然れども波斯の宗教は純潔にして、偶像を拜せず、神社を壯麗にするの

必要少なかりし爲め、其の建築は王宮の構造、墳墓の經營に關するもの多し。畢竟波斯人の長所は羅馬人の如く天下を平かにし、萬國を治むるの術に存したり。波斯帝國の版圖 波斯帝國は東にはインドス河あり、北には黒海カウカサス山脈、裏海、チャクサルチース及びフクサスの二大河あり、南には印度洋、刺比亞半島あり、又た西には地中海ありて、其の自然的境界を爲したり。東西およそ三千哩、南北はおよそ五百哩、乃至一千五百哩、面積二百万方哩、人口はデライアス王の時には七八千萬もありしならんと云ふ。首府スーサ及びエクパタナと邊境との間には大道を敷設し、専ら官用の爲に驛遞の便を通じたり。是れ又た波斯人が羅馬人のために模範を與へたるものなり。首府のスーサと小亞細亞のサルデースまで凡そ一千七百哩の距離あり。然るに政府の飛脚は僅かに六七日にして之を通過したりと云ふ。

波斯帝國の諸州となりたる亞西里亞、巴比倫、埃及、希伯來人及びフェニシヤ人の事蹟は既に之を記載したり。此外帝國の東端に印度、又た其の西端にリヂヤありて、晉に波斯帝國の一要素となりしのみならず、世界史上に關係する所少からざるか

故に之を次の二章に略記することゝなしたり。

第五章 印度人

印度の名稱 古來印度は地理上の名稱たるに過ぎずして、印度の文明といふは單に其の中にある一人種の文化を謂ふものなり。國家として一の印度なるもの古より今に至るまで嘗て存したることなし。現今その中部及びマドラスの南部には印度人以前の黒色人ありて、四千年來之れに住居し、文明の程度は今に石器時代にあり、ネイルス種族の如きは尙ほ一妻多夫制度の中に在り。又た此外に哲學上及び宗教上に於ては歐洲人に凌駕せんとする印度人ありて、古來一の印度國民一の印度國語、一の印度文明なるもの嘗て存したることなし。人種を異にし、言語を異にし、又た文明の程度を異にしたる雜駁なる人種の住居する所、古來之を印度とは謂ふなり。其の外國に征服せられたるは其の未だ嘗て國民的統一を爲したることあらざるが爲なりとす。

古代の印度 西洋史上に於ける古代の印度に就て注意すべき二事あり。一は古代に於て印度といふときは今の印度と異にして、印度の全部を謂ふに非ず、多

くインドス河とガンヂス河(原名恒河)との間を指すこと是なり。固より古代の人は印度の他部に就て全く知らざりしに非ずと雖ども其の最も明かに知りたる部分はインドス河邊に接近したる部分なり。現今の歐羅巴人は寧ろ此の地方よりも自餘の印度に就て知る所多く、古人とは全く正反對なりと言ふ可し。二には印度の西北境は現今と異なりしこと是なり。古代の印度は今日の如く印度川を以て其の西境となせしに非ず、現今の所謂アフガニスタンを包含したり。又た其北境も今とは異にしてカシミール、以北の山地小チベットの西邊をも包含し、ゴビの沙漠も西人に知られたる部分は印度に屬するものと信ぜられたり。此の地方は悉く波斯の領有に歸したるに非ずと雖ども其の中多くは波斯に征服せられたりと見て不可なかる可し。ヘロドトス曰く、

印度人は吾人が正確に知る所の亞細亞諸國民中に於て極東に位する人民なり。其の東には沙漠あり。然れども印度人は種々の人民にして種々なる言語を使用せり。或は遊牧的生活を爲す者あり、或は然らざる者あり。又た河邊(インドス)の沼澤に住し、生魚を食として生活す云々。

文明及び宗教

印度の文明はイラン(馬太及ひ波斯)の文明と殆んど其の起原を同ふせり。波斯の古文アベスタと印度の古文維陀書との間には符合の點少からず、又た言語の性質に於て最も能く相似たりと言ふ。されば波斯人の祖先と印度人の祖先とは他のアリヤン人種と分離して後も、久しく共に同一の人民なりしが遂に分れて一は馬太及ひ波斯地方に定住し、他は更に進んで印度に入りしものなる可し。蓋し紀元前三千年以上の事なりとす。是より先き印度には黒色にして風俗野蠻の土人ありしが此の侵入者の爲に或は剿滅せられ、或は荒野に驅逐せられ、或は奴隸となりて使役せられたり。紀元前一千五百年頃まで印度人はインドス河の上流バンヂャブ五河といふ義の地に住し、數多の種族に別れ、酋長及び王を戴き牧業を事とし、インドラ(雷雨の神)ワルチ(天空の神)アグニ(火及び光の神)及び其他天然の諸勢力を崇拜し、人民勇敢にして種族間に争鬪多く行はれたり。印度の古文四維陀書の中リグウキダは印度人が猶ほインドス河邊に住し正にガンヂス河の地に移住せんとする時代の作なりといふ。當時は未だ都會あらず、又た政治的組織も各種族自治制にして、各々族長を有し、各族長は同時に王たり僧たり、又た法

官たり、詩人たるが如き状態なりき。牧業生活にして牛馬を養ひ、且つ當時は人民牛肉を食し、ソマと稱する飲料を用ひ、戦車に駕して勇敢に戦ひたり。未だ世襲階級の制も、又た寡婦を焼く等の慘酷なる習慣もあらざりき。

維陀書によるに當時の宗教は埃及、カルデヤ、又た波斯に於けるが如く、天然崇拜にして印度人の崇拜したるは獨り天體の諸現象、山川、草木、牛馬、犬等の諸動物のみならず、祭器、戦車、農具等に及びたり。諸神の間には階級的關係存せずして禮拜者は禮拜中一神を主として他神あるを忘るゝ者の如く、又た名稱異なるのみにて其實諸神を以て同一神となすが如き傾向あり。デアウスピタル(天父の義)は希臘のゼウス(天神)又た羅馬のジュピタル(天父の義)と同一にして元來は天を崇拜したるものなり。ウルナは希臘のユラノス神、アグニは其のイグニス神に等しく、語根の同一なることを知るに足れり。リグウキダには天神十一、地神十一、中間の諸神十一ありて合計三十三神(天)に對する一千餘の讃誦を記載せり。凡そ紀元前一千年以上の作ならんと云ふ。

紀元前一千四百年の頃印度人は進んでガンヂス地方を征服し、印度史上に於て赫

々たる光明の一大時期を開きたり。然れども印度人が全たく此の地方を征服するまでには土人との間に久しく激戦ありて其の結果は大に印度人の風俗習慣及び社會制度を變更せしめたり。此間に印度の詩歌文學大に發達し、又た印度特有の僧侶及び階級制度成立するに至れり。階級制度を生じたるは是れ土人を征服したる結果にして又た僧侶が社會第一の位置を占めたりしは武人が土民と戦ひ之を征服する爲に多く其の勢力を消耗し、且つ土人懐柔の上に於て僧侶の勢力大に關係したるが故なる可し。

第一の階級は僧侶にして之を婆羅門ブラフモンと稱す。第二は王族即ち武族にして刹帝利クシャトリーと稱す。第三は商工にして毘舍バイシヤと稱す。第四は農夫にして首陀ブダと種す。僧侶の勢力により本來の天然崇拜は變じて凡神教となり、万物は皆な梵天王ブラフマといふ神より出でたるものと信ぜられたり。婆羅門は梵天王の口より刹帝利は其の兩臂より毘舍は其の兩脚より、又た首陀は其の兩脚跟より出でたるものと信ぜられたり。梵天王より出で、又た梵天王に歸るは人生の目的にして宗教及び道德の趣旨は全たく人生の患苦を解脱せんとするに在り。輪廻の説是より盛に行はれたり。

又た之と相關聯して印度人は凡て生物を神聖なるものと思惟したり。北部印度には種々なる獨立王國起りて其間には政治上の統一なかりしと雖ども僧侶の勢力により、婆羅門教及びマヌの律と稱するもの行はれて宗教上的一致存したるは歐洲の中世列國の間に一の天主教行はれたるに似たるものあり。但し階級の制度全たく成立したるは紀元前第八世紀頃の事なり。其制各階級の間に婚姻を結び又た交際をなすことを禁じたり。元來此の制度は梵語にてワルナと云ひ、色といふ義なりとぞ。畢竟白色なる印度人が黒色なる土民及び雜種と區別して社會の秩序を維持せんとするより起りたるものなる可し。而して其目的を達するには大に僧侶及び宗教の勢力によりたるを見る可し。

紀元前第六世紀頃に當りて印度に一の宗教改革者出でたり。之を喬答摩ゴタマ又は佛陀と稱す。釋迦は其の族稱なりといふ。人生の患苦を脱し涅槃ニルヴァナに入るの道を説く。印度諸王國の一たる摩迦陀王マカタチャンドラゴプタ之を信し、其の孫アソカ紀前二五〇大會を開き佛教を結集し、佛教大に弘まりたり。アソカ王の佛教に於けるは猶ほ羅馬皇帝コンスタンチン大王の基督教に於けるが如し。一千餘年の間佛教は婆

羅門教と共存したりしが紀元後第八世紀佛教に反對の王出で、之を排斥し舊教大に其の勢力を増長し佛教は遂にシロン島其の他印度以外の地に流布せらるるに至れり。然れども婆羅門教も大に佛教の感化を蒙り其の趣きを變更し、所謂現今の印度教を成したり。

政治上の變遷

印度の歴史は一方に於ては東洋に屬し又た他の一方に於

ては西洋に屬し、東西兩洋の歴史及び文明の連鎖なりとす。其の政治上西洋史に屬するの端は紀元前五百十八年頃波斯王大流士一世の時に開かれたり。大流士一世は版圖を東邊に擴張して印度の西北部を征服したり。爾後印度の一部分は波斯帝國の一州を爲したりしが其の境界は明白ならず固より印度西北部の一部パンヂャブの地方に止まりたりと雖どもヘロドトスに従へば、印度よりの收入のみにて帝國歳入の三分の一以上に當り諸州に冠たりしと云へば、其の富なりしこと以て知る可し。但し古代の印度は今のアフガニスタンをも包含したることは前に述べたるが如し。

紀元前三百二十七年マセドニア王アレキサンデル波斯帝國を滅し進んで印度を

征略したり。當時パンジャブ地方には數多の小王國ありて人口稠密且つ農事能く行はれ而して人民は亞細亞人種中の最も勇敢なるものにして甚だ頑強なる抵抗を爲したり。ガンヂス地方には數多の象及び大軍を有する王國ありとの風聞は或はマセドニヤ王の兵をして遂に進軍を拒み流石の大王をして師を還さしむるに至りし一原因なりと云ふ。紀元前三百二十三年アレキサンデル死して大王の帝國分裂し、バクトリヤ及び印度は大王の一將にしてシリヤ王國の祖たるセリユーカーカス、ニケトルの所領に歸したり。當時ガンヂス地方にはサンドラゴッタスといふ英邁の王現出し、勢威パンヂャブ地方にも及びたりしがセリユーカーカスは彼に使節を遣りて和親を結び其女を以て彼に娶したり。西洋史上に於て印度文明の中心たるガンヂス地方に接したるは歴王山に非ず實にセリユーカーカスを以て嚆矢とす。

共和政治と云へば歐羅巴の大陸に限るが如く思惟するは大なる誤謬なり。アレキサンデル大王のパンヂャブに侵入するや東進するに隨て希臘に於けるが如き數多の共和國あるとを發見したり。これ等の共和國は概ね貴族的共和國なりし

がニサといふ一市に於ては主權は三百人を以て組織したる元老院に存したり。是等の諸共和國はマセドニヤ王の來侵に接して合同し大王の遠征中最も強硬なる防禦力を現はしたり。今に此の地方の人民は勇敢にして且つ民主的の制度を固守すといふ。

希臘の文明は歴山王の遠征以後印度に影響を與へ又た多少極東にも其の波動を及ぼしたるなる可し。而して中世以後印度の文明は支那の文明と共にアラビヤ人を経て頗る西洋史上に感化を及ぼしたり。紀元後第五世紀の後半期韃靼人進入し來りしが一千年頃までは純然たる印度の文明及び政治を維持したり。爾後

回教徒に征服せられ又た第十八世紀に於て遂に英國人に征服せられたり。英人此の地を征服してより梵語は歐羅巴の學者に知られ所謂印度人中婆羅門種族は歐羅巴の白人と根原を同うすることを發見し近時の新學問たる比較宗教學を勃起せしめたり。近世史上に於ては支那と共に印度は西洋文明の爲に缺く可からざる要素を寄與したること少からざるを見る可し。

第六章 リヂヤ王國

リデヤ王國の起原

小亞細亞の半島には古來種々なる人民ありしが就中
フリギヤ人は最も夙くより此の地に住し一時全半島を占領したり。東西より諸
人種到來し、彼等は漸次内地に退縮したりしも其の版圖大にして土地豊饒、民俗勇
敢にして農業に従事したり。紀元前一千以前市邑を有し貿易昌盛なりしと云
ふ。其の首府はゴルデイウムにして其の王は一代毎に交々ゴルデアス及びミダ
スと稱したり。紀元前五百六十年頃遂に小亞細亞の西部に起りたるリデヤ王國
の一州となり、是よりリデヤは小亞細亞の最大強國となりたり。

リデヤはエジアン海に流るゝヘルマス及びケイスターの二大河を包含したる豊
饒の平原にして山中には多く金屬を産出し流水に随つて沙金を流下せしめたり。
首府をサルデイスと云ひ其の牙城は峨々たる巖石の上に築かれたり。

其の人民は雜種にして歐羅巴より進入したるアリヤン人種と土人との混合なり
しならん。然れどもリデヤの諸王は希臘人と同種なりと主張して希臘の神社に
厚く獻納することを勉めたり。海岸は本と希臘人の殖民せし所にして始はリデ
ヤに屬せざりしが後遂にリデヤの一部分となりたり。

リデヤの王統に三朝あり。第一朝はアッチアデイ家にして紀元前一千二百廿九年
まで持續したりといへど其の事蹟は全たく神話的にして眞實は考ふ可からず。
第二朝のサンドニデイ家は紀元前一千二百廿九年頃より七百二十四年まで凡そ
五百年の間リデヤを統治したりしが希臘人は之をヘラクリデイ朝と稱したり。
此時海岸には希臘本部より移民來りてアイヲニヤ諸市を建設したり。晩年王
室と貴族との間争鬭生しマームナデイ家の首領たるキゲス遂に最後の王カンダ
ウレースを弑して其の位を奪ひ、是より以後マームナデイ家の治世となり五代英
邁の君主ありてリデヤは西部亞細亞の諸強國と併ひ稱せらるゝに至れり。第一
の王キゲス紀前六八九—六五三は埃及の王サメチカスを助けて亞西里亞の羈絆
を脱せしめ再び獨立の王國たらしめ又た小亞細亞の西洋に於ける希臘人の諸市
を攻撃しコロホンを略したり。是より累世其の政策により漸次希臘諸市をして
リデヤの所屬たらしむるに至れり。當時コーカサス地方よりキンメリーと云ふ
遊牧野蠻の人種小亞細亞に亂入しリデヤの首府サルデイスも牙城を除くの外其
掠むる所となれり。之が爲に王キゲス戰死しリデヤの興運一時中止せられたり。

其子のアルデイスは亞西里亞王アシュルバニバルと和を結び其の屬邦としてリ
 デヤを治め又希臘人の一市ブリーニーを略したり。其孫アリアツテース三世
紀前六〇三 小亞細亞より蠻人を一掃し名聲隣邦に振ひ、王國盛大の基を開き、希臘
 諸市中に於て最も重要なスマルナを降し海上に向て其版圖を擴張したり。此
 時ミデヤ東方に起り巴比倫と聯合して亞西里河を滅したり。紀前六〇六 其の結果と
 してミデヤの西境は小亞細亞に於てヘーリス河に達し、リデヤと境土を接するに
 至れり。ミデヤ王サイアクサレースは口實を設けて河を渡りリデヤを侵し六年
 間の戰端を開きたり。ミデヤは巴比倫と同盟をなしてリデヤと戦ひしが大合戦
 の最中に於て日蝕起りしかば兩軍神意を恐れ戰を止め永久の和約を結び加ふる
 にリデヤ王の女をミデヤ王の子アスタイヤジースに嫁せしめたり。
 五代の王クロイソス凡そ紀前五五に到りてリデヤ王國の勢力は其の絶頂に達し
 たり。西は海岸の希臘諸市を征服し地中海及び黒海に於ける貿易の權を掌握し
 東はリギヤを除くの外ヘーリス河以西の小亞細亞悉く其の主權に屬したり。希
 臘諸市より徵收する所の税と其の金坑より得る所の收入とによりリデヤ王國の

富天下に冠絶し後世富を言ふ者西洋にては必ずクロイソス英サリを稱するに至
 れり。

前述の如くリデヤはミデヤと親和して姻戚の國たりしが紀前五五十八年頃ベ
 ルシャ王サイロスはアスタイヤヂースを虜にしミデヤ王國を顛覆したり。クロ
 イソスは其仇を報ぜんと欲して希臘デルフヲイの神託を請ひたりしに、大王國を
 滅ぼさんとありしかば王は喜んで巴比倫、埃及又アスパルタと同盟して波斯と戰
 端を開くの準備を爲したり。然れどもクロイソスは波斯王の實力を測らずして
 デイリス河を涉り兵を進めしがサイロス大軍を率ゐて來り戦ひ兵數優勢なりし
 が爲にクロイソスは兵をサルデイスに引上げ使者を巴比倫、埃及およびスパルタ
 に遣はし五ヶ月以内に援兵をサルデイスに集中せんことを請求したり。然るに
 サイロス急に兵を進めてリデヤに入りクロイソスの同盟諸國をして聲援を爲す
 に違なからしめたり。首府サルデイス陥り、クロイソス捕はれてリデヤは遂に波
 斯の一州となれり。サイロスはクロイソスを赦して善く之を遇し其顧問と爲し
 たり。クロイソスはリデヤ人民をして他邦に遷さるゝの不孝を見ざらしめんと